# 百年の眠り

水花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
百年の眠り

【Ｎコード】
Ｎ６０７３Ｔ

【作者名】
水花

【あらすじ】
君のいる世界へ、時間軸を遡り転生する。そう約束したディーンを信じてスティールは探し続けていた。そうして、ある日見た夢で・・・・・。
一方、狭間の界で幸せに暮らしているスティールたちをよそに、銀の界ではシャールが孤軍奮闘していた。王と王妃のしたことの償いをその血筋に求められ懸命に尽くす日々。そうして起こるべくしてその事件は起こった。
（サイトからの転載です）

## 夢で逢えたら（前書き）

Ｗｏｒｌｄシリーズ。執筆者：水花サイドの物語です。「Ａｎｓｗｅｒ」ではスティールとローレンスが中心でしたが、こちらではスティールに恋するもう一人の少年シャールが中心になります。

## 夢で逢えたら

時間も空間も越えて、君に逢いに行くよ。

「わ～ん、ディーンってば、どこにいるんだろう～」

ここはスティールの自室である。夕暮れのオレンジ色の光が、大きく取られた窓から差し込んでいる。
今日もこの世界のどこかにいるディーンを探して、街中を歩き回ったスティールは、疲れてベッドに突っ伏していた。紅茶色の髪の毛が、白いシーツの上で、ばさりと広がった。
「さあ？まあこの世界のどこかには居るんでしょうよ」
窓際に羽を休めたリルフィは、あくまでクールに答えた。ディーンを探すのに効果的な方法について、実はスティールに内緒にしている事があるのだが、自分から言い出すのは禁じ手であるため、口を噤んでいる。
「そうだね～意外に近くに居たりしてね。で、もしかしてもう会ってるかも？」
スティールの机を、とことこ歩きながら、ジルファは言った。ジルファももちろん、リルフィに倣っている。
ジルファの場合、所詮他人の恋路という面が、あったりもする。
「二人とも、意地悪っ！」
「あら。アナタのお願い聞いて、ディーン探すの手伝ってる私に、そんな事言うの？」
「ああほら、手伝っているのは“私たち”だよ、ここは訂正入れるよ？」
「入れなくっていいわよ！何一括りにしてるのアンタはっ！」
「え～・・・そんな、照れなくっても」

「だれが、照れてるですってっ。その目は節穴かしら」
いっそ抉ってしまうわよ？しゃーと金の羽を逆立てて威嚇するリルフィに、空気読む？何ソレ美味しいの？と真顔で煙に巻くジルファはふっと笑って、海の青とも空の蒼ともつかぬ羽を振った。
人型であったならば、気障ったらしく髪の毛でもかきあげてるんだわとリルフィは睨む。
空気を読まずとも、いや、流れていた空気を自分の都合のいいように変える男は、真顔で答えた。
「君が望むのなら何だって差し出すけどね・・・でも、この目は上げられないな。だって、まだまだ君を見ていたいからね！」
ジルファの言葉が終わるや否や、びりびりとした振動が部屋に走り、スティールは突っ伏していたベッドから飛び起きた。
「えっ、何ごとっ？地震っ？」
逃げなきゃっ。クッションを抱えて今にも飛び出しそうなスティールに、のんびりとジルファは羽を振った。
「違うよ。今のは、リルフィのした事だよ」
「・・・え、っと・・・リル・・・？」
振動は収まったが、リルフィは肩をいからせて（鳥の肩ってどこなんだろう）小刻みに震えていた。
見た目は愛らしい、美しい金の鳥なのに。何やら彼女の方からおどろおどろしいモノが立ち上っている気がして、スティールは声をかけるのを躊躇ってしまった。
少し突付けば破裂する風船みたいだ。
けれど。ジルファは少女の躊躇いなど、木の葉の如く蹴散らして、駄目押しの言葉を。
「おやリルフィ・・・感動して、言葉も無いかい？嬉しいね！」
ジルファは、さあ僕の腕に飛び込んでおいで！的に羽を広げた。
あ、・・・今ぶちって音がしたわっ。スティールはクッションを抱え込み、固唾を呑んでジルファとリルフィを交互に見た。
いや、そもそも、何で自分の部屋で固唾なんて呑まなきゃいけな

いんだか。
スティールの頭の中、冷静な部分はそう突っ込みを入れた。
「〜〜〜っ、誰が感動なんてするものですか！今のは気色悪くて、鳥肌がたったわよっ！スティール！」
「っ、ひゃいっ？」
突然自分の名前を呼ばれ、裏返った声で返事をするスティール。
「今晩は帰らないわっ！いいこと、わたしが帰ってくるまでに、そいつの羽を毟って、焼き鳥にでもしておしまいなさいっ」
「って、ちょっとリルっ、」
少女の制止も聞かず、金の鳥は窓から空へと飛び立った。鮮やかな金の影は、見る間にオレンジ色の空に溶け、すぐに見えなくなった。
「・・・ふっ、照れちゃって」
可愛いだろう？焼き鳥と言う彼女の言葉に動じたふうは全く、毛ほどもなく、ジルファは優雅にさえ感じられる動きで、さっきまでリルフィが止まっていた窓際へと舞い降りた。
そうして彼女の消えた空を眺めている様子だった。
スティールはクッションに顎を埋め、うう〜ん、照れているのとは、違うんじゃないかなあと思っていた。
鈍いと言われる（主にリルフィから）少女でも、同じような遣り取りが何度も繰り返されれば、流石にわかってくるというものだ。
ただ、少女がわかるのは、其処までで。それ以上をジルファに尋ねても、彼はのらりくらり、または煙に巻くので、明瞭な答えは得られずじまいであるし。リルフィに聞くことは、流石に少女もしなかった。
毛を逆立てて嫌がる姿が、容易に想像出来たからだ。
何ソレ、あんたわたしに嫌がらせでもするのっ。
盛大に非難を受けそうでもあった。
スティールは再び、クッションごとベッドに突っ伏した。今の遣

り取りで、余計疲れが増したようだった。

「ね～・・・ジルファさん。リルもだけど、あたしのハナシ真面目に聞いてなかったでしょ～？」

そんな事あるもんかとジルファは答えたけれど、目線は空に向けたまま、スティールの方を振り返りもしなかった。とてもじゃないが、その言葉を額面通りには受け取れなかった。

少女は年に似合わぬ、深い大きなため息をつき、いいもん、一人だって探すもんと呟いた・・・。

『君とおなじ時を生きたいんだ』

束の間、シャールの体を借り受けて狭間の界に現れたディーンは、少女を真っ直ぐに見て、言った。

それが叶うなら・・・なんと素晴らしいことかと少女は思う。

賑やかに、他愛ないことで笑って、日々を過ごせるのならば・・・

それは、彼と初めて出会った世界では、到底叶わないことであったから。

彼自身は納得して受け入れた結末であっても、思い返せば今でも涙が零れるほど、少女にとっては哀しい出来事であったから。

『あなたのこと、好きよ』

少女は頬を染めて答えてくれた。

けれど、その“好き”の意味は、少女自身、まだわかっていなかった。

好きに色々な意味があることすら、よくわかっていなかった。

少女自身判らぬことを、彼は知っていたのだが・・・再び出会えた後の、己の行動次第だとも思っていた。

魂に、誰にも奪わぬよう過去の記憶を刻みつけ・・・少女の住む界へと生まれることが出来たなら。

その時こそ・・・己の唇で、声で、君に告げるよ。君を。

ふわふわと雲のような・・・霧のような白い靄がたゆたっている場所を、スティールは歩いていた。
何処を歩いているのか、歩いた先に何があるのかもわからないほど、視界がきかない場所である。足元も綿を踏んでいるようにふかふかしていて、落ち着かなかった。
霧が晴れたかと思えば、横合いからさあっとレースみたいな七色の光が差し込んだり、頭上からキラキラ光りながら星が零れ落ちたりする。
食べたら甘そうな、金平糖のような星。こつんと頭にあたり、驚き空を見上げたスティールは、星を撒いたような濃紺の空とそこに架かる大きな虹を見て、目を丸くした。
虹の上を、魚が跳ねたわ。一匹、二匹、ああ、何匹も。
その空も、たちまち白い雲に隠されてしまったのだけど。
ああ、これは夢なのねと、スティールは納得する。こんな荒唐無稽な光景が広がっているんだもの、と。
夢とわかって、夢を見ているなんて、ヘンな感じだわ。
ぽん、と足元の雲を蹴る。すると雲は色を変え形を変え・・・やがて、色とりどりの花になった。
「わ～綺麗・・・って、え」
白いワンピースの裾を引きずるのも気にせずに、スティールはしゃがみこんで花に触れた。月の雫を受けたような、光沢を放つ花は、うっとりするほど美しかった。
花々に見蕩れている時、さあっと霧が一気に晴れ・・・まっすぐな道が目の前に広がり、スティールは目を瞠る。
「何が起こったんだろ・・・？」
首を傾げる彼女は、道の向こうに見えた人影に目をこらして・・・

それから、ワンピースの裾を揺らして駆け出した。
「・・・ディーン・・・・！」

これは夢なのに。でも、夢でも構わない。
また、逢えるのならば。
目覚めたとき、心が潰れそうなほど悲しくても。

「ディーン！よかった、また逢えた」
「スティール？君が、何故ここに？」
躊躇いもせず青年の胸にしがみついた少女は、彼の驚いた声に顔を上げる。彼は少女が初めて会ったときの姿・・・背の高い、青年の姿をしていた。
つきんと胸の奥が痛むけれど、スティールは青年の体を抱きしめる。夢の中なのに、体温さえ感じられる気がして。
「スティール？」
ああ、彼の声だ・・・また会えたら、あたしは何と言おう？言いたいこと、気持ちが沢山あり過ぎて、その時が来るまでに整理できるといいんだけど。
「スティール？」
これはあたしが見ている夢なのに、ヘンね、何故彼はこんなに困ったような声を出しているのかしら。
彼の体に抱きついたまま、スティールが首を傾げていると。大きな手で肩を掴まれ、そっと引き剥がされた。
彼の顔を見上げると・・・彼は優しい顔で、少し困った風に笑って言った。
「これは、一体誰からの贈り物だろうね。とても幸せな夢だよ」と。
いささか生殺し状態ではあるけれど、と呟いた彼の声は、サイワイなことに驚いた少女には届かなかったらしい・・・。

「これはあたしの見ている夢よ？あなたも、同じ夢を見ているって言うの？」
スティールの呟いた言葉に、ディーンは腑に落ちたと返した。
「夢とわかって、見ている夢じゃなかったかい？そして、奇妙な雲が出ていたりして」
「そう。夜空に虹が架かっていたり・・・ねえ、ディーンは、此処が何処かわかるの？」
これは、夢じゃないのと尋ねた少女に、これは夢じゃないよと答えることが出来たなら、どんなによかったことだろうとディーンは思った。首を振って、答えた。
「何処とは言えない場所。何処に在るか判らなくても、何処かに存在していると言われている・・・夢が集まる場所だよ」
私も話には聞いたことがあったけれど、訪れる事があるとは思わなかった。
なにより・・・此処で、君に会えるなんて思わなかった。

そう・・・笑う彼の顔は、笑顔は、声は・・・スティールがもう一度会いたいと思っていた、あの時のままの彼で。

「・・・何故泣くの」
「わからないわ。なんでか涙が出てくるの」
「泣かないで」
「かなしいんじゃないの。それだけは言えるけど」
「・・・じゃあ、嬉しい？」
「うん、多分、それが一番近いとおもう」

あとから後から零れるスティールの涙を、ディーンは指先で拭う。きらきらと・・・星の欠片のように零れるそれを、全て拾い集めて・・・目覚めた向こうに持っていくことができればいいのにと思った。

涙をこぼす少女は、安心したように笑っているので。
それでも・・・彼女が涙を零すさまを見るのは、辛い。泣き顔ばかりさせた最後のときを思い出してしまうから。
せめて、彼女が泣き止んでくれますようにとディーンは彼女の涙を拭いながら願った。
すると。
「おや・・・ほらごらん、君の涙が花に変わったよ」
スティールが零した涙が、あかい花に変化した。驚き目を瞠るスティールの耳元に、ディーンはその花を挿してやった。
「よく似合う・・・可愛いよ。おや、ようやく笑ったね？君は笑っている方がいい」
「ディーンが手品なんてするから、驚いたの」
「手品じゃないよ・・・魔法でもないけどね。ここは夢が集まる場所って言っただろう？夢の中では、どんな事でも叶うから」
「じゃあ・・・ディーンに、此処でまた会いたいって願えば、それも叶うの？」
「いいや・・・おそらく、叶わないだろうね。僕たちが此処に来られたのはどんな偶然の力が働いたものかわからないけれど、此処は誰かが見た夢が集まる場所・・・そうして集まった夢が、再び世界を巡るのに集う場所。
水が循環するようにね」
「それって、どういう事？」
「つまり、夢見る者自身は、来られない場所なんだ・・・そう、言われている」
僅かではあるが、此処に来た者が居るからこそ、伝えられてきた場所ではあるけれど。
「私たちはおそらく、界渡りするみたいに、お互いこの場所へやって来たんだろうね」
夢を伝い、渡り・・・飛んできた。互いに逢いたいと願っていたから起こった、これは一つの奇跡、なんだろうか？それとも、誰か

からの贈り物？
「夢の中では・・・時間も空間も、関係ないからね」
さて、私はこの姿になるまで、あとどれくらい時間が要るだろうねと呟くディーンに、スティールは首を傾げた。
「なあに？時間がかかるって、どういうこと？」
「何でもないよ。夢の中でも、君と逢えて嬉しいよ」
「あたしもだよ。あたしね、あなたの事探しているよ。きっと貴方を見つけてみせる。貴方がもしあたしを忘れてても、見つけるから・・・だから、待っててね」
ディーンは深紫の瞳を瞠り・・・そうして、優しく笑った。スティールがとても好きな、笑い方で。
「私こそが、君に待っていてと言うつもりだったんだけどね。先を越されてしまったね」
「だって、まだ胸を張れるほどの大人の女性になれてないんだもの。もう少し待っていて欲しいなあ、なんて」
ふふ、と笑った少女の体を、ディーンは思わず抱きしめていた。
ディーン？驚く少女の体は、細くて未だ未発達だ。けれど柔らかい肌の感触も、温かな体温や、確かな鼓動さえ感じられるのに。
これは、夢なのだ。
「ディーン？どうしたの？顔を見せてよ」
少女の声に抱きしめていた腕を緩め、顔を覗き込む。すると少女は自ら腕を伸ばし、彼の体にしがみついてきた。
「あのね、今度逢えたら、もっと色んなところに行って、色んな話をしようね。貴方に見せたい景色が、まだまだ沢山在るし、貴方と一緒にしたい事だって、同じくらい沢山。貴方に逢えたら何を話そう、何をしようって、考えるとあたし、とても楽しくなるの」
少女の温かい体と、明るい声で・・・ディーンは自分の胸に湧いた暗い雲がたちまち消えていくのを感じていた。彼女は再会できる日を夢見ているというのに、記憶を抱いて生まれてくると大見得を切った己がここで挫けてどうする、と。

「貴方を探すわ。行き当たりばったりで出会えるほど、狭い世界じゃないでしょって、もっと頭使いなさいよって、リルには呆れられてるんだけどね、まだ、よく探す方法、わかってないけど、でも」
あなたに逢いたいから・・・だから、探しているから。
待っていてね。
「君が見つけてくれるのを、楽しみに待っているよ」

ディーンの、その言葉が、合図のように。
キラキラと光る粒を纏った、霧が渦を巻いた。
抱きしめていた筈の腕が離れ、声も遠くなっていく。

「ディーン！」
「スティール！また逢える日を、待っているよ」
願ったからといって、その願いが叶うとは限らない、けれど。
願わなければ・・・何も始まらないのだ。だからディーンは強く願う。
どうかどうか、あの愛しい少女と、また逢えますように。
今度こそ夢の中でなく、現の世界で・・・ああでも。

夢の中で出逢えたこと・・・それは、なんと甘美な“夢”だったことでしょう。

「ふわ～よく寝た」
けたたましく鳴る目覚まし時計を止め、スティールはベッドから身を起こし大きく背伸びをした。
「なんか夢、見てた気がするけど・・・なんの夢だっけ」
とてもいい夢だったはずなのに、目覚めると忘れてしまったような。

寝起きの、あちこちが跳ねた頭のまま考えていると、羽ばたきの音が聞こえ、するすると窓が開いた。
「おはようスティール。朝っぱらから、何考え込んでんのよ」
リルフィが帰ってきたのだった。いつも何処に行くのか、尋ねても答えてくれないが、こうして帰ってきてくれると安心する。
ジルファは、では私も野暮用あるから、出てくるよと言って、夕闇迫る空を飛んで行ってしまったきり、まだ戻っていない。
「お帰りリル、そんでもって、おはよう。や、考え込んでるっていうか、なんかいい夢見た筈なのにさっぱり思い出せなくてね」
「ふうん・・・あら、あんた、頭に何付けてるの？」
「へ・・・？」
「耳元の、それ・・・赤い奴。何なの？」
赤いモノ？スティールが両手で耳元を触ると、柔らかな感触が指に触れた。
目の前に持ってきて、首を傾げる。萎れかけているが・・・鮮やかな、あかい花であったから。
「なに、この花・・・」
呟いたスティールは、その瞬間、優しい腕と声を感じた気がしたけれど・・・ほんの一瞬のこと。
夢の中に仕舞いこまれた“記憶”は、彼女の現に浮かび上がることは、ない。
リルフィは、首をかしげ、もしかしてあんた・・・と呟いたきり、まあ、いいでしょうと自己完結した。
リルフィには、その花がどういう性質のものか、わかったけれど。
少女が思い出さない夢の記憶ならば・・・夢の中に眠らせておけばいい。
いつか、現でその“夢”を叶えれば、いいのだから。それまで、“夢の記憶”が少女の心を影から支えるだろう。
「・・・あの王子、かなりスティールに惚れてるのね・・・」
夢を渡って逢いに来るくらいなんだから・・・いや、互いに夢を

渡り合ったというべきなのかしら。
「何か言ったリル」
「いいえ、何も。アンタところで早く着替えないと遅刻するわよ」
「え・・・うええっ、もうこんな時間？まずいわっ」
遅刻、の言葉を聞いた途端、騒々しく動き出す少女を見・・・リルフィはため息をついた。色気もなにも、あったもんじゃない。
この様子をディーンが目にすれば、百年の恋も一度に覚めるに違いない、と。

「じゃあ、行ってきます！」
「気をつけてね、慌てて転ぶんじゃないわよ」
「は～いっ」

元気に家を出る少女に声を掛け、さて、とリルフィは指定席の窓辺に羽を休める。
「夢から何かを持ち出せたなんて、前代未聞よね」
ほ～んと、あの子といると、驚かされることばっかりだわ。
くすくすと、ひそやかに笑いながら、リルフィは少女の机の片隅を見やる。

そこには、硝子のコップに挿された、一輪のあかい花があった・・・。

いつかあなたに逢いに行く。
だからそれまで・・・待っていてね。
あたしが、おとなになるまで。

## ひみつのおかたさま（前書き）

コメディータッチのＳＳですｖ

## ひみつのおかたさま

「あら、これは何かしら」
ねえチェスミー？金の界を治める金の君は、白い細い指先で、一枚の紙を摘みあげ、ひらひらさせ・・・己の傍近くに仕えるチェスミーに尋ねた。
「さて・・・私も気がつきませんでした。一体誰が置いたのでしょう」
もしかして、曲者がっ。そう言うや否や、腰の武器に手を伸ばそうとする彼女を、金の君は笑いながら押し留めた。
「いやね、チェスミー。もしそんな不届き者が居れば、すぐに気付くでしょう？誰かの・・・いえ、何処からかの、他愛ない質問状よ」
はあ、そうですかとチェスミーはいささか気が抜けたような声で答えた。
金の君は他の界に比類なき統治者であるが、やたらと面白がりな所があり、傍仕えの者は振り回される破目になる。今度は一体何だろうと、警戒心を強めるチェスミーを他所に、金の君は手にした紙に目を落とし・・・読み上げた。
「ええと、何々？“質問その一。金の君は何歳ですか？”」
ぴしっ。静寂に満ちた宮に、なにやら不穏な音が響いた気がして、チェスミーは腰を浮かす。
「・・・ほほ、下らない質問ね。この界を始原から治めているわたしに向かって。次に行きましょう」
金の君は優雅に微笑んだ。いい度胸じゃないというドスの効いた声を、チェスミーは聞かなかったフリをした。
「“質問その二。ジルファとはどういう関係ですか”」
まあ、何だかとても答えるのが難しい質問ばかりが続くわね。
金の君が滝のように肩を滑り落ちる金の髪を指で梳きながら、ため息をつくのを見て、チェスミーはおやと首を傾げる。

ジルファといえば、リルフィに好きだの愛してるだのを連発しては、迫っている男だった。風変わりな男ではあるが、そうわるい男ではなかろう、と彼女は思っていた。その根拠はなんなのよっ、とリルフィが聞けば喚くこと間違いなしだろうが、チェスミーなりの根拠はあった。

友人には言っていないけれど。

そのジルファが、御方様とどう関係するのかしら。時々ジルファがこの宮を訪れては、御方様と何やら話をして、そしてリルフィをからかい混じりに口説いていく姿なら、飽きるほど見てきたのだけど。

チェスミーが答えを待つ間、金の君はじいっと質問状を睨み、そして、ふっと笑った。

「可愛い子を攫っていく、憎たらしい奴かしらね」

言ってみれば、嫁と姑かしら・・・あらやだ、わたしが姑・・・なの。

自分で言っておいて、眉を潜めている金の君だった。

チェスミーは思わず噴出してしまった。

だって、本当のこと言うわけにいかないじゃない。

ジルファとわたしの関係なんて。元々は、一人の同じ存在でした、なんてね。

内心ごちる金の君。そして、質問状に目をやると、そこには最後の質問があった。

「“質問その三。金の君の性別は？”」

ごごご・・・低い地鳴りのような音が響き、宮自体が揺れている。今度こそチェスミーは立ち上がり、腰の武器を手に取り辺りを警戒する鋭い視線を投げた。

「御方様！なにやら異変が起きております！お気をつけ下さいっ・・・・御方、さま？」

金の君は細い肩を小刻みに震わせていた。長い金の髪が頬にかかり、美しい容貌を覆い隠していて、チェスミーからは窺えなかったが。

低い呟きが赤い唇から零れるに至り、彼女は背筋に冷たい汗を感じる破目になる。

「・・・まあ、なんて無礼な質問ばかりなんでしょうねえ・・・何処の誰が、こんなもの寄越したのかしら。ねえ、見つけたら、ただじゃおかなくてよ？」

ふふふと低い声で呟きながら、金の君はそれはそれは、美しくも物騒に笑ったのだった。

チェスミーの必死の叫び声が届かなかったら、金の君の住まう宮は、原因不明の崩壊をしていたかもしれない。

「御方様っ、どうか正気に返って下さいっ」

「ほほ、わたしはいつだって正気よっ、加えて、いつだって本気ですとも！」

「尚更まずいです御方様っ」

後に。あの時は心底どうしようと思ったわよと、深いため息をつきながら、チェスミーは友人に語ったものだった・・・。

## ひみつのおかたさま～御方さまとジルファのある日の会話～

「ねえジルファ。この間とっても無礼な質問されたのよ」
「ほほう、あなたに、ですか。それは命知らずも居たものですね・・・・おっと危ない、殴らないで下さいよ。で、どんな質問をされたんですか？」
「憎たらしい、顔ぐらい殴らせなさい。減るものじゃなし」
「減らなくても、顔に痣なんかこしらえて帰れば、リルフィが心配するじゃないですか。彼女を悲しませたくないんです」
「ああら、リルフィは全然、爪の先程も気にしないと思うけど・・・・ま、貴方がそう思うのは自由よね」
「彼女は照れ屋なので、表に出せないだけですよ、内心は心配してくれるんです」
「ふ～～～ん・・・ところで、コレよ。“何処かの誰かさんが置いていった質問状”」
「ほほう・・・何何？これはまた、本当に命知らずな質問ばかりだ。いっそ天晴れというか」
「言わなくてよろしくてよ。と言うか、殆ど貴方にも関係するものじゃない」
「そうですね。まず年齢、これは世間一般的な言葉で言うなら、私たちは“同い年”ですしねえ。ところで御方様、正確な年って、覚えてらっしゃいます？・・・いたたたたっ、離れ業とは酷いですね」
「何よ、その程度の石くれくらい、避けなさいよ。貴方は自分の年も覚えてないわけ？」
「はあまあ～何せ、年なんか数えるの、疾うに止めてしまってますしねえ～というか、私たちが“私たち二人”に分かれる前から、止めてるんですが・・・？」
「そういえば、そうだったかしら？」
「そうですよ。最も、リルフィと出逢ってからの年月は数えていま

すとも！」
「・・・ああそう」
「何ですかその嫌そうな顔は。当然じゃないですかちなみに今は彼女と出会って・・・」
「はいそれは置いといて、次の質問よ」
「置かないで下さい、話くらい聞いてくれてもいいじゃないですか・・・ええと、ジルファさんとの関係ですねえ・・・関係ねえ」
「チェスミーが傍に居たものだから、答えられなかったわよ」
「まさか、元々は同一人物です、なんてね」
「同一人物だって信じられないくらい、顔も体も変わってしまったけれどね」
「それは仕方ないでしょう。一つであったものを二つに分け、心も・・・言ってみれば不均衡な分け方をしたんですからね。バランスを保つのが役割の“君”が、なんとバランスを崩す事をしでかしたものか・・・これも恋のなせる業か・・・」
「はいそこ～ストップ。惚気るの止めないと今度はコレ直撃させるわよ」
「石のテーブルは勘弁して欲しいものですね。確かに同一人物だとは思えないくらい違ってきてますが、それでも、いわゆる“兄弟”くらいには似てるでしょう」
「ええそうね、不本意ながら・・・あら？そういえば私は何故この形を取ったのかしらね」
「私が男性形を取ったからでしょう？」
「そうね・・・もとは私は、中性形を取っていたんだわね」
「リルフィを拾った頃は、まだそうでしたね。リルフィが女の子だったから・・・あ」
「何？その今更気がついたってカオは」
「・・・リルフィが女の子になったのって、確かスティールの姿をそっくり写したからでしたね・・・」
「元々の姿って・・・というか、性別って、何だったのかしら」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
「・・・まあ、リルフィが可愛いことには変わりないし、細かいことはもういいのよ」
「そうですね、深く追求するのは止めておきましょう。ところで、このお茶美味しいですね」
「そうでしょう。この間市場で買ったのよ」
「また出歩いているんですか。傍仕えの者が心配するから程々にした方がいいのでは？」
「いいじゃない。この目で自分が治めている界を見、住民の声を聞くことも、大切な勤めよ」
「・・・公私混同」
「今何か言ったかしら？」
「いいえ、お茶請けのお菓子があまりにも美味しくて、感動の声をあげただけですとも！」

# Pieces of tears（前書き）

「夢で逢えたら」後日談

# Pieces of tears

「・・・あれ、何で僕、泣いているんだろう・・・」

カーテンの隙間から、朝の光が差し込んでいる。雀の囀りもにぎやかに聞こえてくる。街は眠りから覚めて、慌しくも賑やかに動き出している。

いつもと変わらない朝が来たはずなのに、何故か頬はしっとりと濡れていて、僕はその原因にちっとも思い当たらなくて、困惑する。

首を傾げながらも、身を起こして冷たく濡れた頬を両手で、ぐいと拭う。

「何か、夢見てた気がするけど・・・なんだったっけ」

とてもいい夢だった気がする。内容は少しも覚えていなかったけれど、薄っすらと香る残り香のように、ふわふわして、温かい感触すら感じられるような・・・いつまでも包まれていたいとすら思うような。

この涙はもしかしたら、其処から引き剥がされた故のものだったのかもしれない。

「あ～あ、思い出せないのが、少し悔しいか、な」

思わず呟いてから、苦笑する。所詮“夢”の話なのに、すでに思い出せない、夢の中の話なのに思い出したがる自分が可笑しかったのだ。

「そろそろ起きないと、遅刻するかな」

ベッドサイドの時計を見ると、学校に行く準備をする時間になっていた。慌ててベッドを飛び降り、服を着替えようとして、気がついた。

「・・・これ、何だろう」

ベッドのシーツの上、きらりと光る何かが転がっていた。朝の光を柔らかにはじく、無色透明な、珠。

拾い上げると、それは手のひらに握りこめるくらいの大きさで・・・僕はまたも首を傾げた。
こんなもの、夕べ眠る前には無かった。もちろん、僕がベッドに持ち込むはずはないし。
う～んと首を捻っていると、下の階から母親の声が聞こえて、僕は瞬時に我に返る。
「うわ、もうこんな時間か！」
時間はいつの間にか経ち、このままだと遅刻ぎりぎりだ。
慌てて服を着替え、荷物を引っつかみ、慌しく階段を駆け下りた・・・。

透明な珠は咄嗟に、ズボンのポケットに入れて。

「行って来ます！」
いってらっしゃい、の母の声を背中で聞きながら、いつもと変わらない日常に、僕は踏み出したのだった。

夢の記憶のことなど、もうすっかり忘れて。

これはきっと、約束の証。
再び逢うための・・・そう、互いが願った、証。

# 水面下の攻防（前書き）

死の間際の〈銀の界〉王様ファミリーのＳＳ

## 水面下の攻防

ゆっくりゆっくり、水の中に沈んでいくように、意識は遠くなっていく。視界も暗くなり、何の音も聞こえない。ああ、これで本当に終わりなんだなとディーンは諦めや安堵や・・・悲しみなどが複雑に入り混じった気持ちを抱えていた。生に対する未練なら、そりゃ山ほどあるが、自分が出来うる限りの事は為した。守りたいと心から望んだ少女を、守ることが出来た。最後に見たのが・・・泣き笑いの表情だったのが、少し悔やまれるけれど。

あの少女と・・・もっと違う場所で会えたなら、こんな悲しい別れじゃなくて、もっと違う未来を望むことが出来ただろうか、と暗くなる意識の片隅で思う。

たとえば、他愛ない話をして、笑いあって過ごす、そんな未来など。

意識が遠のき、拡散してゆく。水の中に落としたインクが拡がって・・・薄まるように。

この“銀の界”を維持するため、ディーンの中の“力”は全て水の中に吸収される。

ディーンの体も意識も・・・魂すら水に溶け込んで、何も残らない。

そのはず、だった。

「おい、オヤジ、一体何考えてんだよ！」

まだ血迷ってんのか？弟の・・・エリックの怒鳴り声が聞こえてきて、はてここは何処だとディーンは首を傾げた。自分の意識も何もかも、溶けて消え去るはずではなかったか。

「血迷うとは、酷い言い草だな。私は正気だ。お前たちにせめてもの償いがしたい、そう願っただけじゃないか」

「自分で正気だと言い切る奴の方が、信じられないんだよ」

苛立たしげな弟の声とは対照的に、よく響く低い声の持ち主・・・父であり、かつての“銀の界”の王は、いっそ朗らかであるとさえ言える声で答えていた。
弟のみならず、父の声まで聞こえるとは・・・これは消えゆく意識が見せる夢なのか。
どうせ夢を見るなら、あの少女の笑顔が見たいものだ。
ディーンがそんな事を考えていると。弟の尖った声が自分に向かってきたのだ。
「おい、兄貴！聞こえてるんだろ、目を覚ませ！」
目を覚ませとは、これまた異なことを・・・私は死んだはずなのになあ。
この期に及んで、のんきにディーンが考えていると、いつの間に傍に来たのか、エリックに胸元を掴まれ、力いっぱい揺さぶられてしまった。
「何をするんだっ・・・て、あれ？」
“目を開けて”みると、目の前、それこそ、鼻先には険しい顔をした弟がいて、少し離れたところには父が居る。やれやれと言いたげに肩を竦めている。
そして更に離れた所には、少し心配そうな顔でこちらを見ている、シャールの母が居た。
これまた、何という組み合わせだろうか。現実では有り得ないし、夢でもまず考えられないなあ。
「おや、エリックに、父上・・・確か、私は死んだはずではなかったですか？」
此処は何処なんだい、完全に消え去る前の、一瞬の夢かなと弟に尋ねると、エリックは兄の胸倉を掴んだまま、脱力したようなため息をこぼした。
「きっぱり、この上もなくアンタは死んでるさ。ついでに言うなら、俺もオヤジも、もちろんシャールの母親もな。ここはあの毒の水の底だとよ」

ディーンはぽんと両手を打ち鳴らす。
「そうだ、それで、私たちはこの水に溶け込んで、この“界”を守る礎になるはずじゃあ、なかったかい？」
水の中に沈みながら・・・夢現のように、“聞こえた”声。崩壊寸前のこの界を維持するため・・・“銀の君”に連なる血と力をすべて、水に溶かし込み・・・雨となって地を潤そう、と。
あの声は“金の界”からの客人だったか。
「それがな・・・そこの傍迷惑なオヤジが、また我侭なこと言い出しやがったんだよ！」
「我侭とは、一体なんだい？私にも判るように説明してくれないかな」
話が見えないよと先を促したが、エリックが口を開く前に、弦を鳴らすような音楽的な声があたりに響いた。
「我侭とは実に酷い。何度も言うように、私はお前たちに償いがしたいだけだと言っているじゃないか」
何故素直に受け取ってくれないものか。実に嘆かわしいと、瞼を押さえる父王。
「それが胡散臭いんだよっ」
ディーンの胸元から手を離し、エリックは顔を顰めて反論する。あんた、今まで何やってたか忘れてるのかと怒鳴っている。あんたが何言ったって、簡単に信じられるはず、ないだろうと。
まったくもって、ディーンには話が見えなかった。父と息子の他愛ない言い争い（内容がどうであれ、血を見るようなものにならない限りにおいては、他愛ないと言っても過言ではなかろう）。
こんな光景、どうせなら生きているうちに見たかったなあと思いつつ、さてこの現状を誰に聞いたものかと視線を巡らせ・・・ディーンは笑顔を浮かべた。
呆れたような・・・けれど、愛しそうに父をみる女性に。
「先程は私と弟が、大変な失礼をしまして・・・お詫びいたします」
女性・・・シャールの母、リーディアは、いいえと首を振る。

「貴方たちにも、それぞれの事情あっての事でしたから。私は一目でも・・・少しの間でもあの子に会うことが出来ました。その事を感謝すらしています」
「いいえ、感謝などはどうか、なさらないで下さい。元はと言えば・・・」
ディーンの言葉は、そっと微笑んだリーディアの笑みで封じられた。それ以上はもう言わないで下さい、お互いに沢山傷を負いました、そう彼女の笑みは語っていたから。
ディーンは話題を変えることにした。そう、今一番知りたいことに。
「・・・ところで、此処はあの毒の水の底だそうですが・・・私たちは何故、水に還らずに意識を保っているんでしょう？」
リーディアは王とエリックとを等分に眺め、答えた。
「あの人が、願ったからです・・・あなたたちの転生を」

「・・・・・・それはまた、大技ですねえ」
あまりに意外な答えに、ディーンにしても反応がいささか遅れてしまった。
「あの人は、あなたたちに償いがしたいと。そして、転生ならば、この界の理には反しないからと、あの人は言うんですが・・・本当にそうなんでしょうか？」
リーディアは不安そうに胸の前で両手を握り締め、ディーンを見上げる。もう、どんな小さなことでも、かつての伴侶に罪を犯して欲しくないのだろう。
ディーンは彼女を安心させるように、笑顔で答えた。
「ええ、この界で死んだものを、この界で生き返らせるというなら・・・界の理に触れますが、たとえば他の界へ転生させるならば・・・理に触れませんね」
そうですかとリーディアは、安堵の笑みを浮かべるが。

ディーンは黙っていた事がある。確かに理には触れない・・・触れない、が。
理を飛び越えてしまうだけの、話であるのだ。いわゆる、抜け道を探すようなものだ。だから、まずそういった力の行使は、されないのだが。
「・・・エリックが、“我侭なこと”って、言うはずだよなあ・・・」
小さくリーディアに聞こえないように呟いた。視線の先では、まだ父と弟は言い争っている。
「・・・だからっ、俺はあんたの言葉なんか、胡散臭くて信じられないしっ、第一転生なんかしたくないっ！」
「何故だね。新たな命を得て、新たな生を始められる・・・もう一度生きたいとは思わないのか？」
「別にもういいさ・・・このまま終わった方がいい」
うんざりなんだよとエリックは吐き捨てるように答えた。同じことなら、新たな生なんぞ真っ平ごめんだ。
おやとディーンは首を傾げる。弟の言葉に、微かな引っ掛かりを感じたからだ。享楽的に生きていた弟ならば・・・新たな生を得られると聞けば、一も二もなく頷くかと思われたのだが。
エリックは父に背を向けて、歩き出した。
「じゃあな、俺はもう行くぜ」
兄貴とも今度こそお別れだな。そのままディーンの脇を通り過ぎ、揺らめく水の向こうへ足を踏み入れ・・・エリックは自ら水の中へ溶け込もうとしたのだが。
「仕方ない。強行させて貰うぞ」
「はあ？って、何だコレ、体が引っ張られてる・・・・ぅわあああああ」
「おい、エリック？おい、体が光ってるぞ・・・・？」
問答無用。王が力を行使し、エリックを転生させたのだった。エリックの体はまばゆい光に包まれたかと思うと、手のひらに乗るほ

どの小さな珠になり・・・一際強く輝いた後、何処ともなく消えた。
「父上・・・エリックを、何処に転生させたのですか？」
転生を酷く嫌がっていたようですが。ディーンの質問に父は答えた。
「せめてもの償いだと言ったのだがな・・・何故ああも嫌がったのか私にはわからん」
「そうですね、私にも、何故嫌がるのか理由が思い当たりませんが・・・ところで父上、一体どこに転生させたのですか？」
「金の界だ」
「・・・・それはまた、“金の君”が気付かれたら、酷く憤慨されることでしょうねえ・・・」
まさか、父の嫌がらせではとディーンは思ったが、口にはしなかった。
「ところで、お前はどうしたい？」
そう、父が聞いてきたから。

ディーンはにこりと笑った。答えはもう、決まっていた。
「もちろん・・・・」

あの少女に再び会うためなら、抜け道的力の行使であっても、すこしも気にしないディーンだった・・・。

## ある父親の苦悩（前書き）

目出度くローレンスと交際を始めたスティール。だがその様子を見守る父親の心境は複雑で・・・・・。

## ある父親の苦悩

よりにもよって、とクリードはとある経済誌の表紙を見ながら、ため息をついた。

『あらクリードったら、何ため息なんかついちゃって』

どうしたのと、モニターの向こうから鈴を振るような声がして、クリードは慌てて顔をあげた。

そうだ、“金の君”へと定期連絡のために、通信を入れていたのだったと頭を切り替える。通信ブース内に誰かが置き忘れて行った雑誌が、彼が今抱えている憂鬱を思い出させてしまったのだ。

「失礼しました、金の御方。お忙しいところお時間頂き、誠に恐縮ですが・・・定時連絡を致します」

『はい、どうぞ』

聞いているわ、続けて頂戴。

モニターごしに映る“金の君”は、長い金の髪を持つ、たいへん可憐な女性に見える。大きな、少し釣り上がり気味の目は、しなやかに駆ける猫科の動物を思わせる。また果実のように赤い唇はふっくらと瑞々しく、口付ければ甘い味さえするかと思われた。

が。

クリードが“金の君”の姿を見て思うことと言えば。

あの頃より、大分お変わりになられた、その一点のみである。

初めてクリードが“金の君”と会ったとき、“彼”は背の高い青年の姿をしていたから。

“金の君”が治める“金の界”や、今は王が不在となった“銀の界”、そして、現在クリードが暮らす“狭間の界”。これらの三つの界は互いに影響しあって存在している。いずれかの界がバランスを欠けば、その影響は他の二つの界にも及び、最悪の事態に陥れば、

連鎖的な界の崩壊すら招きかねない。
それを回避するために、三つの界にはそれぞれ“君”が居て、それぞれの界のバランスを保っていたのだが。
狭間の界は早くから“君”を失い、銀の界は君たるべき王が長く不在であった。
金の界のみは“金の君”の存在により、平穏を保っていたが、他の二界の影響からは逃れらず。
三つの界のバランスは急激に悪化していったが、ただ一人存在する金の君であっても、他界へは干渉できない。
どうするべきかと“金の君”が思案していたとき・・・クリードが現れたのだ。
聞き慣れぬ、“次元管理官”なる肩書きを名乗って。

クリードは三つの界とはまた異なる界の住人である。その界は、三つの界と近接するが故に、様々な影響を受けていた。また彼の居た界は、他の多くの界とも隣接している、いささか不安定な界であるため、住人には様々な影響が出ていた。
たとえば、神隠しや取りかえ子。特定地域での物体の消失あるいは移動。そういう事が日常のすぐ背中側で存在していた。このままでは、鍋の底が抜けてしまうように・・・平穏な日常が望めなくなる、非日常が日常となり、秩序など失われてしまう。安全網を張り巡らせるような・・・何とか手を打たねばなるまい、と人々が作り上げたのが・・・クリードが今就いている“次元管理官”と言う仕組みだった。
界を接している部分に異変はないか、次元の綻びはないか、こちらの界へ落ち込む者が居るか、もしくは他界へと誤って行った者が居るか・・・など、彼らの界の技術力と、金の界での魔法に似た・・・呪術で構成された機構だ。他の界からの影響を最小限に抑えるための、セイフティネットと言っても過言では無い。それゆえ、界の呪術者とよばれる者の一部や防衛に携わる者が、次元管理官となる

例が多かった。例外はあるにしても。
また一般人には秘密であるため・・・鍋の底が抜けるように住んでいる界が崩壊するかもしれないなど、その危険が常にあるなど知れば、住人にしても平穏な気持ちで暮らせまい・・・たとえ伴侶であっても本当の仕事の内容は明かされなかった。
また“次元管理官”は他の界の住人として暮らしながら、界の異変を監視することもある。今のクリードがそうであるように。クリードは元居た界を離れて、三つの界の異変を監視し、何かあれば本国へ連絡を取ったり回避行動を起こしたり、同じように狭間の界に常駐する仲間に連絡を取り対応を相談したり・・・また唯一存在する“金の君”へ連絡を取り、最善策を練ったりしていた。
それらすべて・・・この狭間の界における、表向きの・・・普段の仕事の合間にである。
狭間の界で暮らすクリードにはちゃんと別の職業があって、毎日出勤していた。妻や娘は、自分の本当の職業を知らない・・・いや、この界の人間全てが知らないと言ってよかろう。狭間の界の住人は、隣接する金の界や銀の界の事も知らないし、ましてそれ以外の界の事なども、想像すらしないのだ。
クリードは、表向きの仕事を出来るだけ早く終わらせ、時には後回しにして、“次元管理官”としての責務をまっとうしてきた。二つの仕事をこなすというのも、なかなか大変なのである。我ながら段取りが上手くなるなあと時々自分で感心するくらい。
彼の、素早い上に正確な仕事ぶりは上司に高く評価されており、それ故新たな仕事が増えるという、彼にとっての悪循環が起こっているのだが・・・余談である。
今日もクリードは仕事を一段落させると、少し休憩してくると隣の席の同僚に声を掛け、職場の一角にある通信ブースへとやって来た。おいまた奥さんに連絡かと、からかわれながらも。ああそうだよと笑いながらクリードも返す。そしてあるフロアへとやって来た。主に休息するためのフロアであり、三分の二ほどを軽食スペースが

占め、残りを通信ブースが占めていた。食事時間を外れているため、人はさほど居なかったが、クリードのように少し休憩を取るためにであろう、テーブルでコーヒーを飲みながら軽食を摘んだり、他愛ないお喋りをしている者も居た。

クリードも飲料ディスペンサーでコーヒーを淹れてから、さてと十台ほど並ぶ通信ブースを見る。何台かは使用中を示す赤いランプがついていたが、空室もあった。コーヒーを持ったまま空いているブースの一つに入り、椅子に座る。目の前には５０センチ四方ほどのモニターがあり、その手前には木目調のテーブルとその上にはキーボードが置かれている。コーヒーをテーブルに置き、クリードはキーボードで社員コードを打ち込んだ。

＜社員コード確認。ユーザー確認。通信準備完了しました＞

機械音がブース内に響き、自動的にブースの扉が閉まった。

クリードが勤める会社は、この地域で中堅どころであり、派手さはないものの手堅い経営で知られている。社員の福利厚生も充実しており、休暇も取りやすく、また勤務面でもフレックス制を導入しているため時間に融通が利く。緊急事態になれば表向きの仕事を放り出してでも対応せねばならないクリードにとって、本当に願っても無い職場ではあった。

通信ブースは個室になっており、プライベートに配慮されていて、鍵もかかる。ただ通話記録はどうしても残るためクリードは自宅へ連絡すると記録上は見せかけて、“金の君”との連絡を取っていた。そのため、同僚からは“よく家に連絡をいれる男”と思われているようだが。

もちろん“この界”の通信に、界を超える術は無い。けれど、次元を超えて連絡を取るための、特殊な器具を接続すれば、それが可能になるのだ。

自宅でも通信は可能であるが、家族に知られるわけにはいかないため、敢えて職場を使うクリードであった。

自宅であれば、不意に妻や娘が飛び込んでくる恐れがあるし、い

くらプライバシーと言ってみても部屋に鍵などかければ妙な勘繰りをされるに違いないからだ。
「・・・三つの界は安定しています。一時“銀の界”での平衡が揺らぎましたが、それも落ち着きを取り戻しつつあります。また三つの界が互いに離れる速度に変化はありません。現時点で次元の綻びは見当たらず、それぞれの界へ落ち込んだ者も確認されておりません。また三界以外の界からの来訪者も居ないようです」
“金の君”は長い金の髪をくるくると指に巻きつけながら、頬杖をついた。
『そう・・・何も変わった事はないのね。わたしの方でも特に異変は感じてないわ。連絡ご苦労様』
「そうですか。何事もなく、何よりです。それではこれで・・・」
そう、何事も無いのが一番だ。クリードは定時連絡を終えようと、失礼しますと言いかけたのだが。
『ところで。何事も無いのなら、何故あなたはため息なんてついてたのかしら？』
さあ答えなさい？にっこりと微笑む“金の君”によって阻止されてしまったのだ・・・。

「これですよ」
クリードは“金の君”にも見えるよう、モニターに件の雑誌を両手で掲げた。表紙を飾るのは経済界を賑わす若きコンピュータシステムの開発者にして、この界を支える巨大企業の跡取り。艶やかな黒髪を後ろに撫でつけ、正装姿で微笑んでいる。
今まで映像や雑誌や新聞などで何度となく見た顔であり、名前だったのだが・・・“金の君”はあっさりとある名前を口にした。
『あら、ディーンじゃない。彼がどうかしたの？』
「・・・あなたは、知っていたんですね・・・？」
“金の君”はモニターの向こうで肩を竦めた。
『知っていたかといえば、そうね、彼が狭間の界へ転生する・・・

それも時を遡って行われるって事は知っていたわ』
「それはいつです？」
『いつの時点かと“時間”を問うても無意味ね。界を隔てている以上、時間の制約からも逃れられる。三つの界にはそれぞれの時間が流れるから。ただ私の意識上の時間軸で言うなら、銀の界での騒動の直後よ』
「そんな早くから・・・」
クリードは肩を落とした。銀の界で命を落とした、銀の界の王子。彼には娘が大変世話になったと“金の君”から聞かされていた。それについて、彼にはもうどんな言葉もかけられないが、大変感謝していたというのに。
この界で異なる名前を持つ、この界の住人として生きている、かつての“銀の界の王子”。
それ自体については、クリードは意見を持たない。転生などの概念はクリードの元居た界でもある。けれど。
「何故、ウチの娘が、彼の転生に絡んでいるんでしょうねえ・・・」
彼の腕に庇われて、後姿しか映っていないが、間違えようが無い、この紅茶色の髪の毛はスティールだ。
雑誌の表紙の写真の脇には、こんな文字が躍っている。
『若き経済界のプリンスの、恋のお相手は？！』

『そりゃ、あなた、彼がスティールのこと好きだったからに決まってるじゃない』
己の恋路のために転生し更に記憶まで取り戻してみせるなんて、驚きよね対した恋の力だわと金の君は言った。
己の恋路のために、己の身と力を二つに分けた方がそれを言いますかとクリードは内心思ったが、賢明にも口にはしなかった。
クリードはさらに肩を落とす。彼がそこまで娘に執着しているのかと思うと、何やら気が重いと言うか・・・。
「あの“波動”は、彼が記憶を取り戻したからこそ、のものでした

か・・・」
先日観測された、狭間の界ではあり得ない“波動”。この界へ常駐する仲間からの報告で、クリードはそれを知った。その波動は“君”が持つものに似ていたが、狭間の界の“君”はとうに存在が失われている。詳しく調べた結果それは銀の界のものだと判明した。
何故この界に銀の界の波動を持つ者が？シャールは銀の界から動いていない。他の誰かが、銀の界から狭間の界へ渡ったのか？
緊急事態かもしれないと、彼は金の君へと連絡を取り、そこで驚愕の事実を知らされたのだった。
『銀の界の王が我侭言ってね・・・子どもたちを転生させたようよ』
ディーンは狭間の界へ転生させたのね。呆れたように肩を竦め、その時は何も知らぬげな口調であった金の君が、今は少し恨めしい。
『いやね、そんな恨めしげに見ないで頂戴。転生では以前の記憶は失われるのが普通よ。まっさらな生を歩むためにね・・・それを敢えて捨てると言うのは・・・以前の記憶も抱き、まして現在の記憶人格も抱いて生きると選択したのは、彼そして』
金の君は少し目を細めて・・・雑誌の中のスティールを見た。以前よりも髪が伸びて、背も少し伸びたようねと思った。彼女は少しも覚えて無くても、幼い彼女と、リルフィと過ごした数日間は、金の君にとってとても楽しい時間だったのだ。
『狭間の界へ転生した、彼を探すと決めたのは・・・スティールよ』
大勢の人の中から・・・砂粒の中に埋もれた小さな宝石を探すようにしてでも、彼女は探すことを選んだ。
そうして・・・互いが夢から持ち出した、互いの夢の欠片の導きもあり、再び会い、そして。
『スティールはディーンを見つけ、ディーンは記憶を取り戻した・・・あなたは何が心配なの？』
ディーンは確かに銀の界の波動を持っているけど、もう以前の“君”に連なる力は無いわ。この界のバランスを崩すような事にはな

らないけれど・・・？
クリードはますますため息を深くして、答えた。
「私が心配しているのは、そういう事ではなくてですね・・・何故ウチの娘は、こうも厄介なモノばかりに好かれるのかと思うわけですよ・・・」
『あら、厄介だなんて、酷い言い草じゃなくて？』
金の君は形のよい眉を吊り上げた。言葉とは裏腹に、その目は笑っていたけれど。
まあ彼が“厄介”と口走る気持ち、わからないでもないけれどと金の君は胸の中で呟く。
その一。狭間の界で行方不明になったスティールは、何故か金の界へ移動していて、そこで他界の住人であったリルフィに懐かれる。
その二。銀の界から逃れてきたシャールを拾う。
その三。いつの間にか銀の界に渡ったかと思うと、銀の界から“金の君”の分かれた半身を連れ帰る。
その四。これが彼にとって一番の問題かもしれない。もと銀の界の王子と、どうやら手に手をとって恋路を歩んでいるらしい・・・？
こう並べてみると、なんとまあスティールは、クリード曰くの“厄介な”者たちに好かれている事でしょうねえとこっそり笑った。
父親としてみれば、波乱万丈の人生など子どもに望むまい。周りにいる者をみれば・・・彼女が平穏で無風な人生を送りようがないと言うことだけは、判ってしまうのだ。
ごめんなさいねと金の君は心の中で呟く。そして、もう一言。諦めて頂戴と。

「・・・その、こちらへ転生した彼がですね、私に挨拶に来ると言うんですよ」
『あら、もう結婚の申し込みなの？神業のように素早いわね』
「違います！まだまだ早すぎますよっ！娘はまだ子どもなんですからっ！・・・そうじゃなくて、何かと娘の周りを騒がせてしまった、

詫びがしたいと言うんです・・・」
一週間ほど前の事だ。夕食が終わった後、スティールがクリードの書斎にやって来た。何やら言いづらそうにしていたので、欲しいものがあるけど小遣いが足らないからねだりにでも来たのかと思ったのだが。
いっそ、その方が何倍もマシだった。娘は言った。
「ええとね、会って欲しい人が居るんだけど・・・」
思わず顔が強張り、何言うんだまだお前には早い。そう口走るのは何とか堪えたクリードに、娘は何も気付いた様子はなく、早口で続けた。
「えっとね、あたしちょっと雑誌に載っちゃうかもなんだけど、その事で親御さんに説明とお詫びがしたいって・・・デ・・・じゃなくて、ローレンスが言うの。来週の土曜日あたりに、夕食でもどうですかって」
どうかな？首を傾げる娘に、クリードは混乱する頭を振りながら尋ねた。そもそも、ローレンスって誰の事かねと。そして。スティールが説明するにあたって、顎が外れそうなほど、驚いたのだった・・・。

「あのローレンスが、かつての銀の界の王子が転生した姿だと知っただけでも、かなりな驚きでしたのに。その上、スティールとつきあいがあるなんぞ知った日にはもう・・・」
私はどうしたら良いものか悩みますよ。
『別にどうもしなくていいんじゃない？彼氏を初めて紹介された父親の顔をしてれば？』
「面白がってらっしゃるでしょう？」
『ふふふ、まあディーンにしても、あなたが次元管理官だとは知らないわけだし、そもそも他界の存在すら知らないでしょうし、まして自分の前世を知っているだなんて思ってもいない。だから彼にしても緊張してるでしょうよ』

好きな子の親に初めて会うわけだから？
何処までも明るい金の君の声に、クリードは再びため息をついた。やはり面白がっているとしか思えなかった。

ピピピ・・・軽快な電子音がブース内に響いた。それは休憩の終わりを告げる合図だった。
「それでは、これで失礼します。次回の定時連絡でまたお会いしましょう」
『ええ、ディーンとの初顔合わせ、どうなったか聞かせてくれると嬉しいわ』
楽しいわの間違いではとクリードは思い、そしてふと浮かんだ疑問を尋ねてみた。
「金の御方。銀の界の王子は二人居ましたね。一人はこの界へと転生した訳ですが・・・あとの一人はどの界へ転生したんです？」
“金の君”は細い肩を竦め、答えた。
『さあね、それは私にもわからないわ』
と。

通信ブースから出たクリードは、足早に自分のデスクのあるフロアへと向かう。思ったより金の君との話が長引いてしまった。胸ポケットに押し込んでいた縁の無い眼鏡をかけ、額に落ちかかる髪の毛を煩わしげに撫で付けた。そしてデスクに着くと、同僚がまたもや声をかけてきた。
「ほんとマメに奥さんに連絡するよな。感心するよ」
いつも仲がよくて羨ましいねと笑われ、クリードはそうかなと曖昧に笑って答えた。
さて定時連絡は終わったので、後は表向きの仕事を片付けねばと頭を切り替えてゆく。書類を捌きながらも、“夕食会”の事を思うと気が重くなるクリードだった・・・。

「さて、クリードにはああ言ったけれど・・・」
金の君の赤い唇から、歌うような声が零れる。通信が終わったため、通信球は今は白く曇っている。金の君は椅子から立ち上がり、今度は水鏡を覗き込んだ。
「これは、どうしたもの、かしらねえ・・・」
水鏡に映る映像を見て、金の君はひとり、ため息を零した・・・。

## むかしはものを　おもはざりけり（前書き）

記憶を取り戻したディーンと幸せそうなスティールを見て切なさに身を焦がすシャール。

## むかしはものを　おもはざりけり

なぜこんなに心が揺れるのか、誰か教えて。

「・・・今日も雨が降っているね」
「そうですね、これでもう六日目です」
「・・・この雨、僕が降らせているのかな・・・」
「あなたがそう思うのなら、そうなんでしょう。何故、ご自分が降らせていると思うんです？」
「わからないけど。でも、胸が重くて苦しいんだ。雨を降らせているあの雲みたいに」
「まるで・・・空が泣いているみたいですね」
「泣いて・・・る？」
「あなたは・・・泣きたいんですか？」

界を渡るのは、瞬き一つほどの間の事。特に渡りがし易いように、結節点を作っている場所においては尚更。
狭間の界においては散歩でよく行く河原、銀の界においては草原のように、シャールはあらかじめ渡し場を築いていた。そうすることで少ない力で界を渡ることが出来るし、また界の磁場にも影響は少ない。
君が不在の狭間の界では、他の界の君の力がどのような影響を与えるか、予想が出来ないための予防的措置でもある。
それは、念のためにはね、とジルファが片目を悪戯っぽく瞑り、提案したものだ。
渡し場を築き、さらに力が零れださないよう保護膜を張る。
その保護膜自体もまわりに影響を及ぼさないよう、細心の注意を払って作られた。バランスを崩しちゃいけないからねと、ジルファ

に教えてもらいながらシャールは渡し場や保護膜の作り方を習った。
　リルフィはその様子を眺めながら、感心しているのかどうなのか、微妙な事を言ったものだ。
「流石あちこちに渡し場を作っただけあって、実感こもっているわね」
「それは君にすぐ逢いたいがためにだよ。君の通る道沿いにあれば、すぐ飛んでいけるからね」
「ふうん。やっぱりアレ、あんたが作った渡し場だったのね・・・いつぞやか先回りされたわね」
「どこかな？金の君の宮の傍かな？それとも森の近く？それとも・・・」
「ちょっとアンタ、そんなに作ってたの？閉じなさいよっ」
「あはははは～イヤだね～君の頼みでもきけないな～」
「・・・力ずくで閉じてやる、壊してやるわっ」
　ジルファとリルフィの会話は、途中からいつもこんな感じだ。ジルファのからかうような言葉に、リルフィが毛を逆立てた猫のように反応する。最後には怒り心頭のリルフィに追いかけられる破目になっても、ジルファは楽しそうに笑っている。それでもシャールは二人の様子を見るにつけ、ああ仲がいいんだなあと思ってしまう。だっていつでも話しかければ返事がある。応えてくれる誰かがいる。
　それが、自分にとって大切な人だったら・・・もっと嬉しい。
自分の一番大切な人は、いつもは自分の傍に居ないから。
それは・・・彼女が居るべき界でしたい事、夢があるのと同じように、自分にも己の居るべき界で、しなければならない事があるのと同じように。だから、仕方ないと受け入れて、いつかはまた、一緒に暮らせる日がくればいい・・・くるのだろうといつかの日を夢見ていた。
　朝が来て夜が来て・・・やがてその繰り返しのあと、訪れるはずだと疑いもなく。

けれど。
「僕の傍に君が居ない・・・そんな未来もあるんだ」
「シャール、元気だった？」
声とともに、勢いよく少女に飛びつかれ、後ろにひっくり返りそうになるのをなんとか堪えたシャール。
狭間の界に渡るとき、シャールはスティールといつも散歩に行っていた河原を渡し場に選んだ。よく知っている場所でもあるし、また時間帯を選べば人通りが少ない場所という利点もあったからだ。
スティールはシャールが現れると大抵飛びついて・・・犬のシャールにするように、頭を抱きかかえて髪の毛を撫でてくれる。この日も同じだった。躊躇いなく抱きついてくれる温かさと柔らかさをシャールは嬉しいと思う。自然と笑顔が浮かんだ。
「スティールも元気だった？」
「うん、あっいけない、バスケットがあっ」
何時もの事ながら、放り出してしまったらしい。笑顔でシャールに答えた後、途端にへにゃりと眉を下げた少女に、シャールはまた笑みがこぼれた。スティール、あんたいい加減にその粗忽なトコ直しなさいよと呆れ果てたリルフィの声が頭の上から聞こえる。何事にも一生懸命なのがスティールのいい所だよとフォローを入れるのはジルファ。ああ、いつもの場所に来れたなあとシャールは嬉しくなった。頭を撫でてくれるスティールの優しい手。お返しのように、シャールもスティールの紅茶色の髪を撫でる。髪の毛が随分と伸びて、今までで一番長いんじゃあないだろうか。
「今日は何作ってくれたの？」
「えっとね、紅茶のクッキーと、チョコチップ入りのスコーンなのっ。うえ～ん、せっかく上手く焼けたのに～」
「大丈夫だよ。少しくらい割れても味は変わらないしね」
慌てて抱きついていたシャールから離れ、バスケットを拾いに行こうとするスティールより先に、それは他の人の手によって拾い上げ

られた。
離れていく温もりを寂しいと思いながら・・・シャールはその声の主の姿を見た・・・いや、本当は初めから気付いていた。彼がこの場に居たこと。
以前のままの姿で転生し、そして以前の記憶も取り戻した“彼”が居たことに。少しの間だけでも、気付かない振りをしていたかったのだ、とシャールは後になって思ったのだ。

少女と彼が二人並んで居るところへ迎えられる自分など。そんなのは。

はいどうぞ、今度は落とさないようにねと、彼・・・ディーンはバスケットをスティールに手渡した。
「ありがと、ディーン」
「落とす、じゃなくて、放り出すの間違いでしょ～？」
「ちょっと、リルっ」
少女の肩に止まった金の鳥は、ふふんと嘴を反らす。顔を赤くしながら、スティールは反論出来ないでいるようだ。それはいつも見る・・・見てきた光景のはずなのに。ディーンは少女を優しい目で見ているから。
ふと羽ばたきが耳元でしたかと思うと、左肩に重みが載った。深い青の羽持つ鳥・・・ジルファが止まったのだった。ジルファは何も言わないけれど、シャールは沈みそうになる気分をなんとかしようと思った。
沈んだ顔をスティールに見せるわけにはいかない、元気そうに笑っていなきゃ。
それに。
「また会えて嬉しいです。記憶が戻ったんですね」
「私も、こうして君に会えて嬉しいよ。君にも色々力を貸してもらったお陰だ。ありがとう」

「いえ、僕は何もしていません。頑張ったのはスティールですよ」
ディーンが礼を言うのに、シャールは首を横に振る。自分が少女に貸した力など、たかが知れている。砂の中から一粒の宝石を見つけ出し、そしてそれを再び輝かせるほどのことを、彼女は結局、一人でやってのけてしまった。自分にできたのは精精、助言くらいのものだった。
そして、助言をする自分が心の底で何を願っていたか、自分はよく知っているから。余計その感謝の言葉は受け取れなかった。
「それでも・・・君の助けがなければ、僕はいまこの場に居ない。本当にありがとう」
真摯に深紫の瞳で見つめられ、シャールは目を逸らし、緩く頷いた。心の底を見透かされそうで、とても目を見ていられなかった。
優しくて誠実だった人。この人とまた会えて嬉しいと思う気持ちは、確かに自分の中にもあるのに。
「ところで、いつまで此処に居るんだい？そろそろ移動しないと、一目についちゃうよ？」
ジルファが言う。
さっきまで朝焼けが広がっていた空も、徐々に青みを増している。いくら早朝の河原とはいえ、他の人も通りかかる頃だろう。今日はどうするのとシャールが尋ねる前に、スティールがあのねと言った。
「あのね、シャール。今日はディーンのお家に行ってもいいかなあ」
「ディーンの、家？」
首を傾げてシャールは少女を見、そしてディーンを見上げた。彼は穏やかに笑って言葉を続けた。
「君とも色々話をしたいんだけど、外だと立場上厄介な事が多くてね。それで私の家に来て欲しいんだけど・・・いいかい？」
「それに、私たちも居るからね！」
シャールの肩でジルファが主張する。
「わたしたち、って勝手に一括りにしないで頂戴！」
スティールの肩ではリルフィがしゃーっと羽を広げて威嚇する。

「・・・いいですよ、勿論」
シャールはそう答えたのだった。
ジルファとリルフィ、それぞれがそっとため息をついたことなど、シャールは気付かなかった。

「じゃあね、スティール」
「うん、シャール、またね。今度はもっとちゃんと作るから」
「アレはアレで、美味しかったよ」
「うううう〜慰めてくれなくていいから」
クッキーは焼きすぎて、少し焦げていたし、スコーンはバターが上手く混ざっていなくて、ぱさぱさとしていた。それでも自分のために、と思って作られたモノを、シャールは嬉しいと思う。
「今日は楽しかったよ。また会おう」
「・・・ええ、また」
スティールの傍らに立つディーンに、シャールは答えた。少女の隣に立つ彼を見ていると形にならない何か黒いものが沸き上がってくる。自分でも見たくない何かが。
少女は狭間の界の住人で、今は彼も同じ。銀の界に還らねばならない自分は、ずっと彼女の傍には居られない。
その間も・・・彼は少女の隣に居ることが出来る。
今も。
「ねえスティール、これから銀の界に来ない？」
「ふえ？な、何言ってんの？」
「だって、明日も学校休みって言ってたでしょ？ヤツカの新作お菓子あるし、ユキさんもお腹だいぶ大きくなったよ？」
「うううう〜すっごく行きたいけど、ごめんね、明日は用事があるんだ〜」
「何の用事？」
「ディーンと、パパとママと皆でご飯食べに行くの」

「・・・そうなんだ」
「うん。ヤツカさんとユキさんによろしくね。今度遊びに行くからって」
「うん・・・じゃあ、またね」
ぼうっと渡り場が発光する。またねと手を振る少女と、隣に立つ青年。
またねと手を振りかえして・・・彼らに背を向けた。
肩から青い鳥が飛び立った。
意味の掴めない言葉を残して。

「あなたは、泣きたいんですか？」
「わからない。ただ、笑っていたいとは思うよ。泣けばあの子が心配する」
「泣くのを我慢するのを見ても、心配するんじゃないんでしょうか」
「そうかな・・・そうだといいな。別に、心配させたいわけじゃないけど。あの子に、笑っていてほしいのは本当なんだけどね」
「そうですね、どの気持ちにも嘘はないんですよ。あなたが持っているたくさんの気持ちのどれ一つとして。ただ・・・」
「ただ、なに？」
「取り出して並べてみると・・・矛盾があるというだけの、それだけの話です」
「そうだね、言ってみればそれだけの話だ。ねえ、こんな言葉を聞いたのだけど、どういう意味か分かる？」

あひ見ての　のちの心にくらぶれば　昔はものを思はざりけり

「・・・貴方に会ってからの、この切ない今の気持ちに比べると、以前は何も物思いをしなかったものだという意味の・・・ふるい歌ですね」

「歌、だったんだ」
「ええ。ふるい、恋の歌、です」

「おや・・・雨が上がりましたね」

この気持ちにはそういう名前があるの？
あまくて苦くて、かるくて重い。
今まで知らなかった味。知りたいと思ったこともない、味だった。

## 誰かの願いが叶うころ

「あ～どうしたらいいかなあ～・・・」
スティールはお気に入りのクッションに顔を埋め、とさりとベッドに寝転ぶ。独り言のそれに、返ってくる言葉は無かった。

スティールが学校から帰宅すると家には誰もいなかった。母親は買い物に行っているらしく、キッチンのテーブルの上にはメモと、皿に盛られたクッキーがあった。今日のおやつは全粒粉のクッキーです。食べ過ぎてご飯が入らないなんてこと、しないようにとの注意書きがあった。
スティールは小皿にクッキーを取り分け、少し考えてグラスに牛乳を注いだ。それらをトレイに入れて二階の自分の部屋に持っていった。
「ただいま～リル、ジルファさん」
部屋の隅と隅に居る、金色と青の鳥に帰宅の挨拶をすると彼らからも返事が返った。
「お帰り」
「お帰り。母上は出かけたようだよ」
「うん、そうみたいだね。メモがあったし」
何か買い忘れでもあったのかなあとスティールは首をかしげながらも、制服から部屋着に着替える。楽な格好になったところで、ベッドを背もたれにして、ふかふかのラグの上に座り込んだ。トレイも行儀が悪いかなと思いつつ床に直に置いた。
「ママの全粒粉クッキーだ～久しぶり」
一つ摘んで口に入れる。ドロップクッキーのそれはざっくりと素朴な見た目であり、その見た目どおりの素朴な・・・香ばしい味がした。スティールの母が作るそれには、オートミールも入っており、食物繊維も摂れるというスグレモノだ。

美味しいなと顔を綻ばせて・・・けれど次の瞬間スティールはむむと顔をしかめる。
「なあに百面相してんのよ」
軽い羽音をたてて、リルフィがスティールの肩に止まる。
すると少女は、だって～と情けなさそうに眉を下げて新しいクッキーを手に取った。
「だって、おんなじ材料使ってるのに、ママとあたしじゃ、なんでこんなに出来上がりに差があるんだろうって」
「・・・ああ、アンタもこの間、同じの作ってたわね・・・で、確か」
「あ～見事なまでに、黒焦げになってたよねえ～」
あれはいっそ芸術的だったよと最後をジルファに締めくくられて、スティールはそれフォローになってないと上目遣いにジルファを睨んだ。
青い鳥は肩を竦めるように羽を広げる。
「ほう、フォローが欲しいのかい？」
「うううう・・・要らない。あたしの作るものがあんまり美味しくないって、あたしが一番わかってるもの」
「・・・スティール、悪いけどあたしもこと、コレに関しちゃフォローしてあげられないわ・・・」
仕方ないとスティールはため息をつく。そうして手に持っていたクッキーを一口かじる。さくさく、ほろっと口の中に零れた・・・小麦粉と砂糖とバターの塊の、なんと美味しいことか。
そして、なんと自分の作るものと差があることか。
「なんで家でも教えてもらってるし、学校のクラブでも作ってるのに、うまくいかないんだろう～」
・・・そりゃあ、ねえ。
ちろり、ちらり、と金の目と青い目が見交わされる。大抵の事では反目しあうリルフィとジルファだが、自分に対するふざけているとしか思えない口説き文句以外には・・・まあ穏当な対応をするリル

フィであった。
彼らの視線での会話をもし少女が理解していたら、たいそう憤慨したに違いない。
「そりゃあ、ねえ・・・」
「人には向き不向きがあるっていうし」
「下手の横好きって言葉もあるし」
「好きこそもののって言葉もあるから、そのうち上手くなんじゃない？」
「あはは、それ投げやりに言ってるでしょ」
などなど。
「まあ、母親の美味しい料理食べなれてるだけに、味に対して理想が高いってのはあるんだろうけどね」
彼らの交わす“会話”にはちっとも気付かず、スティールはまたため息をこぼした。
「あ～あ、今度ローレンスに、クッキー作っていくねって約束したのになあ・・・」
ローレンス。
その名前に、鳥たちはまた無言で視線を交わした。

銀の界の元王子。狭間の界へと転生を果たした彼は、銀の界での記憶を抱いているはずだが・・・スティールと再会した後も、まだ蘇る気配は無い。今はローレンスという名前を持つ彼・・・この世界では誰もが知るような有名人であった・・・と、友人づきあいをするまでにはなっているが、当の彼が少女をどう思っているのか・・・リルフィとしては疑問だった。
彼のような社会的地位にある人間が、スティールのようなごくフツウの少女の傍にいる理由。
本当に極普通の友人づきあいがしたい？
それともきまぐれ？
それとも・・・恋愛対象としてみているの？

一時の恋の相手として見てるなら、許さないんだからと内心拳を握り締めるリルフィ。万が一そうなれば、鋭い嘴がローレンスを襲うことだろう。そしてそれを、ジルファも止めないに違いない。

「どうしよう～」

少女はクッションに顔を埋めると、背後のベッドに寝転んでしまったので、リルフィは少女の肩からひらりと舞い降りた。

「どうしよう～いつまでも持ってけないよう～」

その悩みじたいは微笑ましいものだけど・・・ねえ。リルフィはささやく。

「ねえ・・・あんたがクッキー食べさせたいのって、一体誰？・・・どちらなのかしら？」

「・・・・え？そりゃ・・・・」

「ローレンス？それとも、ディーン？そうね、まだディーンの記憶は戻ってないものね・・・だから、ローレンスなの？」

スティールはリルフィの言っている意味が分からず、困惑する。どちらなんていわれても、ローレンスの中でディーンの記憶は眠っている。君と同じ時を生きたいんだと・・・強い意志を表す眼で言った彼の言葉と腕の強さを、彼女は覚えている。彼女もまた・・・彼と同じ時を、今度は他愛ない話をしながら生きたいと思ったのだ。

「誰って・・・彼は、今はローレンスでしょ？」

「そうね。ローレンスとして生きているわね。その彼に、ディーンだった頃の記憶なんて、要るのかしら？」

辛い思い出の多い記憶なんて・・・本来覚えてない他人の人生まで背負わせる必要なんて、あるのかしらね？

魂は同じでも、人格は違うわ。もし記憶が蘇ったところで、ローレンスは“ディーンだった頃の記憶を持つ”人に過ぎないのよ？ディーン自身じゃ、無い。

「リルフィ・・・なんて今頃、そんなこと言うの？」

「今だから言うのよ。一度よく考えなさい。記憶を抱いて転生する

のは、ディーンの望みだった、でもそれは、転生後の人格であるローレンスには、関わりのないこと。折角新しい人生を歩んでいる彼に、前世を思い出させたとして・・・それは彼にとっていい事なのかしらね」

スティールは唇を噛んで俯いた。リルフィに言われるまで、ちっとも考えたことはなかった。ディーンにもう一度会いたい、それだけを思って探して・・・そうしてローレンスに出会った。ローレンスの中にあるはずのディーンの記憶は眠ったまま、揺り起こす術がわからずにいる。

ローレンスとは他愛ない話をしたり、お茶をしたり・・・友達のようなつきあいを続けているけど。

「・・・あたし、ローレンスに酷いことしてるのかなあ・・・」

知らず知らず、ディーンを重ねて見てる。彼だったら何と言ってくれるかとか・・・考えている。

でも、今居るのは、ディーンじゃない。

ローレンスだ。

「まあ自分の存在を素通りされるのは、嬉しくないだろうがね。酷いかどうかは、わからないが」

ジルファの言葉に、ますます下を向くスティール。あんた余計なこと言わないでよとばかりにリルフィは彼を睨み、それから少女に声をかける。

「わたしはね・・・一度言っておきたかっただけなの。あんたのその望みは・・・彼に何をもたらすのかって。それを考える必要もあるんじゃないかってね」

「・・・わかった」

スティールは小さく頷くとクッションをぎゅっと抱きしめた。

ディーンの願いは、少女と同じ時を生きること。

スティールの願いは、彼と他愛ない話をして・・・笑いあって過ごすこと。

スティールは、あ、と小さく声をあげた。自分の願いなら・・・半ば叶っている。
ローレンスと他愛ない話をして、時を過ごしているから・・・だけど。それは“ディーン”は知らない。
“ディーン”にこそ、他愛ない優しい時間を知って欲しかったのに・・・それは自分の我侭なんだろうかと。

「ごめんね・・・」

小さく呟かれた声は、誰に対してのものだったか、少女にもわからなかった。

願いが叶ったとして。
その“願い”が誰かを不幸にするなら・・・その“願い”は。
いっそ、消えた方が、いいの？

## 誰かの願いが叶う頃（前書き）

次元管理官クリードとユージーンのある日の出来事。

## 誰かの願いが叶う頃

来客を知らせるチャイムの音が、クリードの居る二階の書斎まで聞こえてきたが、確か妻が居たはずだと思い、視線は再び読みかけの本に落ちる。休日の午後。窓越しの柔らかな光が板張りの床に落ちている。座り心地のいい椅子にゆったり腰掛け、珈琲の入ったカップを片手に、優雅で贅沢なひと時を楽しんでいた。

けれど、階段を上ってくる足音に、おやと首を傾げた。ドアがノックされ、妻が顔を覗かせた・・・その後ろに。

「あなた、ユージーンさんが来られましたよ」

ああ、浮き世離れの時間は終わり、憂き世がやってきたか。クリードは本を閉じた。

や、ひさしぶりだねと能天気な笑顔で挨拶をするその男の頭に、この本を振り下ろせたらどんなにか、とクリードはため息を押し殺した向こうで、思ったのだった。

「そんなに睨まなくってもいいでしょ、久しぶりだってのに」

「何が久しぶりなものか。この間通信したばかりだろう」

その時もロクでも無い話ばかり聞かされた気がするのは私の記憶違いかと再び睨んでも、ユージーンと呼ばれる男は、あれそうだったっけ～と笑って首を傾げるばかり。

暖簾に腕押し糠に釘。馬耳東風とばかりにこちらの言い分はさらりと聞き流し、爆弾発言をさり気なく落とすのが特技の男。嫌な諺を自分に何度も体感させてくれる男は、さて今回はどんなロクでもない話をしにきたのやらと既に投げ遣りな気分になって、クリードは椅子に深々と座りなおした。

クリードの書斎には、流石にソファセットまでは置いていないが、小さな丸いテーブルと椅子がある。部屋の三方を背の高い本棚が囲

んでいる。そして、それぞれの本棚はぎっしりと本が詰まっている。入りきらない本は床に平積みしていた。妻には、お掃除が出来ないわと時々文句を言われるのだが、どの本にも愛着があるので、本を減らすのは非常に難しい。整理するのもひと苦労だ。本棚の一番下には、スティールが子どもの頃に読んでいた絵本もある。

どちらかといえば、客人が落ち着けるような部屋ではない。下の居間でお話なさったらとクリードの妻は勧めたのだが、そう気を遣う相手でなし此処のほうがいいんだとクリードは答え、ユージーンもお気遣いなくと言えば、彼女もあらそうと納得した。お茶とお茶菓子を運んできて、夫と客人に出すと、わたし、これからちょっと買い物に行ってきますけど、留守番よろしくお願いしますねと言い置いて出かけていった。

急いで帰らなくていいとクリードは声をかけたが・・・それが妻への気遣いからだけではない事を・・・客人だけが知っていた。

客人はふふふと猫のように目を細めた。本棚に凭れて立ったままカップの中身を啜る。たまにしか・・・そう数年に一度くらいしか訪れない客人の好みを、彼女はちゃんと覚えてくれていて、そのことをさて彼に告げたものかとしばし迷った。ほんの瞬き一つの間のことであるが。

それも眉間に縦皺を刻んで自分を睨みあげる彼を目にすれば、風に舞う木の葉のように躊躇いなど吹き飛んでしまう。

「さすがクリードの奥さんだねえ、僕の好みちゃんと覚えててくれたよ。ほんと、いい奥さんもらったよね」

「・・・・・・」

「あっ、そんなもの覚えなくていいのにって思ってない？酷い、この世界で二人きりの兄弟じゃないっ」

「・・・・私は弟を持った覚えは無いが」

「え～この界ではいちお、兄弟でしょ。そうすることに決めたでしょ。今更往生際の悪い」

「・・・今からでもその記載事項を抹消したい・・・」
頭を抱えながらも、ああいかん、これでは相手のペースにはまってしまう、話がちっとも進まないじゃないかとクリードは気力を振り絞る。相手のペースに巻き込まれてはいけない。それは今での経験で、よおくわかっているはずじゃないか。
何故自分の家でこんなに疲労困憊しなけりゃいけないんだと胸の内でグチを零しながら。
それで、と咳払いを一つして、椅子ごとくるりと向き直る。
「・・・で、忙しいはずのお前が、通信ではなくわざわざ家まできた理由は何だ？ただ顔を見たかったからとか、手料理が食べたかったからというのは却下だ」
「え～顔見たかったからってのは駄目？」
「却下」
取り付く島の無い声に、ユージーンは肩を竦めてみせた。
「酷いなあ。血縁の顔たまには見たいって思っただけなのに～・・・あれ、コレには反論ないね？血縁は間違いないモンね？正真正銘従兄弟だからね？」
「・・・いっそ、その事実を抹消したい・・・」
あはは、そんなの、血を入れ換えたって無理だよとユージーンは笑った。血と縁で雁字搦めになった彼らの関係は、たとえ記録を消しても事実は残る。関係者の記憶に残る。それらから逃れる術は一つ。
ことなる理が支配する場所へ行くこと。たとえば・・・図らずもクリードがこの界に居るような。
それで、と些か疲れた声で、クリードが言った。
「それで、本題は何だ？・・・時間はあまりないぞ、早く話せ」
仁、とこの界の言葉とは・・・異なる響きで相手の名を呼べば、仁・・・ユージーンは分かってるよと答えた。
もう少し会話を楽しんだっていいじゃないと、前置きしながら。
「相変わらずせっかちだねえ・・・ミクちゃんは」

「その呼び名はよせと何度も言ったろうっ」
「あ～はいはい、じゃ本題に入るね」
「お前は、人の話を聞けっ」

何度も怒鳴ったせいでげほごほと咳き込むクリードを、仁はにやりと笑いながら見下ろした。
「ま～相変わらずマジメだねえ～。てきとーにしてないとハゲちゃうよ。皺増えるよ？」
「・・・お前はその適当さ加減のお陰で、嘘みたいに若いがな」
「適当さの賜物です！ミクちゃんもそうしてみなよ」
「その呼び名はやめろと言ってるのに、お前は聞かないな」
「う～ん、子どもの頃の習慣って、なかなか抜けないしね。いいじゃない、ミクちゃんて可愛くて」
「いいから本題。いくらお前が仕様も無い事に心血注ぐ奴でも、この世界の反対側から来るほど暇じゃあるまい？」
時として界を超えて冗談だけのためにやって来ることが、あったけれどそれはスルーして。
仁は叶わないねと口の端をあげると、カップの中身を空にして、丸テーブルに置いた。
「つれないね。久しぶりに会ったっていうのに。まあいいや、じゃあ本題ね」
仁はクリードの鼻先に人差し指を立てた。
「まず一つ。長老会は次元管理官の一時撤退を決定しました」
「・・・は、それは一体・・・」
「驚くのはわかるけど、最後まで聞いてね。で二つ目。それにより、派遣されていた次元管理官は皆本国へ帰還を始めてます。で、３つ目」
クリードは目の前で立てられる仁の指を半ば茫然として見ていた。仁は特に表情も変えず、いつも冗談を飛ばすときの顔とちっとも変

わりなくて、クリードにはこれが性質の悪い冗談かそれとも事実なのか判断が出来ない。
付き合いの長い自分ですら・・・そうなのだから、長老会の面々もこの男に対しては手を焼いているに違いないと思った。言動が建前なのか本音なのか・・・それとも、そのどちらでもないか、さっぱりわからないからだ。
「これは決定ではなく、噂もしくは1及び2から類推される事だけどね～ここから導き出されることといえば・・・わかるよね、深玖里」
ミクリ、と小さい頃の呼び名でなく、本名を呼んだ仁に、クリード・・・深玖里はああ、と頷いた。
「次元管理官を廃止するって動きか・・・」
「まあね～本国の長老会もイロイロあるからね。それぞれの思惑絡んでごちゃごちゃで、みっともないったら」
仁は椅子に腰掛けると足を組み、テーブルの上の皿からきつね色に焼けたマフィンを取り上げた。
「うん、おいし～奥さんお菓子も上手で羨ましいな。まあ廃止って事にはならないんじゃないかな？ウチも反対するだろうし、ミクちゃんちも反対するでしょ？」
「結城と城戸が反対にまわるとしても、他は？」
「そりゃ、引き込むに決まってんでしょ？」
正攻法でも勿論口説くけど、それで聞かなけりゃ弱み掴んで揺さぶるよ勿論でしょ？
「・・・ほどほどにしとけよ」
長老会の面々が気の毒になるような・・・仁の表情だったので、深玖里はそっと顔を背けた。
「それにしても・・・銀の界もこちらも些か不安定な折に、管理官全員帰還か・・・痛いな」
深玖里が思わず呟くと、はや3個目のマフィンに手を伸ばす仁は

そうだねえと頷いた。
「絶対こっちがあげた報告書なんか、まともに見てないって。見てりゃ危なくて、術者引き上げなんて芸当できやしないって。ところで」
「なんだ」
「銀の界の元王子・・・こっちに転生してるんだって？誰なのかわかったの？」
「ああ・・・お前も知る有名人だ。ローレンス・シュバルツ」
「ほう・・・それは盲点・・・というか、転生というのは時間を遡れるものなのかねえ」
「界が異なるからな。理に触れないから可能だそうだ」
「ふうん・・・じゃあ、もう一人の王子は何処に転生したんだろうな・・・というかなあ」
「なんだ」
「転生といってもね・・・こんな短い期間での転生だろう？ロクに魂を休める間もない。ついた傷は癒されず、それを抱えたまま次の人生を送ることになりやしないかな～と思うんだよね」
そうだなと深玖里は同意した。特にローレンスは前世の記憶を抱いたまま転生したという。それは今の人格に傷をつけかねないと・・・転生する前の王子は知っていたのだろうか。
「まあ僕らには知りようが無いことではあるけど・・・さて」
仁は身軽く立ち上がる。窓の外は橙色の光が満ち、夕焼けの空が広がっている。
「僕はそろそろ戻るよ」
「ああ、小太郎にもよろしく」
「しばらく一人で頑張ってね～あはは、大変だけど」
「・・・全然励ましてないな・・・」

妻は買い物から戻ってないらしく、キッチンには居ない。その方

がよかったクリードは内心安心した。
ほてほてと背後からついてくる、この界における“弟”は、あれれ、挨拶くらいしたかったのになとさも残念そうに言った。
いつロクでもないことを言うかと、こちらは冷や汗をかいているというのに。
玄関先まで見送りに出たとき・・・間が悪くスティールが帰ってきた。
「パパ、ただいま～って、あれ、ユージーンおじさん、来てたの？」
「お帰り。久しぶりだね、元気そうでなにより」
「えへへ～おじさんも元気？今日は晩御飯食べていけるんでしょ？」
「ごめんね～もう帰らないといけないんだ。また今度ゆっくり来るよ」
「ほんと？じゃあ今度ゆっくり来てね」
娘の背後で、深々とため息をついた父の姿を、娘だけが知らなかった・・・。

ちょっとそこまで送ってくるよと、クリードとユージーンは連れ立って歩いていた。
玄関先で出来る話ではないからだ。クリードが家族にすら自分の本当の仕事をひた隠しにしているというのに、この男は自分の努力など軽く無視するようににこにこ笑いながら現れる。回りの者の苦労を思いやってしまうクリードだったが。
「なあミクちゃん」
「その呼び名はやめろ。ついでに此処ではクリードと呼べ」
「じゃあ深玖里。これが最後のチャンスだよ。本国に帰る？長老会は次元管理官を全員帰還させると決定した。例外は無い。だから・・・この界に永住すると認められた君も、帰ることができる。どうする？」
その瞬間、クリードは腑に落ちた。ユージーンが・・・傍迷惑な従兄弟が自分に会いに来た訳を。おそらくその一言を言うために、

帰還を急かす長老会をのらりくらり交わし、ここまで来たのだろうと。
この界で伴侶を得、子どもまで為したクリードは、本国へ帰ることは出来ない。不安定な界の理を乱しかねない乱しかねないからだ。帰還どころか、危うく一生涯の幽閉という事態にもなりかねなかったのだが、狭間の界での常駐次元管理官として働くならという条件つきで、放免された。
本国に帰りたいと思ったことはない。ただ、あちらに居る幾人かと直接会えないのだけが残念ではあった。
「私は帰らないよ。そう、あの時に決めた」
うん、とユージーンは笑った。そう言うと思ってたと。なら何故来たと問うても・・・この男は煙に巻いて答えまい。だからクリードもあえて聞かなかった。
少し歩いて、リニアの乗り場に出る。じゃあここでいいよとユージーンが言う。
「何かあったら連絡入れるから～まあミクちゃんのことだから無理しちゃうんだろうけど、無理しないでね」
「その呼び名はやめろ。結城の皆にもよろしく伝えてくれ」
「了解。んで、城戸の方にも伝えとくよ、元気でしてたよって」
じゃあねとユージーンは手を振り、丁度来たリニアに乗り込んだ。何となく見送ってからクリードは家の方へ足を向ける。これからの事を考えると、ますます頭が痛くなりそうだった。
まずは金の御方に連絡をして、数人で見ていた界のチェックポイントを一人で見る算段もして・・・それから。
「・・・あなた？」
後ろから声をかけられて振り向くと、買い物に出かけた妻が居た。手には重そうに買い物袋を提げている。
「こんなところでどうしたの？ユージーンさんは？」
「今帰ったよ。見送りに出ていたんだ」
重そうな袋を妻から受け取り、並んで歩き出した。

まあと妻は声をあげる。
「ユージーンさんにも美味しいものを食べてもらおうと思ってましたのに・・・残念だわ」
こんなことなら、マフィンだけじゃなく違うものも作っていればよかったわ。いいえ家に居て何か作ればよかったわとしきりに繰り返すので、クリードは何やら複雑な気分になる。
「お菓子がとても美味しかったと言っていたよ。今度ゆっくり来るそうだから、その時にでもご馳走してやってくれないか」
ええ、もちろん腕を振るいますともと妻は言う。妻の顔をちらりと見て・・・言おうか言うまいか悩んだ後、クリードは言った。やはり、一度聞かねばどうにも落ち着かないと思ったからだった。
「一つ聞いていいかな・・・」
「あら、あなた、なんですか？」
「どうにも・・・お前やスティールは、あれが・・・ユージーンが来るのを、やけに楽しみにしてるなあと思うんだが・・・何故だい？」
妻は目を丸くした後・・・くすくすと笑い出した。
「あなた、真剣な顔をして聞くかと思えば・・・まあ・・・」
クリードはバツが悪くてふいと顔を逸らす。くすくす笑いながら、妻は腕を組んできた。そういえば此処最近は、並んで歩くことも、腕を組むこともなかったなあとクリードは思った。
「あのね、あなたとユージーンさんって、よく似てるでしょ？だから、若いときの貴方に会えたような気になるのよ」
妻の返事に、ますます複雑な気持ちになったクリードだった・・・。

## 百年の眠り　1（前書き）

小ネタが終わりタイトルの中篇始まります。
ちょっと泣ける真面目なお話です。

## 百年の眠り　1

眠り姫・・・どうか。
百年のまどろみを、わたしにください。
百年眠って目覚めた後に、もう一度、笑えるように。

「シャール、あたし、来たよっ。お願いだから目を覚ましてっ」
主の眠りを妨げるな。そんな意志すら感じられる茨がうねり・・・ざあっと蛇のように少女に向かっていく。
「シャール、あたしは此処に居るよ」
少女の柔らかな頬を、茨の棘が掠め、皮膚が破れる。細い腕にも足にも・・・見る間に傷が増えていくのに、少女は笑みさえ浮かべて、手を差し伸べる。緑の茨に囲まれ、眠る少年に向けて。
「ねえ、シャール・・・」
棘を持つ茨がするすると少女に巻き付き・・・腕や足や・・・喉元を締め付ける。
苦痛の表情を浮かべるどころか、指先の皮膚が破れ血が流れ出すのにも構わずに、少女は茨に触れた。
「あなたは何処に居るの？」

「最近・・・ちゃんと眠れていますか？」
え、と振り返ると、こちらを気遣う二対の・・・深い色の瞳とぶつかり、口ごもってしまう。よく似た顔が、同じ表情を浮かべてじっと見つめてくるのに、さて何と答えたものかと視線をそらした。
それが、問いに対する雄弁な答えになると気付かないまま。
「眠れてないのね？」

呆れたため息をついて、彼女が白い手のひらで触れてくる。目の下や、頬を撫でられて、思わず首を竦めた。
「大きな隈が出来てるわよ。それに、ちゃんと食べて無いでしょう、違う？」
誤魔化すと後で酷いわよ。嘘付こうとしても駄目よ、わかるんだから。
駄目押しをされては、諦めて大人しく頷くしか道は残されていない。確かに最近あまり眠れなかったし、食欲も無かったから・・・一人で食事をする時は、殆ど何も口にしなかった。
それでも眠気や空腹感は来ないので。
「体を壊しては元も子もないでしょう」
呆れたような声で呟かれて、視線が地に落ちる。自分なりに精一杯やっているつもりで、それが返って悪い結果になってしまうと、どんな言葉を返せばいいのか分からなくて・・・立ち竦んでしまう。
項垂れていると、「ほらほら、そんな暗い顔しないの！」とうにっと頬を引っ張られた。
「いたたたっ・・・何するの、リン」
容赦ない力で頬を抓られ、思わず涙目でしゃがみこむ。あら逃げられちゃったわとリン・・・リンドグレーンは何処か残念そうに呟いた。その横では、手加減しろよとリンの兄のレン・・・レンブラントが苦笑いを浮かべていた。好きなように使うがいいよと、長老から借り受けた双子の兄妹には、とても助けられているのだけど。
彼らからからかわれたり・・・優しい目を向けられたりすると、何とも言えない居心地のいいような悪いような、奇妙な気持ちになるのだった。
「私たちは、ただあなたの事が心配なんですよ。何度も言いましたけど、誰かの期待に応えようとか、変に思いつめないようにして下さいね。あなたは、あなたが出来る事をすればいいんですから」
「そうそう。今あなたがしている事こそ、他の人はしようとも思わなかったし、出来なかったことでしょう？もっと胸張ってなさいよ」

わかった？リンは鼻先に指を突きつけ、あちこち剥げかけている石畳を足音も高く歩いていく。
残されたレンと思わず顔を見合わせると、彼は目元に笑いを滲ませて・・・そうすると普段の怜悧な様子がほどけて、途端に雰囲気が柔らかくなる・・・大きな手を伸ばしてきた。
「わ、何するのさ」
「ここに丁度頭があったもので」
「これから人に会うんだよっ、あ～あ、頭、ぐしゃぐしゃになったじゃないか・・・」
彼から距離を置いて、鳥の巣のようになった髪の毛を手櫛で直していると、彼はまた笑った。
「そういう顔でいて下さいね。あんまりな顔では、人に会えないでしょう？」
特に今日会う相手は、一癖も二癖もある相手ですよ。
うん、と頷くと、彼はここまだ跳ねてますよと手を伸ばしてきた。大きな手が、今度は髪の毛を梳いていく。
伸びた髪を結わえる紐を一旦外し、梳き整えてくれた後、元通りに結んでくれた。髪の毛を撫でられるのは・・・内緒だけどかなり好きかも知れない。ついうっとりと目を閉じてしまうから。
多分、犬の姿でいた頃の名残なんだろうと思う。優しく触れてくれた、あの子の手を思い出すから。
「はい、出来ました。これが済んだら、一緒に食事をしませんか？昨日シチューを煮込んだんですよ」
「うん、ありがとう。楽しみだな。レンは料理上手だもんね」
「褒めてもらってアレですが、まあ、リンよりはマシという程度ですよ」
「リンが聞いたら怒るよ・・・あ」
彼らが今居る、路地の小道の向こう・・・大通りへ出る辺りで、リンが腰に手を当ててこちらを睨んでいた。
「もう、二人とも何やってんの！目的地は遠いんだから、日が暮れ

ちゃうわよ！」
「ごめん、今行くよっ」
レンと顔を見合わせた後、小さく笑いあって・・・駆け出した。

人を拒絶するような高くそびえる門と、屋敷の周りを取り囲む、高く厚い壁。その二つだけでもこの屋敷の主の人となりは知れようというものだった。徹底的な拒絶、それしか感じない。すべてを拒む氷の壁のような。
まるで要塞ね。リンの言葉に、シャールも同感だった。厚い壁とそびえる門の二つで他を拒絶し、何を守ろうとしていたのだろうか。
そんなものでさえ防げぬ脅威が・・・かつては存在していたけれど。
脅威が突然去った今でも、門は閉ざされたままだという。
「何故、長老は、この館を訪れるよう、言ったんだろう」
閉ざされた門を見上げ、思わずシャールは呟いていた。

時々シャールは、リンとレンを貸してくれた長老に会いにいく。現状を話したり、請われるまま狭間の界の様子を話したりもする。ヤツカの新作お菓子をお裾分けしたときはいたく気に入ったようで、店の場所を聞かれた。
それから時々、ヤツカの店で食事をしていると話していた。あの坊主が食堂開いていたとはなと、空気の抜ける様な笑い声をたてて。
時々・・・どうしてその方法がいいと思ったのか、とか、何故上手く行かなかったのかわかるか、など問われて、答えに困ることもしばしばだったけれど。
学校って、こんな感じなのかなとシャールは思ったのだ。試験を受ける生徒って、こんな気分なのかもと、明日試験なんだ～どうしようと泣きそうな顔で机に向かっていた少女を思い出したりもする。
いつものようにお茶を飲み、お菓子を摘みながら話した後・・・

おう、そうじゃったと長老は言った。
「そうそう、氷の館には行ったかね」と。

「氷の館・・・それは何処ですか」
「湖の傍にある館じゃよ。かなり大きな館で、目にしているはずじゃがのう。まあ、行ってみるがいいよ。そこの主はかなり偏屈じゃが、辺りの住民に対して大きな影響力を持っておった。館の主からの働きかけがあれば、元の住民も聞く耳を持つやもしれんな」
「ありがとうございます」
もし主が話を聞いてくれたら・・・事態はまた、一歩進むかもしれない。そう思うと嬉しくて、弾むように礼を言ったシャールに、長老はいやなにと手を振った後・・・ぽつんと言った。
「じゃが・・・お前さんにとって、辛い結果にならねばいいがの」
長い時間が経った後も・・・あやつは変わらぬままかと、長老は呟く。
首を傾げたシャールにはそれ以上何も答えなかった。
暇を請う時間になり、シャールは今度来た時に結果を話すことを約束したのだけど。扉を閉める間際、長老は言った。
「氷の館は・・・かつては、森の館と呼ばれていだんじゃよ」と。
立ち竦んでいても仕様が無い。シャールは門に付けられたノッカーを叩き、訪れを告げる。
「すみません、誰か居ませんか～」
館の中からいらえはない。重さすら感じるような沈黙が見えるようだ。もしくは厚い壁に阻まれて、聞こえていないのかもしれない。氷の館、と長老が言った館は、周りを鬱蒼と茂る木々に取り囲まれ、シャールたちが居る門の前でさえ、昼なお暗い。門へと続く道は途中から舗装が剥がれ落ち、枯葉や枯れ草が積もっていた。それらが腐食して、何とも言えない匂いを放っている。ここ数日、雨など降っていないのに、道はぬかるみ、歩くのに難儀をした。
じっとしていると、ひんやりとした湿気が、足元から這い登ってく

るようだった。
「どうする？返事がないわね」
「この館の主は人嫌いだからな・・・門前払いを食わせる気なのかもしれないな」
「でも変ね。そんなこと長老さま、ご存知のはずでしょう。何故、わざわざ此処へ行けっておっしゃったのかしらね」
リンとレンはよく似た顔は、腑に落ちないと首を傾げる。
「何かお考えがあっての事だろうが・・・おや、誰か来るぞ」
「ほんとね」
門の向こうに人の気配を感じて、彼らは居住まいを正す。すぐに扉は内側から開いた。重い軋みをあげながら。
「どなたですか。当館に何用で」
顔色のわるい、痩せた老年の男が顔を出す。この館の家令だろうか、シャールたちを値踏みするような視線を投げてきた。
目的は何か、何をもたらしてくれるか、どれだけのモノを支払えばよいか・・・など、似たような視線をさんざん浴びてきて、いい加減慣れたつもりでも、あまり気分のいいものじゃない。
シャールは一歩前に進み出て、己の名と、訪問の目的を告げた。
「突然すみません。こちらの主にお目にかかって、お話がしたいんですが。街へと移り住んだ住民の事で」
主に尋ねて参ります、このままお待ちください。
一旦扉は閉じられた。そして、さほど待たされることなく、扉は再び開いた。
「主が会うと申しております・・・どうぞ」
そうして、彼らは氷の館に招き入れられたのだった。

## 2

館の中は、外よりもなお暗い。長い廊下のあちこちに蜀台が設けられていたが、灯された明かりは僅かだった。
動かない空気、人の気配の感じられない館。閉じられたままの多くの部屋。おそらく・・・時間の経過と共に埃が澱のように積もっているに違いない。かつては大勢の人で賑わっていた館であったろうにと、埃で覆われ退色した調度品から、それは推し量られた。
家令の後ろを、シャールは歩いていた。銀の髪が、僅かな灯りをうつし朱の色に輝いている。
レンは何故長老の真意をいまだ測りかねていた。長老から全てを知らされないのは、自分たち兄妹も同じだった。
何のために、その形のいい頭はついているんだね。
答えを請うても、それが容易く与えられた事は無い。その点では、自分たちも前を行く少年も大差なかった。
ただ、自分たちの方が経験のお陰で、また少年があまりに世慣れてないため・・・手助けできる事が多い、それだけだ。
長老たちからしてみれば、彼も自分たちもそう変わらないのだろう。

思考を巡らせながらも、レンは抜かりなく逃げ道を頭に叩き込んでいる。それは彼の隣を歩く妹も同じだろう。時折後ろを振り返りながら、来た道を確認している。何かあったときのための、用心は欠かせない。
そうして・・・長い廊下を何度も曲がり、回廊を抜け、階段を上り・・・家令はようやく足を止めた。
「こちらで主がお待ちでございます」
家令が扉を叩き、客人の到着を告げた。内側から、入れと低い男の声がした。

まず目に入ったのは、意匠の凝らされた大きな机だった。ペンや羽箒が幾本も立てられ、紙の束がうず高く積まれている。部屋の両脇は天井に届くほどの棚が作られ、本でぎっしり埋まっていた。本の匂い、インクの匂い、そして・・・澱んだ、おそらくこの館に染み付いた匂いが鼻孔をくすぐった。

廊下とは異なり、主の部屋には灯りが煌々と灯されている。机の背後は大きな窓が作られていたが、鬱蒼と茂った木々のせいで、日の光は殆ど射さないようにみえた。

館の主は、椅子に腰かけ、なにやら一通の手紙に目を通していた。

「お館さま、客人をお通ししました。他に何か御用はございますか」

主は顔も上げず、手を振って答えた。それは犬でも追い払うような仕草に見えた。

「無い。わたしが呼ぶまで来るな」

「畏まりました」

家令は主の言動に慣れているのだろう。顔色ひとつ変えず、言いつけどおり部屋を去った。

扉が閉まってから、さて、と主は手紙から視線を上げた。主は黒いシャツとズボンを身につけ、袖口や襟に銀糸で刺繍された黒い上着を羽織っている。

両の手を組み、その上に顎を乗せ、値踏みするような視線で自分たちを見た。あからさまで見下すような・・・まるで蔑むような視線にレンは内心眉を潜める。

街の有力者たちは、確かに己の私腹を肥やすことに腐心している者も多いが・・・そして、彼らからは己の得になるかどうか、値踏みする視線を向けられた事は数知れないが・・・それでも。

これほどの、冷ややかな怒りすら感じるような、目で見られた事は無い。

横に立つ妹もそれは感じたようで、紅い唇は笑いの形を作っているものの、きつく拳を握っている。自分より沸点の低い彼女が暴走

するのも心配であるが、何よりシャールの事が気がかりだった。
彼も対面する相手から、冷たい怒りのような・・・身の竦むような感情を感じているのだろう。ただでさえ硬かった顔が強張っている。精一杯笑みを浮かべようと笑顔を作るが、返ってそれは痛々しく映った。
それでも・・・この場は自分たちが手を出してはならないと理解している。努めて無表情を装い、何故主がそのような振る舞いをするのか、すこしでもわかればよいと、言動を残らず記憶する、それより出来る事はなさそうに思えた。
「初めまして、シャールと言います。突然の訪問を許して下さり、ありがとうございます」
主は何も答えない。ただ、視線で言葉の先を促してきた。言ってみろ、もし気に入れば聞いてやる、そんな尊大な視線に、すぐ傍で、ぎりっと嫌な音がした。横を見なくてもわかる、リンが歯を噛みしめたのだろう。
頼むから暴走してくれるなよと思いながらも、レンは主の様子とシャールの様子に気を配っていた。
シャールは訥々と街の現状を主に訴える。水に呑まれた土地から逃げた住人が、街へ流入していること。
そのため街が人口過密になり、十分な家がなく、また働き口もなく、治安が悪化していること。
毒で汚染された土地や水は、今では清められていること。草が生え始め、動物もちらほら姿を現していること。
土地の住人がもとの場所へ帰りたいと言うなら・・・家を建て直し家畜を飼ったり、畑を作り直すための費用の補助は、長老会が負担するとの言質をとっていること。
「・・・ですから、あなたから住民に言って欲しいんです。元の土地に戻るようにと」
あなたの言葉なら、住民たちも聞くでしょうから。そうシャールは締めくくり、そうだ、と手にした布袋から、土のついたままの花

を取り出した。
薄桃色の、幾重にも重なる花弁が特徴的な、ちいさな花を。ここで来る途中見つけた花だ。この界でも、この森近辺でしか咲かないそれを、主に見せようと彼は土ごと掘り出し、ここへ運んだのだ。
それを主に差し出す。主は差し出された花を冷ややかに見つめ、やおら立ち上がった。大股で机を回り、部屋の中央で立つシャールに近寄った。灯りを受けて、主のくすんだ銀色の髪が光る。年の頃はレンと大差ないように見え、館の主の年若さに驚く。
主はレンと同じくらい背が高く、膝まである長い上着の裾が、歩みにつればさりと広がった。
驚き目を瞠るシャールに構わず、主はおもむろにシャールの顎に手をかけ、くいと上を向かせて、口元を歪めた。いやな笑い方だと、レンは思った。
「その顔と体で、長老を誑かしたのか？さすがあの女の子どもだな・・・あの女によく似ている」
わたしも誑し込んでみるかと・・・毒のように主は囁いた。侮蔑を隠しもせず。
「あなた、何を言っているのっ」
とうとう我慢の限界を超えたリンが叫ぶ。主は彼女を一顧だにせず、シャールの差し出した花に目を落とし、鼻で笑った。
「このような花など・・・要らぬわ」
奪い取り、床へ投げ捨てる。更に何度も何度も踏みにじった。薄い花弁は無残に千切れ、見る影もなかった。
主の言葉と、行動がようやく理解出来たのだろう・・・シャールの白い頬に血が上る。主から飛び退ると怒りも露に叫んだ。
「あなたは、一体何を言うんです。なんて酷い事を・・・っ」
過ぎる怒りのためか、彼の声は震えていた。
「あなたは、僕の母の何を知っていると言うんですかっ。あなたに、母を貶める権利なんか、ないっ」
「権利？・・・ほう、そんなもの、関係ない」

主は目を細めて、再び笑いの形に唇を歪める。嫌な笑い方だとレンは再び思った。猫が鼠をいたぶる様な、力を嵩に来て弱者を弄ぶもの特有の笑みだとレンは気がついた。

止めなくては。この館の主の助力が望めなくとも、いい。それよりも、彼の心の平穏の方が、ずっと大事だったから。

「あの女のした事のせいで、どれほど迷惑を蒙った者がいたか・・・考えた事はあるのか？まあでも、あの女は死んだな。当然の報いじゃないか」

あの女に相応しい末期だったそうだな？

シャールの母の最期を、レンもリンも聞き及んでいる。それを館の主は当然だと言い放った。あまりに酷い言葉に、喉の奥が凍りついた。

これ以上シャールに無残な言葉を聞かせてはならない。この館を出ようとレンとリンは目配せをして、気がついた。頬に風が触れている。窓も扉も閉められている室内で、何故風が吹くのか？

「母さんのした事は・・・確かに周りの人にも迷惑をかけた。命を落とした人だって居る。でも・・・母さんの死に方が、その報いだと言うなら」

低くシャールが呟く。みしみしと部屋の建材が嫌な音を立て、壁に大きな亀裂が走った。風が渦を巻き、紙束や墨壷や、ペンを天井へと巻き上げてゆく。怒りのため、シャールの力が暴走しようとしていた。

「母さんが死んだ今、最早誰にも、母さんを貶める権利なんてない・・・僕が」

許さないよ。

重い本棚の中身が、風に巻き上げられる。窓硝子が粉々に砕け散り、外に飛散していく。主は茫然と目の前で吹き荒れる異常な風に立ち竦んでいた。

「シャール！もういいでしょう、ここから出ましょう！この男には、あなたが力を揮う価値すらない！」

「シャール！ねえ、聞こえてる？あなたの力は、そんなことの為にあるんじゃ、ないでしょう？」
レンはリンと共に声の限り叫んだが、怒りに満ちたシャールには届かない。ますます力の暴走は拡大していた。
このまま報復をとげたとして、きっとシャールは後悔する。そんな思いをさせるくらいなら、今なんとしてでも止めなければとレンは声を振り絞る。
「シャール、聞こえていますかっ」

## 3

レンとリンが叫んでいた。
分厚い窓硝子ごしに見るように・・・何の感情も湧かない。ねえ、そんな顔しないで。すぐ終わるから。
そうしたら、一緒に此処から出よう。そして全部忘れるんだ。
浴びせられた酷い言葉、向けられた冷たい視線、それら全部。
不思議なほど心の中は落ち着いていた。指先まで隅々に力が満ちて、どんな事でも出来そうで。
試しに窓の外の木に力を向けてみると、館の屋根を越す大木は、枝を揺らし地面に倒れた。
たいして面白いと思わなくて、今度は、と壁に取りすがり震えている人に目を向ける。
ゆるしてくれ、そう唇が動いたけど、許さないよ。
さあ・・・どんな方法で、苦痛を味わってもらおうか。
なんだかとても楽しくなって、いつの間にか笑っていた。結わえていた紐が解け、伸びた髪の毛が纏わりついて邪魔だった。
目の前の男は・・・僅かに目を瞠る。そうして呟いた言葉は。
ねえ・・・許しを乞わないの？
もう、いい、詰まらない。そうだ、この男がさっきしたように、押しつぶし、踏みにじってしまおう。
揮うための力を貯めた時・・・男の銀髪がきらりと光を弾いた。
あたし、シャールの髪の色、好きだな。とっても綺麗な銀色。
手触りも好き。
そう言って笑う少女。
「あなたがこんな風に力を使ったと知れば、悲しむ人が居るでしょ

う！」
レンの声が、はっきり聞こえた。
ああ・・・この力を揮ったら、きっとあの子は悲しむ。理由を理解してくれたとしても・・・もう二度と笑ってくれないだろう。
急速に熱が冷めるように、集めていた力が逃げてゆく。吹き荒れていた風も次第に収まってゆく。シャールを中心として、様々なものが散乱していた。主は目を見開いたまま、言葉も無い様子だった。
力の暴走は収まったらしい。彼に駆け寄ろうとして・・・鋭い声に制止された。
「来ないで！駄目だ、力が止められないっ・・・」
両腕で体を抱き、蹲るシャールの周りに、再び風が吹いた。レンは舌打ちをする。無理やり押さえ込んだ力が暴走を始めたらしい。
再び暴風が吹き荒れるのか・・・そして、それはいつ収まるのか。
リンは再びシャールに叫ぶ。
「シャールっ」
鋭い風の牙が、リンに向かう。反射的に後ろへとさがったリンの片袖をざっくりと引き裂き、肘の辺りから血を滲ませた。
「リンっ」
「平気よ、掠っただけ。ねえシャール、あたしたちに何が出来る？何をして欲しい？」
シャールはリンの問いかけに、首を振るばかりだった。青褪め大きく目を瞠る様子に、手を差し伸べたくとも、風の壁が立ち塞がり、届かない。
レンは届かない距離に苛立つ。叫ぼうと口を開きかけたとき、シャールの声が聞こえた。
「ごめんね、スティール」と。
それは、彼から何度も聞かされた・・・彼が大事に思っている少女の名。
こんな時でさえ、呼ぶのは彼女の名前か。

「ごめんね・・・」シャールはそればかりを繰り返す。そうして、部屋が大きく揺れ、立っているのが困難になった。レンは現れたものに驚いて目を見張った。床を突き破り現れたもの・・・それは、通常の何倍も太い茎の。

茨だった。緑の茨は生き物のようにうねり、シャールの周囲を取り囲んでいく。

「何よこれっ」

リンは悲鳴をあげながら、茨を引きちぎろうと手にしたナイフで薙いだ。けれど太い茎は容易く切り払えない。

しゅるしゅる・・・みるみるうちに内側にシャールを取り込み、茨の繭を形作ろうとしている。どくり、どくりと血管のように波打ちながら、彼の姿を隠してゆく。己の体を抱き、ちいさく蹲る彼を更に守るように。

「シャール！」

声の限り呼んでも、彼から返事は返らない。ただ、ごめんねと繰り返す声ばかりで。

自分たちは引き止める錘にさえならないのかと・・・力の足りなさを思い知る。

なす術もなく、茨の繭が出現した。風はいつしか止んでいた。奇妙な静けさの中、リンとレンは茨の繭を茫然と見上げていた・・・。

「・・・長老に知らせねば・・・」

呟いた声は、自分の声と思えぬほど、かすれていた。

ねえ・・・お願いだから。

百年のまどろみを、わたしに下さい。そうしたら。

また、笑えるように、なる気がするから。

自宅の書斎で午後の読書を楽しんでいたクリードは、携帯電話の着信音に眉をひそめた。この着信音は、傍迷惑な従兄弟だからだ。

折角の穏やかな休日が台無しじゃないかと、眼鏡を指で押し上げ、舌打ちしながら机の上に置かれた携帯を取り上げる。下らない用事なら即切ってやると思いながら通話ボタンを押した。
「・・・はい」
「あっミクちゃん、ちょっとモニター見て！今すぐっ」
「モニターだと・・・？何があったっ」
「いいから、早くっ」
ユージーンの声は、いつになく切羽詰ったものであり、緊急事態を悟ったクリードは素早くパソコンを立ち上げ、画面を切り替える。従兄弟の、自分に対するふざけた呼称を咎める事も忘れていた。それよりも・・・今は次元管理官としての職務が優先されたからだ。そして飛び込んできた数値に驚き、呻いた。
「なんだ、この異常値は。それも、とある一点が異常に高いぞ」
「理由はわからない。僕も気付いたのはついさっきだ。それまで、べた凪の海みたいだったのに、急に嵐が吹き荒れたみたいだ」
電話の向こうで、ユージーンは同じようにモニターを見ているのだろう。
モニターには、銀の界を形作る“力場”が映っていた。何年も監視を続けた結果、どの範囲内なら安全で、どこからが異常値かが、数値で測れるようになっていた。界にいくつかポイントを定め、その地点での数値を示している。その数値は時々変動するものの、王妃の死亡後、ある例外をのぞけば、概ね落ち着いていたのに。
コレって何だか、よそのお宅に、勝手に百葉箱設置するようなモンだよねえと、ユージーンは評した事がある。自分ちの方に、何か被害があったら困るから、アナタんちを監視させてね、って？何か酷くない？
確かに、それに同意する部分もある。この狭間の界や銀の界の住人が、気付かないのをいい事に、界のあちこちに密かに観測装置を仕掛けているのだから。クリードは連鎖的な界の崩壊を招くよりはマシだろうと割り切っていた。本国のやり方に、些か・・・否、か

なり疑問はあるにせよ。
金の界に“観測装置”はない。金の君が治めている界は安定しており、彼らの監視は不要と見なされている。ただ、他の界と近接する付近だけは、定期的なチェックが入っていた。
「そして、見てよ。一点が異常に高いのもだけど、他の点も連鎖的に数値を上げている・・・このままだと、銀の界全体に広がる恐れがあるよ」
まるで、突如出現した病原体が、あちこちに転移し活性化する様にも似て。
ユージーンの指摘に、クリードは頭を抱えたが。決断は早かった。
「狭間の界での“力場”を強化し、銀へと落ち込むものが出ないようにする。異常値が収まるまでは監視の強化だ。常駐の奴に連絡してくれ」
「了解。それと本国にもしとくね。壊れかけの鍋の底に、ちゃんとフタしときなよってね」
本国との折衝はこっちに任せてね、ミクちゃん頑張り過ぎないようにねと、ユージーンはいつものように、軽口を叩いて、クリードが電話を叩ききる前に電話は向こうから切られた。
思わず舌打ちをして、クリードはモニターを見つめた。異常の兆候など無かった。狭間の界も金の界も安定しており、他の界からの影響といった、外部的要因は見当たらない。
それならば。
「シャールに、何かあったのか・・・？」
クリードはモニターを切り替え、パソコンに小さな部品を接続する。金の界へ連絡をするのは、職場でと決めていたのだが・・・緊急事態だ、仕方ないと思いながら・・・金の界へと通信を繋いだ。
「金の御方。おくつろぎ中の所申し訳ございませんが・・・お気づきでしょうか」
モニターごしにもわかる・・・光そのもののような、豪奢な金の髪の主は、ええ、と頷いた。

「銀の界の異変ね、こちらでも気付いているわよ。こっちにまで余波が飛んでいて、バランス保つのが大変だったら」
さっきからおおわらわよと髪の毛をかきあげる金の君に、手短にクリードは尋ねた。
「原因は・・・おわかりですか」
「シャールよ・・・あの子が、また暴走しかけたの。今は一旦落ち着いているけど、一度放たれた波が完全に消え去るまで、しばらくかかるわね」
「ええ・・・お忙しいところすみませんでした」
「いいえ。あなたも、しばらく大変ね」
それじゃ。短い言葉を残し、通信は終わった。原因はあの時と同じくシャールか。
力の暴走は止まったらしいが、影響は残る。しばらくは監視が必要かと、クリードはモニターを睨んでいた。

## 4

「御方様、大変ですっ」
「チェスミー、さっきから大変続きよ、今度はなあに？」
「それが・・・銀の界から、精霊たちが再び避難してきています・・・っ」
「彼らには、界が安定するまでの滞在を歓迎すると伝えなさい。他には？」
「銀と境を接する点の幾つかで、異常事態が起こってます！辺りの風景が歪み、違う場所の風景が見えるそうです！」
「あちらの界が映っているのね・・・下手すると、意識しないまま界渡りしてしまう者が出るわね・・・」
金の君は唇を噛む。まったく、あの男は何をやっているんだか！
「大方、リルと一緒に居られて、浮かれてたんでしょうけど・・・職務怠慢よ」
小さな呟きは、焦るチェスミーには聞こえなくて幸いだった。
「チェスミー、そういう場所には近づかないよう、院を通じて触れを出させて！住人たちの避難は、院に任せるわよ！私はしばらく、界の安定に力をふるうわ」
銀の“君”とはいえ・・・たった一人の力で、こうまで世界は不安定になるのか。それを思うと、金の君は不安になる。あの子の心次第で、界は容易く崩壊へと向かいかねない。
このまま・・・あの子一人に背負わせていいものかしら。このままでいいのかしら、と。
狭間の界は疾うに変わり、銀の界も変化した。そうして・・・再びの変化が、銀の界に訪れるのかもしれない。
「変わりゆくものに幸いあれ・・・さて、私は私の出来ることをしなきゃね」
ああ、リルフィとジルファにも、この事を伝えておかなければと、

金の君は頭の隅で考えていた。

緑の茨は、緩やかな拍動を繰り返す。床を突き破り、天井まで達する茎は、大人の腕ほども太い。
時折茎の内部を、光が明滅しながらのぼって行く。
「まるで、呼吸しているみたいね」
妹のリン・・・リンドグレーンは、行く手を阻む茨と、その奥に出来た茨の繭を見ながら、呟いた。
夜色の瞳には、隠しきれない愁いと苛立ちとが、等分に含まれている。
ああ、と頷いて、レン・・・レンブラントも、茨の繭を見つめた。彼女も自分も、本当はこんな事を話したいんじゃない。それを二人とも、よくわかっていた。
茨の繭の中で・・・彼はどうしているのだろう。
あの時・・・無理やり押さえ込んだ力が暴走を始めたとき、彼は自らを茨で覆い隠した。恐らくは、これ以上の力の暴発を起こさないために。そうして、再び界の崩壊を招くことがないようにと。
茨の繭に自ら閉じこもり・・・彼は今、何を考えているのだろう。眠っているのだろうか・・・それとも、幸せな夢を見ているのだろうか。
「出迎えもせず失礼」
低い声に、レンとリンは振り返る。氷の館の主にして・・・今は茨で覆われたこの部屋の持ち主が、うっそりと笑いながら立っていた。
「いいえ。我々のために、館の部屋をご提供いただき、感謝しています」
リンは、「あんな男と口をきくのは嫌！」と全ての対応をレンに任せてしまった。レンも、この状況の発端である館の主にいい感情を持たないが、シャールが此処に居る以上、主と交渉ないし最低限

の挨拶はしないわけにはいかなかった。
「感謝など・・・原因を作ったのは私だろう。見え透いた言葉は不要だ。それより、茨姫は出てきたかね」
「・・・いいえ。繭を作って以来、何の変化もありません」
「そうか。いっそ、この世の終わりまで眠る気かもしれんぞ。そうすれば、見たくないものを見ずにすむ」
見たい夢だけ、見ていればいいのさ。暗い目をして嘯いた主に、レンは怒りの感情を押し殺す。
緑の・・・茨の繭を見て、彼は“まるで茨姫のようだ”と笑ったのだ。
茨で身を飾り、茨で身を守り、他の誰も近づけない。他の誰にも近づけない。
救い手が現れるまで眠り続ける、茨姫。茨で他の誰を傷つけても、己が傷つく事はないから。そう主は哂っているのだろう。
レンは沈黙を守った。口を開けば、どんな言葉が口をついて出るか、またそれを抑えられる自信がなかったからだ。
「・・・まあ、いい。それが居る限り、館の部屋は勝手に使うがいい。何か入用なものでもあれば、家令に言え」
そういい捨てると、主は長い上着の裾を翻し、部屋の前から立ち去った。
足音が完全に聞こえなくなった頃、リンは頬を紅潮させて、怒りも露に吐き捨てた。
「何よあれ！何が茨姫よっ！こうなった原因は、あんたでしょうっ」
聞くたび腹がたつったらっ。床を足で踏み鳴らさんばかりの怒りように、レンも気持ちは同じだ。
ただ・・・微かな違和感も、同時に感じていた。シャールが眠る緑の繭。レンもリンも、なんとかこの場からそれを動かせないものかと考えた。シャールを酷く傷つけた人間の傍には、置いておきたくなかったのだ。
けれど、茨は彼らが伸ばす手、触れようとする手を悉く拒んだ。

見つめるだけならば、丈高い葦の原のように風にそよぐ如く緩やかに揺れている。しかし、触れようとするなら、鋭い棘をもった茨が、威嚇するようにうねり、空間を薙ぐのだ。
　これでは・・・為す術が無い。レンは、リンに長老への報告と指示を仰ぎに行かせた。足ならば己が行く方が早いが、シャールに危害が加えられる恐れがある以上・・・何せ主の、彼と彼の母への侮蔑には、目に余るものがあった・・・ここへは自分が残っていた方がよいと判断したのだ。
　館の主に、この繭は動かせそうに無いこと、彼のために、自分はしばらくこの館に留まりたいことなどを申し出ると、主は意外なほど淡々とその申し出を受け入れた。
「ソレが居る限り、そう言うだろうと思ってはいたさ。好きにするがいい。部屋をあけるゆえ、使い勝手のいいように、適当に使え。・・・ヨハン！」
「なんでしょうか、御館さま」
「客人がしばらくご滞在だ。部屋を整えてくれ」
「畏まりました」
　それについてゆけと、主はレンを促す。レンは躊躇した。この場を離れた途端、主が茨の繭に危害を加えるのではと懸念したからだ。主はそれを見透かしたように・・・暗く哂う。
「茨姫に手をあげるつもりはない。たとえ、傷つけようとしてもだ・・・手酷い傷を負わされるのは、こちらであろう？」
　そうして・・・茨の繭は、氷の館の、主の書斎に根をはり、茎を広げて息づいている。
「長老様がたは、何かおっしゃっていたか？」
「ううん・・・事態に変化があれば、すぐさま知らせるようにとだけ」
「そうか・・・」
　茨を見上げ、レンはもう何度目かわからない、ため息をついた。何も出来ず、ただ見ているしか出来ないのですか・・・それは、何

と辛いことでしょう、と。

私たちがあなたを呼ぶ声が、聞こえていますか。
私たちは、ここに居ます。
あなたの目が私たちを見ていなくても。
私たちは此処で、あなたを呼んでいるのです。

眠り姫・・・どうか。
百年のまどろみを、わたしにも下さい。そうしたら。
心から言えそうな気がするから。

あの子に。

「　　」

## 5

なんか・・・変だよね。スティールは釈然としない思いを抱えていた。ここしばらく、シャールと会えないのだ。

『今まで毎週会っていたけど、これからはもう少し間隔空けない？スティールも色々用事あるだろうし』

『そんなの、シャールと会う時間なら、あたし、作れるよ？』

『うん・・・それは凄く嬉しいし、僕も会いたいんだけどね。スティールに会っちゃうと、僕、甘えてしまうから』

もう少し、色々頑張りたいんだとシャールが言ったので、スティールとしてはそれ以上何も言えない。

『シャールは十分、頑張ってるよ・・・？』

シャールは静かに微笑んだ。（ヒトの顔は、犬だった頃よりは見慣れていないけど）その顔は急に大人びたように見えて、いつも一緒に居て、転げ回って遊んだ自分からしてみれば、何だか寂しい。

同じように育った兄弟から、置いて行かれたような気持ちになる。

優しげに見える彼だが、一度言い出したら引かない強情さも持ち合わせているので、彼女は頷くしかなかった。

それ以来・・・シャールと会う回数は減ってしまった。それでも、短い時間ならば、通信で話す事が出来るし、銀の界へと行くジルファに、伝言を頼んだりも出来た。

会えないなんて寂しい・・・そう、思っていたスティールだが、いつしか会えない事が常の、環境に慣れてしまっていた。けれど、忘れているはずなどない。

時々、シャールは今どうしているかなあ・・・ちゃんとご飯食べてるかなあ。今度会ったら、上手くできたお菓子、持って行こうかなあ・・・。あ、これ美味しい。今度シャールにも食べさせてあげようっ。

ふとした生活の折々に、物言わずとも瞳で雄弁に語る・・・すこし寂しげな目の色を思い出すから。
うん、シャールはシャールで、頑張りたいんだね。
それなら、あたしが出来ることは・・・時々は立ち止まってゆっくりお茶でもしようよ、そう誘うことだよね。
スティールは、そう思うことにした。
いまだ不安定な銀の界を立て直すべく、奮闘する彼の負担にならぬようにと。
「でも・・・こんな長い間、会えなかったこと、ないよ・・・？」
そういえば、いつからあたし、シャールに会ってないんだっけ？会ってない期間を数えて、驚いたのだ。最後の通信からでさえ、2ヶ月以上が経過している。ジルファに伝言を託していたのだが、それすら本当は届いていたのかどうか・・・わからない。ジルファは、“シャールは元気だったよ、今度会えるのを楽しみにしていたよ”今思えば当たり障りのない言葉しか、くれなかった。
シャールから直接通信が入る事はなく、またリルフィに繋いでもらっても、あちらと回線が繋がることはなかった。繋がらないことを、忙しいんだろうなという理由で、納得してしまって、いた。
いくら、自分の事で忙しかったからって・・・あたしって何て莫迦。何かとても大事な事を見落としていたんじゃないだろうか。
自分の迂闊さを悔やみ、胸の奥が焼けるように痛むが、こんな時に限ってリルフィもジルファも居ない。
スティールが起きた時には、彼らは何処に行ったのか、すでに姿が見えなかった。あたしに何も言わず、ジルファさんは兎も角も、リルまで何処に行ったんだろう。
スティールに出来ることは、じりじりしながら彼らが戻るのを待つことだけだった。
今にも雨が降りそうな・・・曇り空も、彼女の心を重く塞ぐ。ベッドの上でクッションを抱えて座り、どれくらいの時間が経ったのだろう。

かつん、と窓を叩く音か聞こえた。窓際に駆け寄ると、外には金の鳥と青い鳥が翼をはためかせている。
美しい羽も、いつの間にか降りだした雨のせいで、色を濃くしていた。
スティールが窓を開けると、二羽の鳥は部屋の中に、滑るように入ってきた。それぞれ止まり木に羽を休めると、ぷるぷると飛沫を払う。
「ふう、疲れちゃったわ～雨には降られるし、もう最悪」
金の鳥・・・リルフィはそう零すと、毛づくろいを始める。
「おや、雨の中の散歩も、晴れの日とは違う趣があっていいものだよ。特に君と一緒ならね！」
青い鳥・・・ジルファは、晴天もかくやという晴れ晴れとした調子で話す。リルフィは額を押さえるのにも似た仕草をした。
「・・・あんたと一緒ってのが、余計疲れる原因なんだけどね・・・」
彼らの遣り取りは、いつもと変わりない。彼らの様子を見ていると、自分の不安なんて、たいしたことじゃあ、ないような気がするけど。そう・・・思い込もうとしたけど、拡がるこの不安は何？
「ねえリル・・・何処行ってたの？何も言わずに出かけるって、珍しいね」
リルフィはあらそうかしらと、首をぐるりと巡らせる。
「そう？ちょっと出かける所があったのよ。あんたよく寝てたから、わざわざ起こさなかっただけ」
「ふうん・・・ジルファさんと一緒に出かけたの？」
「え・・・？いやね、一緒のはず、ないじゃない！たまたま帰りが一緒になっただけよ！」
嫌な事言わないでちょうだいと、羽を逆立てる様子はいつものリルフィだ。でも・・・スティールは何か変だと感じていた。微かな違和感。
「ねえ・・・疲れてるとこ悪いんだけど、あたしシャールと連絡取

りたいんだ。通信、繋げてくれる？」
「シャールと？ジルファがこの間顔見に行ったら、元気そうにしてたって、言ってたじゃない。悪いけど今日は疲れてるの。また今度にしてくれないかしら」
リルフィは一瞬答えに詰まった後、明るい調子で答えた。スティールは、自分の不安が確信に変わるのを、感じていた。
それなら、とリルフィと距離を置いたところで、毛づくろいしていたジルファに話しかける。
「ジルファさん、シャールに通信、繋いでくれませんか？どうしても、あたし、シャールと話がしたいの」
「彼は元気そうだったよ？そうだ、近々君に逢いたいから、都合を聞いておいてくれって頼まれたんだ。君はいつが都合いいかな？」
この間成功したお菓子を持って会いに行ったら、彼はきっと、とても喜ぶよと。ジルファは片目をつぶって、いい考えだと提案したが、スティールは首を横に振った。また、でも、今度、でも無くて。
あたしは。
「今、シャールと話がしたいの。あたし、長いことシャールの顔見て話してないの。今頃気付いたあたしも莫迦なんだけど・・・凄く不安なの。何か悪い事が起きているんじゃないかって。これがあたしの思い違いならいい。だから、それを確かめるために、シャールと直接話がしたいの」
だからお願いします。二羽の鳥に、スティールは一歩も退かない気で言った。
「スティール・・・」
リルフィがため息混じりに自分の名前を呼んだ。これは、あたしを何とかして宥めようとする時の癖だ。
「リル、あたしに何か隠してない？それってシャールの事なの？シャールに何か起きているの？」
矢継ぎ早に問うスティールに、とうとうジルファが笑い声をあげた。きっ、とリルフィがジルファを睨む。

「リル、君の負けだよ。スティールは気付いているようだ。これ以上隠していても仕方ないだろう」
リルフィはスティールとジルファを交互に見やり・・・そしてもう一度ため息をつく。そうやって自分を納得させたようだった。
「ええ、もう仕方ないわね・・・あんたに言わなくてすむよう、事態が変わらないかと思ったんだけど」
そう前置きをして話し始めたリルフィ。聞かされた内容に、スティールは言葉も無かった。

嘘でしょう？目を零れんばかりに見開き、口元を両手で覆って、少女はうずくまった。
「シャールが、そんな事になってたなんて・・・」
あたし、何にも知らなかった。知らなくて、他の人と笑ったり楽しいことしたりして、過ごしていた。
シャールに会ったらこんな話しようかな、これ作ってみようかな、なんて、他愛ないこと考えていた。
悔やむ少女に、リルフィは言った。
「そういう後悔の仕方はよくないわ。誰だって・・・先に何が起こるかなんて予想できない。誰かが笑っている瞬間にも、誰かが命を落としている。それは厳然とした事実。いつか起こるかもしれないことを愁い、常に心を悲しみで塞ぐわけにはいかないでしょう？」
「そうだよ。君が笑って過ごしていることが・・・彼にとっても望みであることは、間違いないんだからね。さて、その彼だが・・・」
ジルファはどう言ったものかとしばし思案した。異常を感じてすぐさま銀の界へ渡り、シャールの力の気配を辿って、氷の館へと翼を駆り、破れた窓越しに見た光景は、彼にしても言葉を失ってしまうものだった。
「・・・茨の繭に閉じこもって・・・そろそろ二月が経とうとしている。外からの呼びかけに全く答えず、茨に触れようとすると攻撃すらするようだ。リンとレンの兄妹の名前は、君も聞いたことがあ

るだろう？」
　スティールは顔も上げず頷く。僕の仕事を手伝ってくれているんだと、嬉しそうに話してくれた。
　いつか紹介するねと、約束してくれた。よく似た双子の兄妹だという・・・。
「彼らにしても、手の打ちようがなくて、困っているようだよ。今銀の界では“力”を使える者などいない。不用意に他者が近づかないようにと、彼ら二人で見守っているけれどね・・・」
「何か、シャールが起きないことで、困る事が他にもあるの？」
　言いよどんだジルファに、スティールは顔を上げた。ジルファも・・・リルフィも苦い顔をしている。
「おそらく、シャールが眠ったことで、春が来ないのよ。いつまで経っても温かくならない。このままだと、種まきの時期を失って・・・銀の界は酷い凶作になる恐れがあるわ」
「・・・そんな・・・」
　まだ不安定な銀の界だ。そこへ食料不足が起これば、どんな事態になるか、想像するだけでスティールはぞっとした。シャールが懸命に建て直しを図っていた銀の界。目覚めて・・・シャールが酷く荒れ果てた世界を見たとしたら、どんなに後悔することか。眠ったことが自分の力の暴走を止める手段であったとしても。
　結果として何も変わらなかったのだと。
「シャールの力の波動を感じて、わたしたちが銀の界に行ったときは、もう遅かったのよ。それ以来、状況に変化がないかと何度も行ってみるものの・・・膠着状態ね。いえ、気候に影響を与えているという点では、悪化すらしている」
　それなのにね、とリルフィは肩を竦める。彼女に似合わず自嘲気味に言う。
「わたしたちには、何も出来ない。他の界の事象に介入できない。まあ、前回はかなり介入したけれど、それは“あなたの願いをかなえるため”っていう名目があったからこそ、出来た離れ業ね」

もしこのままシャールが眠り続け、結果として銀の界が滅んだとしても、わたしたちには何も出来ないの。
見ていることしか。
「そう。互いに不干渉が、三界の取り決めであったからね。長い時の果てで、狭間は君の“力”が住人の内に拡散し、銀では己の血筋というものを作り、それにより伝わるものにした。かつてのままの“君”が居るのは、ただ金の界のみとなったけれど・・・それでも」
不干渉の取り決めは、厳然と生きている。不用意に干渉すれば、干渉者は己の命を引き換えにせねばならないだろうほどに。
「・・・そんな・・・」
スティールは告げられる事実に打ちのめされた。リルフィもジルファも、彼女がシャールをどれほど大切に思っているか知っている。力が貸せるような状況であれば・・・シャールを救う手立てを取ってくれたはずだ。
疑いなく彼女は思う。けれど、彼らには越えられない理があって・・・。
ぎゅっと目を閉じ、頭を抱え込んだ。長い紅茶色の髪の毛が手の中でぐしゃぐしゃになっても、気にしなかった。
今までで一番長いね。どこまで伸ばすの？
さらさらとスティールの髪を梳きながら、眩しそうに笑った彼。
「・・・ねえ、リル」
「なあに」
「なんで、あたしに何にも教えてくれなかったの・・・？あたしが聞かなかったら、黙っているつもりだった？」
「ええ、そうよ。最後まで黙っているつもりだった。だって、あなたに何が出来るの？特別な力なんてない、普通の女の子に」
「でも、前、銀の界に行った時だって・・・っ」
「ええそうね。でもあの時は、“もう一度シャールに会いたい”が、あんたの望みだった。それくらいなら・・・何とか叶えることが出来ると思った。危険な事にも巻き込まれたけど、助け手も現れたし

ね」
　でも、今回は、助け手は期待できないわ。だから、黙っていたのよと金の鳥は静かに言った。
　スティールは唇を噛み締め、きつく両手を握り締めた。リルの言うとおり、自分には特別な力などない。銀の界へ界渡り出来たり、そこにいるシャールと・・・本来二度と会えないはずの彼とあったり話したり出来るのも、全ては他の人の力によるものだ。
　何が出来るの？
　リルフィの言葉は、胸に突き刺さるけれど・・・抗いようのない事実だった。でも・・・それでも。
スティールは顔を上げて、リルフィと正面から向き直る。
「あたしには特別な力はないよ。何も出来ないんだと・・・分かってる。その上で、あたしはあなたに頼むわ。
銀の界に、界渡りさせて・・・シャールにもう一度、会いたいの」
「スティール・・・あんたは、もう・・・」
　諦め顔でリルフィはため息をついた。少女がそう言い出すことを見越していたのだろう。その横で、いや、と言い出したのはジルファだ。
「いや、もしかしたら、君の声には反応するかもしれないね。何せ君と彼の間には、深い絆があるから。誰が呼びかけても駄目で、最早誰も近づけない。もしかしたら、君の声にも反応せずに、君をも攻撃するかもしれない・・・それでも、行くかい？」
　スティールの心はもう決まっていた。
「行く」
　行かなければ後悔する。何も出来ない結果に終わるかもしれないけれど・・・やらずに後悔するより、遥かにマシだと思う。少しでも、彼が目覚める可能性があるのなら。
　短く、けれどはっきり答えた少女に、リルフィは仕方ないわね、と呟いた。
「仕方ない、銀へと連れてってあげる。今からだと遅いから、明日

の朝早くに出るわよ。いいわね？」

## 6

「ねえ・・・あんた、何考えてるの？」
「なんのことかな？」
「はぐらかさないで。シャールを目覚めさせる可能性があるなんて言われたら、あの子が諦めるはず、ないじゃない。そりゃ、止められるなんて思わなかったけど」
「その可能性はあるだろう？互いが互いを深く思っているのは確かだし・・・何よりシャールはあの子が好きだから・・・他の誰の声は届かなくても、あの子の声は聞こえるかもしれない。理に縛られて、他の手は打てない私たちにとっては、彼らの絆という・・・一縷の望みにかけるしか、ないんじゃないか？」
「・・・わたし、もしあの子に何かあったら、あんたを許さないからね」
「・・・なんでそこに話題が飛ぶんだい？」
「あんたが何を考えて、どんな思惑があって、銀へ行っていたのか、わたしは知らない。そんな事はわたしには関係ないから。でも・・・あの子に何かあったら、わたしはずっと、あんたを許さないわ」
「おや、ずっと私の事を考えてくれるわけだね！それは嬉しいな・・・っと、こんな所で力使えば、折角眠ったスティールが起きてしまうよ？」
「あんたねえ、ふざけるなら、時と場合を選びなさいよっ」
「いや、ふざけたわけじゃあ、なくて本音なんだけどね・・・まあ兎も角、頼むからその力の刃は仕舞っておいてくれないか」
「ふざけたこと言わないのならね。で？言いたいことあるなら言いなさい。その上で、コレ仕舞うかどうか判断するわ」
「イチオウね、あの子を銀の界へ連れて行くのはどうかっていう判断は、金の君にも相談したことだよ？金の君もこの事態を憂えてい

たからね」
「ええ・・・銀の界から精霊たちが逃げ込んでいるようね」
「界の境界も曖昧になっているらしい。そうであっても、金の君自身で、銀に介入するわけにはいかないからね」
「わかってるわ。金の君がとても心を痛めているだろうことも、銀の界がこのまま行けば、酷く荒れてしまうだろうことも・・・それでもね。わたしは、あの子を危険な目に遭わせたくなかったのよ」
「だから、黙っていたのかい？シャールに異変が起きた時・・・すぐにスティールに話そうとしないから、君には君の考えがあるんだろうと思って、私も黙っていたんだけど」
「そうよ。シャールが自然に目覚めればいいと思ってた。それまで黙っていればいいとね。でも、無理な話だったようね。ホントにもう、あの子は何で自分から危ない事に頭を突っ込むんだろう。そりゃ他人の事も大事でしょうけど、もっと自分の事を大事にして欲しいわ。傍ではらはらするわたしの身にもなってもらいたいわ」
「あの子が自分だけを大事にするような子だったら、そもそも君は、こんなにあの子を大切に思わないだろう？仕方ないと笑うしかないだろうねえ。それに・・・もし、取り返しのつかない所まで事態が進んでから、あの子がシャールの事を知ったら・・・知らなかった事をあの子は後悔して自分を責めるよ」
「ええ、ほんとそうね。笑っていいわよ、わたしはあの子が大切なあまり、目が曇っていたようね・・・ほんと、そうならなくてよかった。でも、それとコレは別」
「なんだい、いきなり怖い顔をして。もちろん、どんな顔してたって、君は可愛いけどね」
「あああ～もう、あんたのその軽さがわたしには耐えられないってのっ。いいこと、スティールに傷一つでもついてみなさいっ。わたし、あんたの顔抉ってやるから覚えておきなさいっ」
「君が私にしてくれることなら、なんだって嬉しく受け取るよ」
「いいから、黙って寝なさいよっ」

「そう、これから銀へ行くのね。スティール、リルフィの三人で。わかったわ、何かあったら連絡して頂戴」
お気に入りのカウチに、何個もクッションを重ね、その上に長々と寝そべって金の君は通信球に映るジルファに言った。色鮮やかな布を幾重にも重ね、一番上には白地に袖口や裾に細かな刺繍を施した、ゆったりとした衣装を身にまとっている。光そのもののような金糸の髪は、結い上げもせず、背中に流していた。
通信球の向こうで、くすんだ金糸の髪の男は気遣うような視線を寄越してきた。
「かなりお疲れのようですな。まだ波は治まりませんか」
「そうね・・・揺れは収まったけれど、例えるなら、今度は地に引きずりこまれるような感じかしら。もがいてももがいても、底なし沼へと落ち込むような。それに抗うのも一苦労よ」
金の君はわずらわしげに髪をかきあげる。一時の混乱は治まったものの・・・今度はじわじわと体を蝕むような、悪い熱にかかったようなものだ。ジルファとリルフィからもたらされた情報によれば、銀の界の気候が狂い始めているとのこと。これでは、一時的な暴走より性質が悪いではないか。
一時も気が抜けない。それと言うのも・・・。金の君は唇を尖らせて、通信球の向こうへと文句を言った。
「あなたが、もう少し気をつけてくれていたら、この事態はなかったんじゃない？何か起こったにせよ、こうまで事態は悪化しなかったかもね」
「それを言われると、返す言葉もありませんね。仰るとおり、私の職務怠慢も原因の一つでしょうが、御方さま・・・どだい、無理があるでしょう。それまで何の覚悟も知識もなかったものに、力を背

負わせ、界ひとつの命運を委ねるというのは、ね」
　いくら、銀の界の崩壊を防ぐためとはいえ、銀の君の血筋が、最早あの少年しか残されていなかったとしても。
「わかっているわ。界がしばらく不安定になるだろうって事は折り込み済みだったわ。あの子はよくやってくれていると、常々わたしにしても、思っていたのよ・・・済まない事をしたとも思っていたわ」
　あの少年の望みは、自分の生まれた界へ戻ることではない。あの少女とともに居ることだった。
　知りながら・・・酷い事を背負わせたわ。それは自覚している。金の君の・・・界の統治者としての冷徹な部分は、あれは適切であったと判断を下した。元は一人の金の君であったジルファにしても、それは同じだろう。
たとえば・・・リルフィには見せない、見せようと思わない融けない氷のような部分を持っていること。大事な相手には見せたくないし、情の部分で悔やみもするけれど。
　だからこそ。
「もう、あの子に何一つ、失わせるわけには行かないわ。・・・お願いね」
　金の君自身は、どんなに助けたいと願っても、どれ程の力があっても、出来ないことだから。その後悔も焦慮も、もどかしさも・・・おそらく全て知っている相手に託す。
ジルファは胸に手を当て、優雅に一礼し答える。
「金の君におかれては・・・どうか愁いなきように。あの子たちの絆を信じましょう。貴女さまこそ、どうかお体にお気をつけ下さい」
　通信が終わり、よく磨かれた通信球には、愁い顔の金の君自身が映っている。
　金の君は、両手で軽く頬を叩いた。
「駄目ね、こんな顔してたら、どんどん辛気くさくなっちゃう。そう、笑うのよ・・・さて」

金の君は、勢いよくカウチから身を起こし、大理石で出来た床を裸足で歩く。
足首に幾重にもつけた、ほそい輪がしゃらりと音をたてた。
「チェスミー！界境の様子はどうかしら？まだゆがみが残っているの？」
彼女に呼びかけながら、金の君は白い手のひらを打ち鳴らす。
「ああ、そうだ、クリードにも伝えなきゃ。銀でちょっとした騒ぎが起こるかもって。スティールが行っているってことも、伝えるべきでしょうねえ」
頭を抱える彼の顔が思い浮かぶようだわ。ごめんなさいねと、彼女はひそりと呟いた。

「・・・レン、少しは休んだら？あんたずっと、ついてるじゃない。体、壊すわよ」
リンは扉の外で佇む兄のレンにそっと声をかける。シャールが此処・・・氷の館の、主の書斎で茨に閉じこもり、はや二月が過ぎようとしていた。
その間事態は悪化の一途を辿っているようにリンは思う。彼ら兄妹が、何度呼びかけても、シャールからは返事が無かった。触れようと伸ばす手は、人の腕ほどもある太い茨に威嚇され、届かない。
それを何度も繰り返すうち・・・茨はますます生い茂り、人の手を拒むようになった。いまや、壊れて閉じなくなった扉の傍に立ち、中を覗き込むくらいしか・・・出来ない。
誰も僕に近づかないで。もう何も聞きたくないし、見たくない。
そして・・・僕は誰かを傷つけたくない。
茨を見るたび・・・リンはそんなシャールの声が聞こえる気がする。
それを感じるたび、リンはとても悲しく、そして寂しくなるのだ。

お願い、どうか一人で閉じこもってしまわないで・・・伸ばした手を傷つけてもいいのに。
　此処にわたしたちが居るのにと。
　双子の兄は、濃い疲労の影を目元に落としながらも、首を縦には振らない。
「まだ大丈夫だ。時々は館の部屋で、休んでいるしな・・・それに、何かあったとき、傍に居ないとな。それより、長老がたは、何か言われていたか」
　リンは首を横に振った。首の後ろで一つに結わえた長い夜色の髪が、波のようにうねる。
「何も。とりあえずは現状を観察し、変化があれば報告するようにと。長老さま方の関心は、シャールにじゃなくて、今やこの気候にあるようよ」

茨の繭にこもってしまった？結構なことじゃないか、銀の君の血筋とはいえ、我らがかつて銀の君や王妃にどれほど迷惑を蒙ったことか！
いっそ、この世の終わりまで眠っていてもらいたいな。界の維持さえ出来るのなら、いっそその方がいいさ。
今は暦が巡ったにも関わらず、一向に暖かくならない事の方が問題なんだ！些細な事を持ち込んでくるな。

　ある長老たちは、いい厄介払いが出来たと、喜んでさえいた。リンが思わず声を上げかけた時、レンとリンをシャールに“貸し出した”長老が、手にした杖で、床をとん、とついた。さして大きくない音だったにも関わらず、欠席裁判の呈をなし始めた場が、一瞬にして静まり返る。
「静まれ、お前さんがた。あの少年の血筋が過去に何をしたにせよ、それを全てあの子に負わせるのは酷じゃないかね。長老としての発言にしては、いささか品を欠くものじゃろう。そうは思わんか？」

問われた長老はバツがわるそうに目を逸らす。他の長老も、視線を避けるようにある者は目を伏せ、ある者は目を逸らした。座の一番高い場所に座る・・・小柄な白い髭の長老・・・最長老の、物柔らかな中に隠された、鋭い視線に晒されるのを怯えるように。

さて、状況は変わらぬか、と最長老はリンに問いかけた。

「はい。それどころか、ますます彼を取り囲む茨は増えています。このままでは、茨はいずれ、氷の館全てを飲み込んでしまうでしょう」

「・・・毒の水の再来、かのう？いやはや、なんとか手を打たねばのう」

髭を捻りながらの最長老の言葉に、飛び上がったのは一人や二人ではない。拡がる毒の水の恐怖は、彼らにとっても、いまだ遠いものではなかった。いつ自分たちの住む土地が水に浸かり、命からがら逃げ出すようになるかと、眠るたびに恐れていたのだ。

それが・・・今度は緑の茨になって、襲い来るというのだろうかと。

再びざわめきだした座を、最長老の一喝が静めた。

「静まれい。浮き足立つでないわ。まったく、落ち着かないことよの。リンよ、長老会といっても、こんな有様だ。お前とレンには負担をかけるが、しばらくは二人で様子を見ていてくれんかの。何か起これば、すぐさま知らせてくれ」

リンは、わかりましたと深々と頭を下げ・・・表情を隠す。最長老さまにしても、リンやレンに、何も約束出来ない、それが今のシャールの立場だった。それを思うととても遣り切れない。

「わしらは、住民の不安を取り除く事に専念する。なあに、もし不作などになっても、住民の間で暴動など起こさせないさ。だから・・・」

最長老は豊かな髭を震わせ、飄々と笑った。

「少しくらい寝坊したって構わんから、また顔をだすようにと、あの坊主に伝えてくれんか」

## 7

兄のレンに、長老会での出来事を話すと、レンは言った。
「・・・まあ、長老さま方は、そう考えるだろうな」
確かに、この気温は異常だとレンは頷く。このまま低温が続けば、折角蒔いた種も芽を出さず、出したとしても豊かな実りは望めないだろう。気候への不安・・・そして、不作への不安は、暴動への引き金になりかねない。
「でもね、最長老さまは、もしかしたら、この気候の狂いは、シャールが眠ったことにより、起きた事だと思われているのかしら？」
「そうかもしれない・・・私も実は、そうではないかと思っていた。気候が狂いだした時期と、彼が眠った時期が同じだ。長く銀の君や王妃の所業、力を見てきた最長老さまは、君の力についてもお詳しいだろうからな」
そうねとリンは呟き、茨の繭を見つめる。拍動する茨の繭に守られ、眠り続ける彼。
あたしたちには、何も出来ないのかしら・・・と。

そこには変わらぬかの人の・・・微笑む姿があった。描かれたものの上でも、そして記憶の中でも、微笑む以外のかの人を、思い出せない。その微笑のとおりの、穏やかで幸せな人生を送るはずだった、彼女。
自分自身の手で彼女を幸せに出来ない事はわかっていたから、せめて近いところで彼女の微笑を、幸せな暮らしを見守ってゆければいいと思っていた。
それなのに。
「人の人生はわからぬものだ・・・」

今は氷の館と呼ばれる館の主は、そっと画布に伸ばしかけた指先は、触れる寸前でとどまり、躊躇する。指を握りこみ、触れるのを拒んだ。

触れるのを恐れたのだ。

そこへ。扉を外から叩く音が聞こえ、続いて家令の声が聞こえた。

「御館さま。客人がお見えですが・・・いかが、なさいますか」

「ほう・・・それはまた、珍しいな。どんな客だ？」

「年若いお嬢様と、金の髪の青年、それと、金の鳥を連れておられます」

「面白い組み合わせだな・・・いいだろう、会ってみよう」

鈍い銀の髪をかきあげ、面白そうだと主は呟く。多少でも気晴らしになればいいと、主は思ったのだった。

高くそびえる壁や門を見、暗い廊下を長いこと歩かされ、スティールは少し古びた館が持つ雰囲気に呑まれているように見えた。

シャールと銀で会うにしても、たいていが草原か、もしくは賑やかな城下町だったから、時間の重みやそこで暮らした人の思いが圧し掛かるような、独特の雰囲気を醸し出す古い館は気後れするのだろう。

ましてこの館は、人を拒絶する雰囲気を隠しもしない。狭間の界から銀の界へと、朝早くにスティール、ジルファ、そしてリルフィの三人は界を渡ってきた。

緊急事態だからねとジルファは言い、館に程近い場所へ界渡りをする。いつもならば、界へ与える影響を考慮して、あらかじめ築いてある結節点を利用するのだが、今はその時間がなかった。

こちらへどうぞ、主が会うと申しております。

ぴっちりと閉じられた門の前で、何度か呼ばわると、館の家令であろうか痩せた老年の男が現れた。ジルファが用向きを告げると、男は一旦門の内側へと戻り、しばらくして戻ってきて、言った。

男は、陰気な声で門を開け、彼女らを中に通した。閉じる門の音が、軋みながら重い音をたて、まるで、外界と館とが切り離されたようにも感じられた。
スティールは硬い顔で、長い廊下を歩いている。肩に金の鳥のリルフィを乗せて。
リルフィは彼女を安心させるように、小さな頭を彼女の頬に摺り寄せた。僅かに少女が微笑んだのも束の間、前を歩いていた家令が扉の前で立ち止まる。姿勢を正し、控えめに扉を叩く。
「御館さま、客人をお連れいたしました」
「入れ」
内側から、低い男の声がして、家令が恭しく扉を開く。さあ、元凶とのご対面だわとリルフィは喉の奥を鳴らした。
通された部屋は、質素ながら使い込まれ、磨きこまれた調度品が品よく配置された、居心地のよさそうな居間だった。ビロードばりのソファも、金糸銀糸で刺繍が施されたソファも、精緻ながらくどくはない文様が散らされている。丸いテーブルの上には白地に青で彩色された、首の細い花瓶が置かれていた。ただ、そこに花は飾られてはいなかった。絨毯は過ぎ行く時間を映し、いささか褪せていたものの、織り込まれた文様の美しさは窺える。
扉の正面には大きな出窓か取られており、館の周りを取り囲む木々に遮られなければ、日がよく差し込むだろうと思われた。また壁面には暖炉と飴色の飾り棚が置かれ、暖かな雰囲気を強めている。
飾り棚にはオルゴールや器、雑貨があるように見えた。
「わたしの書斎が、よんどころない事情で使えなくてな、こんな狭い部屋で済まないが」
どうぞ、好きにかけるがいい。椅子をすすめながら、鈍い銀の髪と青灰色の瞳を持つ主は言った。館の主、と言う肩書きから想像していたよりも、だいぶ若いわねとリルフィは思った。三十代前半くらいかしら。
何度かシャールの居る所へ様子見には行ったのだが、主の姿はつい

ぞ見かけなかったからだ。これが初対面になる。主は膝まで届く、黒の上着の裾を払いながら、窓を背にした椅子に足を組んで座る。肩につくほどの、緩く巻いた鈍い銀の髪、青灰色の目、暗い衣装と、そして何よりも笑わない目が相まって、酷く冷たい印象を与える人物だった。

リルフィは内心首を捻る。この居間は、そんな彼が使うとは思えない、柔らかな雰囲気の場所なのだ。

ごく親しい者だけを招く、こぢんまりとした、その分濃やかな気遣いで満ちた優しい場所。

配された調度品や装飾から、それを読み取ることが出来る。おそらく、彼の趣味では無い場所。

此処は本来、一体誰が使っていたのかしらね？

「突然の訪問をお許しいただき、ありがとうございます」

如才ない笑みを浮かべ、主に挨拶するのは、ジルファ。シャールが眠っているのが人の館だしね、交渉するのに、流石に鳥の姿じゃカッコがつかないしと、この界へ渡ると同時に、元の姿へ戻ったジルファだ。

リルは、もとの姿に戻らないの？スティールが尋ねたが、リルフィは戻らないわよと答えた。

あの男と元の姿で並び立つなんてごめんよ。つれないねとジルファは笑っていたが。

主は物憂げに頬杖をつき、硬い表情で椅子に腰掛けるスティールと、その肩に乗る金の鳥、そして金糸の髪を背に流し、にっこりと微笑む男を見上げている。

さあ、何だか鬱屈したものを溜め込んでそうな、館の主に、どう切り出すのかしらね。お手並み拝見と、リルフィは少女の肩で高みの見物を決め込む事にした。

「前置きは要らん。訪問の目的は何だ？私が言うのも何だが、わが館は閉鎖的でな。滅多に客人などない。それが一度に二人で、珍しい鳥まで連れているとなるとな。どうも胡散臭くて仕方ないな」

あら、先制攻撃されちゃったじゃない。まあ、無駄に美形の青年に（美形ってのはわたしの主観じゃないわよ、もちろん一般論！なんだか悔しいけど）、少女に、金の鳥。この取り合わせ事態で、通常の訪問じゃないって感づかれるか。

ジルファは主の言葉に動揺したふうもなく、ますます微笑みを深くした。

「私達を不審にお思いで？まあそれも無理はない。常ならば・・・館の主を尋ねるような、取り合わせではないでしょうからね。常なら、ば」

ジルファの碧の瞳が、主からすっと外される。ある一点を注視するに当たって・・・リルフィは気付いた。

あれは、主の書斎がある方向だと。

同じく主も気がついたのだろう。唇に酷薄な笑みをたたえ、両手を組みテーブルの上に肘をついて、体をのりだすようにして、ジルファに尋ねた。

「常ならば、と言うか。それならば、今は常で無い・・・非常時だとでも？」

「あなたが、非常時のままで構わないと言っても、私達は力ずくでそれを打ち破りますよ。そして“彼”を起こして、連れ帰る」

にこやかなまま、宣戦布告ともとれる台詞を吐くジルファに、リルフィはいっそ頭を抱えたくなった。

なにが、交渉は私に任せろよっ。まるで直球勝負じゃないのよっ。スティールは主とジルファの遣り取りを、はらはらして見守っている。

ジルファの碧の瞳と、主の青灰色の瞳が交錯する。にらみ合ったのは長くない時間だったが、先に視線を外したのは主の方だった。

「何処で“彼”の事を知った？」

「この目で状況を見ましたので」

「“彼”とはどういう関係だ？どういう思惑があって、“彼”を起こそうとするのだ？」

「私にとっては、言うなれば“知人”。でもこの子にとっては“彼”はとても大事な存在です。それは“彼”にとっても同じ事。会えなくなるのは辛いと思うのは、当然でしょう」
主は目を眇めてスティールを見た。頭の上から足先までを、品定めでもするかのように。その視線にスティールが居心地悪そうに身じろぎした。
「何処にでも居るような、普通の娘に見えるがな。取り立てて美しいわけでもなく、際立ったものも感じない、つまらない娘だ。そういう娘に、“彼”は執着すると言うのか？信じられんな」
何ですって～？ジルファの目配せがなかったら、リルフィは怒り心頭で叫んでいただろう。
スティールを目の前にして、酷い侮蔑の言葉を吐いた主は、あまりの言葉に凍りつく少女に冷たい目を向けるばかりだ。
「人の内面は見た目だけではわからない。まして、あなたは彼女についてよく知る時間もないでしょう？今判断を下すのは早すぎると思いませんか？きっと、あとで後悔しますよ」
ジルファは苦笑いを浮かべて答える。ええ、あとで泣いて平伏して謝っても許さないわよっ。覚悟してなさい。
爛々と目を光らせてリルフィは報復を胸に誓う。心無い言葉でスティールを傷つけた報いは、きっちり受けてもらうわ。ああ、スティール、こんな莫迦な男の言葉は忘れるのよ。青褪めた少女を勇気付けるように、リルフィは何度も頭をこすり付けた。
そして主はふんと鼻を鳴らし、優雅に椅子から立ち上がった。
「館を破壊されるのは困るな。これでも愛着があるゆえ。よかろう、ついて来るがいい、“彼”の元へと案内しよう」
さあ、何をするつもりか知らんが、面白くなりそうだ。背中を向け、そう嘯いた主に、リルフィがしゃあっと羽を広げ、威嚇したのは言うまでも無い・・・。

## 8

こんな気持ちで銀の界へ来たのは・・・あの時以来、二度目だ。王妃の手からあたしを守るために、銀の界へと戻ったシャールを追って、初めて界を渡ったあの時以来。

こんな、重くて不安な気持ちを抱えて、この界へ来る事になるなんて。

スティールは拳を握り、湧き上がる不安を押しつぶそうとする。リルフィがしきりに頭をこすり付けて、自分の気持ちを軽くしてくれるのを、とても嬉しく思った。そばに温もりがある事で、とても安心できるから。

あの時も不安でたまらなかった。そしてそれ以上に、悲しかった。シャールと二度と会えないと思うと、涙が溢れてとまらなかった。彼が何処の誰でも構わないとすら思った。彼から告白された内容は、衝撃的だったけれど、それすら悲しみの前では霞んでしまった。

あの時は、彼にさよならを言うために界を渡った。そして・・・今日は。

長くて暗い廊下を館の主は歩いていく。彼女たちは主の後について歩いていた。さっき主からぶつけられた言葉は、スティールの心をざっくりと薙いだ。彼女が密かに疑問に思っていた事だったからだ。

何故、シャールはあたしを、好きでいてくれるの？

そして何故、“彼”はあたしを好きになってくれたの？

ある時、思い余って彼らに聞いたことがあるけど、シャールはとても困った様子で目を伏せ、“彼”は、うまく言えないな、一言で話せるような・・・ううん、言葉でレッテル貼れるようなものじゃあないんだよと答えられた。いまだ明確な答えは貰えず、少女の中

で火種のように燻っていた・・・それを。
主は狙い済ましたかのように、突いてきた。
あたしが平凡でこれと言った特技もない人間だって、言われなくてもあたしが一番よく知っている。
特に美人じゃないってことも。それはわかってるわ。あたしが一番気にしてるのに。遣り取りを思い返して、今頃腹が立ってきたスティールだった。リルフィあたりが知れば、あんたってほんと・・・と呆れた顔でため息を零してくれたに違いない。
主への怒りのせいで、一時不安も吹き飛んだスティールだったが。
かつん、と前をゆく主の足が止まる。目を上げたスティールの視界に、大きく開いたままの重厚な扉が映る。
扉のそばで佇んでいる人影が、近寄る彼らに気がついて振り向いた。夜色の髪、夜色の瞳を持ち、よく似た顔だちの男女。すらりとした体に、黒い上着と黒いズボンを身につけている。
彼らは自分たちを見て、警戒するような視線を向けてきた。
ああ、彼らが、シャールが言っていた双子なんだと、スティールはすぐにわかった。いずれシャールに紹介してもらうつもりでいたのに、こんな形で会うことになるなんて。
「ご当主。こちらの方々は、一体？」
青年・・・ローレンスよりもいくらか年上だろうか・・・が、低い声で主に問う。
「そこで眠る“彼”に縁ある者との申し出だ。お前たちが知る顔か？」
「いいえ、初めて見る顔ですが・・・“彼”の事でやって来たと？」
「そうだ。なんでも、起こしにきたと言ったのだからな。私はこやつ等が何者でも構わんがな、精精高みの見物をさせてもらうさ」
さあ、お手並み拝見と行こうか。その主を射殺さんばかりの視線で主を睨むのは、女性・・・乱れた長い夜色の髪が、凄絶な印象を与える。
シャールが眠りについた原因は・・・主の暴言があると聞いた。

彼の亡くなった母を酷い言葉で貶めたのだと。スティール自身も、先程心無い言葉に傷ついたばかりだ。何故、と思う。何故主は言葉の刃で人を傷つけるのだろう。何がそうさせるのだろう。翻る刃が、己を傷つけることだってあるのにと思う。

「そんな・・・“彼”の事は長老様にしか知らせていません。他の誰も知りようがないはずなのに」

スティールたちを見回して困惑したふうに呟く男性に、ジルファは苦笑交じりに話しかけた。

「それでも、私は知ってるんだよ、レン。この姿では初めましてだね・・・私はジルファだよ」

私にもよんどころない事情があってねと片目をつぶったジルファに、レンと呼ばれた青年は目を剥いた。

「ジルファは・・・あの青い鳥では？」

「そう。あれは私の仮の姿なんだ。事情があって、“彼”の・・・シャールの傍にいたんだけどね。驚いたよ、ちょっと眼を離した隙に、こんなことになっていたんだからね。それで彼を起こすべく、彼の大事な人を連れてきたってわけさ。どう？君たちはこんな事、信じるかい？」

「普通だったら信じられないと言う所でしょうが・・・」

ジルファとはシャールが時折話しかけていた鳥の名前で、人語を解するのだろうと言うこともわかっていた。シャールの生い立ちや、銀の君や王妃が滅する前に起きた出来事も、いくらか自分たちは聞き及んでいた。

そして、その青い鳥ならば、茨の繭の周りを飛んでいる姿を見かけた。

レンは妹と顔を見合わせたあと、そう言った。

「その子の名前を教えてよ。あたしたちが知っている名前の通りなら、信じてもいいわ」

「お安い御用だよ、リン。この子はスティール。遠く狭間の界からやって来たんだよ・・・信じてくれるかい？」

リンは目を細めて、ジルファとスティールを見た。
「そういう事なら・・・信じざるをえないわね。シャールが大事に思っていた子の名前や、その子が何処に住んでいるかなんて、他の者には調べようがないもの。で？あなたたちは、彼の一大事に界を渡ってやって来た訳ね？」
「そういう事だね。話が早くて助かるよ」
「そういう事なら、ね。あたし、あなたに言いたいことがあるのよ」
リンはまっすぐにスティールを見て言った。敵意すら籠もった鋭い視線に、スティールはただ戸惑うばかりだ。この女性とは初対面で、スティールは何をしたわけでは、ないのに。
「この事態を引き起こした原因は、あなたにもあるんじゃない？」
「・・・え、それは一体、どういう事ですか」
「彼はずっと不安定だったわ。強く望みながらも、叶わない事があったから。それは、自分の望みよりも、相手の望みを優先させた結果だったけれど・・・あなたは、彼の望みが何だったか、知ってるはずよね」
スティールは頷いた。知っていた・・・もうずっと前に。彼に告げられた時から考えていたけれど、はっきり答えを言えないまま、ここまで来てしまった。もしかして、その事も。
「彼は悩んでいたわ。自分の望みがあなたの望みじゃなかったから・・・それ以上どうする事も出来ない。かと言って、一旦芽生えた気持ちを殺すことも出来ない。とても、不安定になっていたわ」
傍で見ていて、こちらが辛くなるくらいに。リンの言葉に、スティールは項垂れた。
「あたし、そんなにシャールのこと、傷つけていたのかなあ・・・」
もしかして、毎週会うのを止めようと言った裏には、そんな思いが隠されていたのかもしれない。
スティールが気付かなかっただけで。リンの言葉が胸に痛かった。ふいに、スティールの耳元で、リルフィが大声をあげた。
「ちょっと、黙って聞いてりゃ、よく知りもしないくせに、勝手な

こと言わないでちょうだい！」
「ちょ、ちょっとリル、ね、落ち着いて、ね」
突然怒り出したリルフィに、スティールが慌てる。リルフィはあくまでただの鳥として振舞う予定だった。
魔法が一部の人間に占められていた銀の界では、忌避されかねないと思っていたからだったが。リルフィは当初の予定を綺麗さっぱり蹴り飛ばして、金の羽を大きく広げて、リンに据わった目を向ける。
「人の心の事なんて、まして、相手が要る事なんて、当事者同士にしかわからないものじゃない。傍で見ていて辛い？それはあくまであんたの感想でしょ？シャールのじゃ、ないわ。辛くても不安定でも、そういう道を選んだのは彼だもの」
他人が嘴を入れる事じゃないわ。違う？
いきなり人語を話し出した金の鳥に、一瞬目を丸くしたものの、リンはすぐさま立ち直った。
「そうかしら？傍から見ているからこそ、分かることもあるんじゃない？あたしにはその子が、彼の思いに胡坐をかいているようにしか思えないわ」
「言うに事欠いて、何ですって～？」
そのまま女二人の舌戦に突入するかと思われたのだが。こほん、と控えめな咳払いが聞こえ、そちらの方向を見て・・・彼女らは同時に顔を引きつらせた。
ああ、鳥でも顔が引きつるのねと、スティールは一瞬、場違いなことを考えてしまった。それほど、怖かったのだ。笑っているのに、目だけが笑っていない、ジルファの視線が。
「各自言い分もあるだろうけどね、分かっていると思うけど、今は非常事態だからね。取り合えず棚上げして後回しにしてくれないか。今はこの状況を打開することが先だよ」
皆、状況見えてるよね、何のために此処に居るのかな？あくまでにこやかな様子が尚更恐怖を誘う。ジルファさんて、怒らせるとと

っても怖いんだ・・・気をつけようとスティールは思った。
あのリルフィですら、悪かったわと謝罪しているではないか。
双子の兄妹も、ジルファから立ち上る何やら不穏な気配を感じてか、口を噤んでいる。館の主は言葉どおり高みの見物を決め込んでいるのか、鳥のリルフィがしゃべっても、また話の内容についても何も言わない。他人事のように、ほう、と声をあげるばかりだ。
それもかえって不気味なんだけど・・・。
スティールがこっそり考えていると、そうですね、ここで私達が争っていても彼のためにはなりませんねとレンが言い、こちらへ、と彼女たちを促した。
あれを見てください。そうして彼が示した先を見て・・・スティールは言葉を失う。
広いはずの・・・館の主の、書斎。そこに、空間を埋め尽くす異常なほど太い茨の茎が生えている。階上の部屋の床を突き破り、更に天井まで伸びている、茨。茎にびっしりと棘を生やし、茎の太さに対し葉は異常に小さい。床の上を這い回りうねる様子は、一面緑の海のようだった。
そして、茨の向こうに・・・大きな卵状の物体があった。茨で形作られた、その中に。
「・・・あの茨の繭の中に、シャールが居るの？」
予想以上の光景に、声が掠れていた。
「そうです。わたしたちが何度声を嗄らして呼んでも、彼の元に届くことはありませんでした」
この二月の間、彼から返事は返りませんでした。私達はただ、見ているしか出来なかった。
「それなのに。あんたの声なら、届くっていうの？そんな事が出来るの？」
何の力もない、普通の人間にとリンの目が言っていた。スティールはその時気がついた。疲労の濃い顔に、悲しげな表情を浮かべているレンと、挑むような視線で見返すリン。

ああ、この人たち、シャールのことをとても心配してくれているんだ。声を嗄らすほどシャールを呼び続けてくれた。何も出来なかったのを、とても悔しく思っているんだ、と。
　スティールは少しだけ未来の事を想像した。もし・・・シャールが、いつか自分じゃなく、他の人をもっとも大切だと思うようになったとしたら。その時は少し切ないかもしれない。シャールが何処か遠いところへ行くような気がして。でも、それ以上に、シャールのことを他の誰かが大事に思ってくれることを嬉しく思うはずだ。
　今、こんな時なのに、嬉しさがこみあげてくるみたいに。
　出来るかと言われれば、わからない。でも、出来ないとは言いたくない。ねえ、シャール、ここに、あなたを待っている人たちが居るんだよ。
スティールはお腹に力を入れて、レンとリンに笑いかけた。
「出来るかどうかなんて、わからないよ。でも、あたしの声が届く可能性があるなら、あたしはそれに賭ける。たとえ、それがどんなに少ない可能性でも・・・諦めるわけにはいかないの。リル、あたし、行くよ」
　気をつけてねと声を残し、リルフィが肩から飛び立つ。そしてとても不本意だけどと前置きをして、ジルファの肩に止まった。
　双子の兄妹、リルフィとジルファ、そして館の主が見守る中、スティールは茨がうねる室内に、足を踏み入れたのだ。

## 9

途端にざわめきだす茨の海。鎌首をもたげた蛇のように、警戒し鋭い棘で威嚇する。スティールは障害のない草原を歩くような足取りで、さらに奥へと入る。

「シャール、あたし、来たよ。あたしの声、聞こえる？」

茨がずるりと伸び、少女の足を薙ぎ払おうとする。すんでのところで飛びのくが、手のひらに走った痛みに顔をしかめた。別の茨が攻撃してきたのだ。

「スティール！」

リルフィは思わず叫び、飛び立とうとしたが、もう・・・何処を飛んでも部屋の中には入れない程、茨が立ちふさがっていた。

「ねえ、シャールそこで眠っているの？いつか本で読んだ、茨姫みたいだね。王子様がキスするまで、目を覚まさなかった、お寝坊さんなお姫さま。ねえ・・・シャール、あなたは茨姫みたいに百年眠りたいの？」

風を着る音が耳元で聞こえ、次の瞬間焼けるような痛みが右頬に走る。続いて、左頬にも、手の甲、腕や膝にまで。伸びては巻きつき・・・戻る茨によって、スティールは痛めつけられていた。

茨の棘に傷つけられ、たちまち皮膚が裂けて血が珠のように溢れ出す。衣服で覆われた場所も、じわじわと赤い色を滲ませていた。

「スティール！」

リルフィが悲鳴を上げた。それでもスティールはこの場から逃げようとは少しも思わなかった。ただ、シャールの元へ行くことだけを考えていた。

「ねえ。百年眠ったら、きっと起きた時びっくりするくらい、周りが変わっているだろうね。でもね。百年もシャールが眠ったら、あたしもうシャールに会えないじゃない、そんなのは嫌よ」

ざあっと招きよせるように、引き込むように、茨がうねりながら伸びてくる。それを避けようとせず、両腕を高く差し伸べて、スティールは言った。

「ねえ、シャール・・・あたしは此処に居るよ」

喉元や手首、腕や足に、身動きとれないほど巻きついた茨。呼吸が苦しくなったけれど、スティールは微笑みすら浮かべて、緑の繭に向かって話しかけた。

「あなたは何処に居るの？」

来ないで

「シャール？あたしの声が聞こえる？」

来ないで

「・・・泣いているの？」

来ないで、君を傷つけてしまうから

「いいよ、傷なんてついても構わない。それよりも・・・泣きたいなら、気が済むまで泣いて？傍にいるから、どうか一人で泣かないで」

そばにいてくれる？

「うん、居るよ」

ずっと？

「・・・うん、居るよ」

嘘だ。

悲鳴のような叫びのあと、スティールの体に巻きついた茨が、さらに強く少女を締め付ける。息すらも出来ず、その苦しさに呻いた。茨が不穏に蠢き、荒れ狂い、波立つ海のような様子になる。苦しさに涙目になりながら、スティールは茨の繭に向かって手を伸ばし続けた。

「シャール、嘘じゃないよ。あたしはあなたが大切だから」

ずっとなんて嘘。君には、僕より大事な人が居るんでしょう？君は僕を選ばないんだ・・・でも

そばに、いてくれるのなら

シャールの悲痛な叫びと、それから、ぽつりと落とされた暗い声。それらを、遠くなる意識の隅で、スティールは感じていた・・・。

「スティール？いやあっ」

茨が幾重にも少女に巻きつき、締め上げる。それをなす術もなく見守っていたリルフィであるが。

ぐったりと腕を投げ出した少女を見るに及んで、悲鳴を上げた。次の瞬間にはジルファが制止するのも振り切り、部屋の中へと飛び込んだ。不思議なことに、荒れ狂う波のようだった茨は、襲いかかっては来ず、従順な葦のように揺れていた。

「スティール？」

リルフィの、どこか心もとない声が、緑の向こうから聞こえた。ジルファは迷わず室内に足を踏み入れる。レンとリンもその後に続いた。

丈高い茨をかき分け、緑の繭のすぐ近くまでたどり着いたとき、

彼らが見たものは。
茨に付着した鮮血の跡と、心細げに肩を震わせる、金色の鳥だったのだ。
「スティールが居ないの。もしかして・・・」
「ああ・・・君の想像通りだよ」
ジルファも厳しい顔で茨の繭を見上げる。話が見えないリンが苛立ったように尋ねた。
「なに？一体何が起きたというの？」
ジルファは繭を指し・・・些か浮かない顔で答えた。
「どうやら、スティールはあの中に取り込まれたようだ」と。

クリードは疲労の濃い顔で、モニターを見つめていた。狭間の界、銀の界、金の界・・・そして本国が属する界が、家庭用のパソコンモニターに映っている。彼は基本的に、自宅には“仕事”を持ち込まないが、今は非常事態ゆえ、仕事から帰った後も、こうしてもう一つの・・・言うなら、彼の“本職”を行っていた。
画面を切り替えると、界の異常値を図る数値が示される。三界の境のポイントと、銀の界のポイントが現れ、それらは平生よりも高い数値で推移していた。暴風のように吹き荒れた力の波は落ち着いたものの、今度は波の余波がじくじくと界を、界境を苛んでいるようだ。
「まったく、何があったんだか・・・」
クリードは眼鏡を外し、目元を押さえる。同じ次元管理官であり、傍迷惑な従兄弟から連絡を受けて以来、時間を見つけてはモニターを見ていたのだが。
異常値は高止まりしたまま、時折不気味に波打っている。
銀の界で王妃が残虐な振る舞いを行っている時でさえ、この状態が長く続いたことはかつてなかった。

このまま高い圧力が続けば、狭間の界や金の界、果ては本国にまで影響が及ぶだろう。
影響を回避すべく境を強化し、中和を図ってはいるものの、それがいつまで効果があるだろうか。
「それに加えて・・・まったく、何故ウチの娘は、厄介ごとに巻き込まれるんだか・・・」
クリードの疲労を増す原因。それは金の君から受けた通信の内容だった。
『忙しい時にごめんなさいね。あのね、もう少ししたら銀で何か変化があると思うわ。それに対応する手はず、整えておいてね』
『それは・・・もしや貴女が、何か手を打ったのですか？』
『わたしが手出し出来ないって事、わかっているじゃない。あのね、落ち着いて聞いて頂戴。スティールがシャールの所に行ったの』
『・・・は、何ですと？』
『リルフィも、スティールにはとうとう、隠しておけなかったようよ。そして行くことを決めたのはあの子』
『あの子は・・・何故、危険を省みず行くんでしょう。貴女も止めて下さればよかったのに』
搾り出すように呟いたクリードに、金の君は微笑んで、ただ、ごめんなさいねと言った。

クリードには、金の君が謝罪した理由がわかる。わかりたくもないが、と胸の内で呟きながら。
統治者の判断、という奴だろう・・・情を廃し、ただ効果的で効率的な方法を求める。少ない力で、最大限の効果を得ようとする。冷たい無機質な・・・剥き出しのエゴよりも醜くさえ写るモノ。
それを、どうしても受け入れられなかったからこそ、クリードは家を出、本国を離れたのだった。
大きくため息をついたとき、携帯電話が鳴った。着信音で従兄弟だとわかり、条件反射で顔を顰めたものの、すぐに出た。

「あっミクちゃん、お仕事お疲れ様」
「・・・お前は疲れている様子もないな」
「僕はいっつも元気だもん！でも心配してくれたの？嬉しいなっ」
「・・・用件無いんなら切るぞ」
「無かったら電話しちゃ駄目なの？」
「切ってやるっ」
「あ～待ってミクちゃん。ほんとにもう気が短いんだから。あのね、銀でますます変な波出てない？なんか力を一点に集めているみたいな、変な感じ」
「なんだと・・・？」
モニターを見てクリードは呻く。いつの間に、と思った。見る間に力は一点に集中し・・・そして肥大化したまま、不気味に点滅している。
その拍動すら聞こえる気がして、クリードは背筋に冷たいものが走るのを感じた。これか、と思い当たる。
銀で、何か起こると思うわ。
「・・・少し前に、金の君から知らせがあった。銀で何か起こるだろうと」
「金の君は、この事態を予想してたってわけ？」
「スティールがな・・・銀へと行っているらしい。俺もさっき知らされて驚いた」
「ああ・・・じゃあ、多分スティールは、シャールと会えたんだろうね」
「そうだろう・・・事態はまだ、どう転ぶかわからないな」
明滅する光。手出しできぬ世界。そう、どんな力があっても、定められた理を踏み越えられない・・・縛られた身では、焦りに身を焦がして待つしか出来ない。
それは、金の君でも同じ事。わかっているけれど・・・。
「大丈夫だよ、ミクちゃん」
電話の向こうで、落ち着いた声がする。いつもの軽い調子はなり

を潜め、ゆっくり舞い降りる雪の花のような。
「大丈夫だよ、スティールは無事に帰ってくるよ。だってミクちゃんの子だもんね、どんな障害が立ちふさがっても、全部蹴り飛ばして戻ってくるよ」
言い方に引っかかりはあるものの、従兄弟が自分を元気付けようとしてくれるのはわかったから。
クリードも、ほっとため息をついて、焦る心を宥めたのだ。
「ああ・・・戻ってくるに決まってるさ」

# 10

「・・・あんた、此処にいたの」
後ろからリンが来ているのはわかっていたけど、リルフィは振り向かなかった。声を掛けられても、じっと緑の繭を見上げていた。頑なな様子にリンがため息を零す。
「少しは休んだら？此処はあたしが替わるわよ」
リルフィは・・・金の鳥は壊れた扉に止まり、部屋の中を見つめている。茨で埋め尽くされた中には、拘束される恐れがあるため、少し離れた場所で見守り続けていた。
茨の繭に取り込まれた少女を。何も出来なかったことがとても悔しくて、体を休めるどころじゃなかった。
「いい。眠れる気分じゃないし、それに・・・」
リンも不安そうに、待ち焦がれるように繭を見つめている。シャールをとても心配している様子が伝わってきて、リルフィはそっとため息を零す。
スティールに対する言葉には、心に蟠りがあるけれど・・・今は言い争う気になれないわ。
「スティールが戻ってきた時、すぐ手助けできるように、傍に居たいのよ」
そう、とリンは頷いた。
スティールを取り込んだ後、茨は不気味なほど大人しくなった。太い茎は呼吸するように明滅し、その光は繭へと集まってゆく。棘で覆われた茨の茎には、茎の太さに見合う、人の顔ほどもある大きな葉が茂り始めた。
嵐の前の静けさだね。ジルファは相変わらずの飄々とした顔でそれを評す。
その観察でもするような言葉に、リルフィは腹を立てたのだけど。

それ以上に。
茨姫は、一体何がしたいんだろうな。
主の無神経な言葉に、思わず抉ってやろうと飛び掛ろうとし、すんでの所でジルファに止められた。
それで、ますますジルファに怒りが向く結果になった。
あんたこそ、一体何考えてるのとリルフィは言いたい。人を侮辱し見下す視線の裏で、何を考えているのと。
「シャール・・・あんたは、何をしたいのかしら」
リルフィの呟きに、返る言葉は無かった。

真っ暗だわ。自分の手も見えない。
スティールは恐る恐る歩いていた。何かないか手で探っても、伸ばした手は空を掴まえるばかり。
踏み出した先に、深い谷が待ち受けているかもしれない。暗闇は恐怖を増幅させる。それでも・・・爪先で地面を探りながら、一歩一歩進んでいた。彼の名前を呼びながら。
「シャール、何処に居るの？」
あの時・・・茨が幾重も体に巻きついて、息が出来なくなった。そうして目の前が暗くなり、気がついたら真っ暗な空間に放り出されていた。此処は何処だろうと何も見えない恐怖で息苦しくなったけれど、遠くから微かに音が聞こえてきて・・・思い当たった。
一定のリズムで刻まれる音。聞いていると安心する、生まれる前から聞いている音。
鼓動だわ・・・茨も、息をするみたいに光が点滅して、拍動していた。
ここはきっと、シャールが作った繭の中なんだと。
スティールが目にした繭は、もちろんこんなに大きいはずはないけれど、それでもそれは確信だった。
「シャール、何処にいるの？」

方向すらわからず、スティールは何度もシャールの名前を呼びながら歩き続ける。一体どれくらいの時間が経ったのだろうか。
ゆらり、と目の前の空間が揺れた。ぼうっと淡い光を纏いつかせ、現れたのは。
「・・・シャール？わ、犬の姿のシャールだっ」
銀の毛並みが美しい、すらりとした姿の犬がそこに居た。それはまぎれもなく、長い時間共に過ごした、家族としてのシャールの姿だったので。
スティールはシャールに駆け寄り、両腕で頭に抱きつき、柔らかな毛並みに顔を埋めた。
「シャール、何処に居たの？あたし探していたんだよ・・・でもよかった、会えて」
くうんとシャールは鼻を鳴らした。
「茨の繭に閉じこもったって聞いて・・・驚いたんだよ。ねえ、此処から出よう？皆とても心配して、待っているよ」
シャールは答えない。
「シャール？なんで答えてくれないの？」
スティールは銀の毛並みから顔をあげ、シャールの顔を正面から見た。綺麗な目は真っ直ぐに少女を映して・・・悲しそうに揺れている。もしかして、とスティールは思った。
「もしかして・・・シャール、喋れないの？」
くうん、とシャールは是、と鳴いた。
「どうして？元の姿に、戻れないの？」
くうんとシャールは鳴き・・・そして、いきなり歯を剥き出して唸り声をあげ、激しい威嚇を始めた。
スティールが今まで見たこともないくらい、激しいものだった。
「シャール、一体どうしたの？何があるの？」
その答えはすぐにわかった。シャールの視線の先がぐにゃりと歪み、そこから現れたもの。
淡い光を体に纏わりつかせ、薄く微笑みすら浮かべた彼がいたか

ら。スティールは口元を手で押さえ、目を見張る。あたしの傍にシャールが居るのに、何故、目の前にも。
「スティール、僕を呼んだ？」
シャールが居るのだろう。優しい微笑を浮かべて、両手を伸ばし、彼は近づいてくる。暗闇も障害にならないのか、足取りに迷いはなかった。銀の髪の毛が肩につくほど伸び、表情も幼さが抜け、大人びた印象を与える。
スティールと会わない間に、急速に彼が大人びたように見えて、スティールは少し寂しかった。
「シャール、だよね・・・・」
「何故そんなことを聞くの？僕はシャールだよ。まさか、もう僕の顔忘れちゃったの？」
「ううん、そんなはず、ないじゃない。何だかちょっとオトナになったみたいな感じがしたの」
会話する間にも、犬のシャールの唸り声はやまない。それどころか、ますます激しくなってくる。どうしちゃったのとスティールは困り果てた。
「シャール、どうしたの、一体」
途端に、“シャール”が顔を顰めた。
「何言うんだよ、スティール。シャールは僕だよ。それはただの犬じゃないか」
スティールは自分の耳を疑った。そして、犬のシャールの首に腕を回し、“シャール”を見上げた。
「あたしはシャールを見間違えないわ。この子はシャールよ。あなたは誰なの？」
“シャール”は顔を歪め、吐き捨てるように呟く。
「まったく・・・深く眠らせたつもりだったのに、邪魔するか」
なんのこと、とスティールは首をかしげ・・・そして悲鳴を上げた。音もなく近づいた茨に、絡めとられたのだ。両腕、両足、腰、首・・・全てに巻きつかれ、身動きが取れない。抱きついていたは

ずのシャールから、力づくで引き離された。硬い地面に引き倒されたが、肘をついて半身を起こし、そして見た。
「きゃあああっ、シャールっ」
犬のシャールは“シャール”に駆け寄り、吠え立てるが、“シャール”は煩そうに手を振った。すると別の場所から茨が現れ、銀の毛並みにびっしりと絡みつく。
鋭い棘が刺さり、銀の毛並みにはたちまち血が滲み始めた。
「いやっ、シャール、お願いやめてよっ」
苦しい息の下でさえ、シャールは威嚇をやめなかった。それが気に喰わないのか、“シャール”は目を酷薄に細め、笑った。
「ねえ、スティール、僕のこんな部分は要らないでしょ？あっても邪魔なだけだし、コレがあるから力だって抑制される。ない方が、僕はもっと強くなれるんだ」
そうしたら、スティール。僕と一緒に居てくれる・・・ううん。さもいい考えだというように・・・無邪気に“シャール”は笑う。
初めて見たような・・・今までで一番“幸せそうな”顔で。
「ずっと此処に居よう・・・二人で。そうしたら、誰も僕たちを傷つけないし、誰も傷つけることはない」
うっとりと笑いながら、“シャール”はスティールの傍に跪いた。少女の乱れた紅茶色の髪の毛を指で梳き、一房を手にとって口付ける。スティールは茫然と“シャール”の顔を見つめていた。
「シャール、あなた、何を言っているか、わかっているの？」
「勿論わかっているよ。僕が居なくったって、それほど皆困らないじゃない。僕は君が居ればいいし・・・いい考えでしょう？」
少女の頬をいとおしそうに撫で、“シャール”は無邪気に笑う。手は頬から顎、首を順に撫でていく。
羽でくすぐるような触れ方に、スティールは身を捩った。
「や、何するの・・・ねえ、シャール、目を覚まして」
「スティール、僕の正気を疑ってるの？僕は正気だよ、この上もなくね。もっと早く決断すればよかった。そうすれば、心を煩わされ

ることもなかったのにね」
でも、これからは幸せな夢を見られるんだ。うっとりと呟いた“シャール”に、スティールは叫んだ。
「何言うのよう。シャール、茨の繭のそばで、レンさんとリンさんが、とても心配そうな顔で立ってるの知ってる？二人ともあまり寝てないみたいな、疲れた顔してた。いつか、あたしに紹介してくれるって言ったよね。友達みたいなんだって、嬉しそうに言ったよね。そんな人たちを悲しませるの？」
「・・・彼らだって、すぐに僕の事なんか忘れるよ。時間が全て、押し流していく。どれほど強い思い出も、容赦なく押しやっていくよ。そういうものだろう？」
「たとえ・・・いつか忘れるのだとしても！今この時、シャールはあの二人をとても傷つけているんだよ？それをわかってる？いつか忘れるから・・・いつか悲しみも薄れるからって、今この時を蔑ろにしていいはず、ないじゃないっ」
スティールは涙混じりに叫んだ。酷い言葉を淡々と話す“シャール”。それは一面の真実であっても・・・だからこそ、スティールは立ち向かわなければならなかった。
“シャール”は冷めた目でスティールを見下ろし、面白くないなあと呟いた。
「いい考えだと思ったのに。賛成してくれないんだ・・・まあ、いいや、僕は僕の思うとおりにするよ」
彼は立ち上がった。しゅるしゅると茨がスティールの体を這い登る。そのおぞましさに体中に鳥肌が立った。茨を振り払いたくても自由にならない腕では、それは叶わない。やがて茨は服の隙間から入り込み、素肌を直接這い始めた。茨が這うたび、棘が皮膚を傷つける。
その痛みに、スティールは悲鳴をあげた。白い腕の内側や、太股の内側を・・・そして胸のふくらみを茨は這い・・・その度にスティールは身を捩り、のたうちまわった。

「いや・・・っ、やめてっ」
“シャール”は綺麗な笑みを浮かべて、血を流し制止の声をあげる少女を見下ろしている。
スティールは痛みに耐えながら、それでも訴えかける。
「シャール、お願いだから、目を覚ましてっ」
「目は冷めてるって言ったでしょう？・・・でもスティール、これから僕は眠るから。君も一緒に眠ろうよ」
ねえ。これを飲んで？
のびた茨の先には、小指の先程の小さな実がついていた。彼女の口元を這い回り、唇をこじ開け口の中に入り込もうとする。スティールは唇を噛み締め、顔を背けた。
「スティール・・・ねえ、僕がお願いしてるんだよ？聞いてくれないの？」
悲しげに“シャール”は首を傾げる。スティールは心を決めた。たとえあの実を飲まされて、眠る結果になったとしても・・・自分に出来ることをすべて、やらなければ、と。
スティールが口を開きかけた時。“シャール”の体が衝撃に倒れこんだ。犬のシャールが体に茨を巻きつかせたまま、飛び掛ったのだ。茨の拘束が緩む。その隙にスティールは口元の茨を振り払い、叫んだ。
「シャール、本当に眠れるの？リンさんやレンさん、長老さん、ヤツカさんにユキさん、それにスズ！皆、シャールがとっても楽しそうに話した人たちだよ！その人たちを悲しませて、シャールは眠りの中に逃げ込めるの？
それで、本当にいいの？」
シャールに圧し掛かられたまま、“シャール”は目を見開き・・・呟いた。
スズ、と。

## １０（後書き）

スズは次の「チカラノウタ」に出てきます。ここでは名前のみの登場です。

# 11

やめて、スティールに酷いことをしないで、何故僕はこんなことをするの。

硝子ごしの世界を見ているようだった。握った拳の皮が破れるほど強く叩いても、割れない硝子の壁。

声の限り叫んでも、“自分”の行いを止める力にはならなかった。

スティールと一緒に眠る・・・二人だけの世界に閉じこもって。甘美な誘惑だけど、僕はそんなこと、望んじゃいない。いや・・・心の奥底で望んでいたのかもしれないけど、けしてスティールを傷つけたくはない。

それなのに・・・“僕”はスティールの心と体を傷つけていく。やめてくれと僕は悲鳴をあげた。

犬の姿の僕が、“僕”に飛び掛り・・・スティールが涙交じりの声で叫んだ時。僕は澄んだ鈴の音を確かに聞いたと思った。

スズ。

レン、リン、長老さま、ヤツカ、ユキさん、そして、スズ。

ああ・・・そうだね。世界は、もう。

どんなに叩いても割れなかった、硝子の壁が、粉々に砕け始める。歪んだ笑みを浮かべていた“僕”は、静かに笑っていた。

同じだけの思いを返してもらえないからと言って、それで彼女を傷つけていいはずが無い。彼女には、笑っていて欲しいんだ。

それが・・・心の中をさらって、最後に残った願い。

心の奥底に隠した望みの・・・さらに奥にあったもの。一番初めに思ったことと、最後に願うものが・・・同じであった。

“僕”は静かに呟く。

思いが重ならなくてもいいじゃないか。酷く傷つけてしまったの

に、何度も彼女は手を伸ばしてくれた。
その思いだけで十分じゃないか。確かに、僕は彼女に大事にされているのだから・・・と。
“僕”は僕に手を差し出す。僕も手を差し出した。鏡を見るように僕たちは向かい合うと、“僕”は曇りのない表情で笑った。
後の事はよろしく。・・・スティールのことも、頼むよ。
ごめんねと呟きを残し、“僕”は僕の中に戻ってゆく。そして、走り寄ってきた犬の僕も。
分かたれていた僕は、一人の僕に戻ることが出来たのだ。その瞬間、光が弾けて・・・目の前が白く白く、眩いばかりの光で満ちてゆく。
僕たちは、僕たちを待つ人がいる世界へ戻る。
そうだ、二人だけで世界は完結してくれないのだ・・・それは、きっととても幸いなこと、だった。

「ちょっと、大変よっ、すぐ来てっ」
リルフィの叫び声に、ジルファ、レン、リンはすぐさま主の書斎へ駆けつけた。スティールが茨の繭に取り込まれて、三日が経過していた。事態の異変に備えて、レンに加えリンやジルファ、もちろんリルフィも氷の館に留まっていた。主は好きにすればいい、用向きは家令に伝えるようにとだけ言い、あっさりと彼らの滞在を許した。身のうちを焼く焦りと戦いながら、彼らは待った。何か・・・少しでも起きないかと、起きてくれればよいと願いながら。異変に気付いたのは、丁度書斎を見守っていたリルフィだった。茨の茎には鼓動するように光が明滅していた。その拍動が止んだのだ。そして、急速に高まる力の波動。何かが起きようとしていた。
書斎に皆と・・・主まで駆けつけ、そうして・・・皆が見守る中、茨に繁った葉の間から、するすると蕾が現れた。いくつも、幾つもい、数え切れないほど。

「いったい、何が起きるの・・・？」
リンが呟く。くすんだ緑の茨は、たちまち鮮やかな新緑に色を変えてゆく。
「あれを見て・・・」
ジルファが茨の繭を指した。硬く硬く閉じられた繭から、光が零れ始めていた。光は次第に強く、眩くなってゆき、彼らは思わず目を細めた。
「繭が開いてゆくわ・・・！」
リルフィが声を上げた。繭の中に、二人の人影を見つけたのだ。そして光でしろく満たされる。あまりの光の洪水に、彼らは目を閉じた。
次に目を開けた瞬間・・・彼らは信じられない光景を見たと思った。
柔らかそうな新緑の中、咲き誇る、花、花、花・・・様々な色の花で、満たされていたのだ。
茫然としたのは僅かのこと。すぐさまリルフィは繭のあった辺りへと飛ぶ。繭は剥がれ落ち、残骸と思われる茨が転がっていた。それにも・・・まるで棘の代わりのように、花が咲いていた。
少年の声がする。必死に呼ぶ声が聞こえる。
「スティール！目を覚ましてっ」
目を閉じた少女を抱きかかえ、シャールが必死に呼んでいた。
「スティールっ」
ぴくり、と少女の睫が動いた。そして、ゆるゆると瞼が開いてゆく。ぼんやりとした目で辺りを見回し、泣きそうな顔で少女を見つめる少年に気付き・・・言った。
「おかえり、シャール」
「・・・ただいま」
シャールは泣きそうな顔で笑い、スティールを抱きしめたのだった。

「最長老さまっ、もはや何らかの手を打たねば、一刻の猶予もありませんぞっ」
「そうです、この際災いの芽は摘むべきではありませんかっ」
長老会は紛糾していた。暦上は春が来たというのに、すこしも暖かくならず、このままでは種を蒔いても作物は実らないだろう・・・凶作になるのではという恐れが拡がっていた。
そして、時を同じくして、突如眠りこんだという銀の君の血筋の少年。
彼がその原因ではと長老たちは思い至ったのだ。その少年は何度も長老会を訪れては、愚直にもう毒の水の脅威は去ったのだと訴えていた。だから街を出て、湖の近くに住むことが出来る、作物もとれる、動物だって戻ってきたと。
長老たちは彼の話を相手にしなかった。たとえそれが本当だとしても・・・一度覚えた街の暮らしを手放して、村の暮らしに戻る住人がいるだろうか。彼らは全てを失っているというのに。
街へ流入した彼らは、長老たちにとって頭の痛い問題ではあったが。
だから・・・少年が何度来ても、彼らは相手をしなかったが。何の酔狂か、最長老は少年を呼び寄せ、あまつさえ人材を貸し出しもした。少年の何処に動かされたのか、長老たちにはさっぱりわからなかった。
まあ、最長老さまは物好きなお方だからな。彼らはそう自分たちを納得させ、少年が自分たちを煩わせない限りは、その行動を見ないふりをする事に決めたのだ。
けれど。
「最長老さま、あなたが一番あの少年に目をかけておいででしたね！何かおっしゃって下さい」
他の長老たちに詰め寄られても、最長老は、はて、と空気の抜けるような笑い声をもらした。

「何かとはな・・・まあ、しばし待つがいい。待つことも実りには必要じゃろ？」
「そうおっしゃられても！蒔き時を逃せば、芽は出ませんぞ！それではいくら待った所で、実りは期待できませぬっ」
「そう焦るな・・・おや、今春の風が吹いたぞ」
「最長老さまっ」
「ほれ、お前たちは感じぬか？この柔らかい、心が浮き立つような風を」
「確かに・・・」
長老たちは口々に言い、窓の外を見た。通りをゆく人々も皆立ち止まり、何処からか吹いてくる風を・・・目には映らぬそれを見上げていた。一吹きごとに満ちていく・・・冬から春へと、塗り変わってゆく空気。
長老たちは茫然として呟いた。
「一体、何が起こったんだ・・・？」
最長老は、ほう、いい風じゃわいと目を細めていた。

## 12

「・・・という訳で、スティールは無事よ。シャールもね」
金の君は通信球ごしにクリードと話していた。彼は酷く疲れた顔をしていたが、安堵の表情を浮かべると、ありがとうございますと金の君に頭を下げる。
「ありがとうございます。こちらのモニターでも、界の異変は落ち着きつつあるとわかったんですが・・・詳しい事は何分わからないので」
安心しましたと言うクリードに、金の君は肩を竦める。
「それくらいさせてよね。ほんと、これくらいしか、わたしには出来ないもの」
「そんな事は・・・ところで、娘はいつ頃戻ってくるのでしょう？」
「さあ・・・長くてもあと一日くらいじゃない？シャールの目が覚めたら、きっとすぐ戻るわよ。なあに？」
クリードは渋い顔をしていた。
「もう三日も家を空けているわけですから・・・妻がとても心配しているんですよ」
シャールの具合が良くないから、あちらへ泊り込むと言ってあるんですがねとクリードは言う。シャールは元の飼い主の元、通信も届かず、移動手段も限られた僻地で暮らしていると妻には言ってあるのだ。
まあそうねと金の君は頷いた。
「当然だわね。ジルファには、出来るだけ早く戻るように、伝えておくわ」
ありがとうございますと言い、クリードは再び頭を下げる。金の君はひらひらと手を振り・・・通信は終わった。
「さて、どうにか銀の界も落ち着いてよかったわ・・・それにして

も、あの花は」
金の君は、咲き誇った花を思い出す。純白、深紅、紫、黄、薄桃・・・様々な色で彩られた花々。
あれは多分・・・少年の心を写したものだろう。少年が少女に向ける純粋な思いや、葛藤や、奥底に隠した願いや・・・渇望や。焦りや悲しみ。それらを吸い取り、花は咲いた。少年は抱えた思いを、花という形で昇華したのだろうか。彼は己の心に、どう折り合いをつけたのだろう。それは、金の君にもわからないけれど。
「とても、美しいものを見せてもらったわ・・・」
ありがとうと彼女は密やかに呟く。

「長老会に顛末を報告しに行ってくるわ」
リンが言うのに、レンはそうだなと頷いた。繭から出てきたシャールは、力を使い果たしたのかまた眠ってしまった。そのため、シャールが繭から出れば、すぐにでもこの館を離れるつもりだった彼らも、未だこの館に留まっている。館の主は、シャールのために寝室を用意した。好きに使うがいいと案内された室内の・・・簡素ながら居心地のよい様子や、真っ白いリネン、柔らかそうな上掛けに、また目をみはる。
主の物言いと・・・行動との間に、違和感を感じるのはこんな時だ。それでも彼の体を休める方が先決と、益体も無い考えは放り投げたレンである。
今、眠るシャールの傍には、狭間の界から来た少女がついていた。長い紅茶色の髪の毛と、意志の強そうな目が印象的な少女。特別な力などないと言いながら・・・誰も出来ないことを為し遂げた。
向かい来る茨を恐れもせず、その細い身に受け・・・彼を眠りから引き戻した。
この茨も花も、おそらく数日のうちに枯れるだろう。レンは今、

主の書斎に立っている。室内を埋め尽くしていた茨は、徐々に萎れ出している。色とりどりの花も根を絶たれ、まもなく花弁を散らしてゆくだろう。彼が無事だったことに安堵しながら・・・消しきれぬ無力感に打ちのめされていた。
「おや、此処にいたんだね。君たちも体を休めたらどうだい。ヨハンがお茶をいれてくれたよ」
ジルファが、今は灯りが灯され、明るくなった廊下の向こうからやって来た。金の鳥の姿は見えず、恐らくあの少女の所だろうと察しをつける。
「わたしたちは、別に・・・」
「休む必要はあるだろう？長い間気を張っていたんだから、自分で思っている以上に疲れているはずだよ。何、お茶を飲むくらいの間、長老がただって待ってくれるさ」
きっとね、とジルファが笑うので、リンはそうねと同意した。
「そうね、少し一息入れたいわ。そうしましょうよ、レン」
「ああ、そうだな・・・それにしても」
レンは枯れかけの茨を一筋手にし・・・自嘲気味に呟く。
「私達は、結局何も出来なかった。彼の助けにならず、手をこまねいて見ているしかなかった。あの少女がいなかったら、一体どうなっていたことでしょうね」
「レン・・・」
リンが兄の名前を呼ぶ。彼女にしても思いは同じだった。するとジルファは首を振る。
「いいや、そうじゃないよ。君たちは確かに彼を救ったよ。君たちの存在も、確かに彼を引き戻す錘になっていた。もし・・・もしもスティールしか知らないあの子だったら、きっと戻って来なかった。スティールを取り込み、二人で閉じた世界へ行ったことだろう」
「私達も、幾らかは力になったと言われる。本当に、そう・・・でしょうか」
「そうだよ。まあ、シャールは、スティールに依存してる部分が大

きいからねえ・・・だからこそ、私はスティールに賭けたんだけど。よくも悪くも、スティールは発端だよ。あの子が居たから、シャールはこの界へ戻ってきた。あの子を危険な目にあわせないためにね。あの子が居なかったら、シャールは銀の界には戻らず、もしかしたらこの界はさらに不安定になっていたかもしれないね」

もしもの話だけどとジルファは咲いていた花を摘む。まだ瑞々しさを残す薄桃色のそれをくるくると手の中で回した。

「まあ、シャールが不安定になるのは、あの子が原因の事も多いけどね」

そこへ、話題にしていたとうの少女が顔を出した。肩には金の鳥・・・リルフィを乗せている。

「何の話してるの？」

「いや別に。シャールの様子はどうだい？」

「よく眠っているよ。特に変わった様子はないみたい」

それはよかったとジルファは答える。深く眠って、酷使した体と搾り出した力を回復させた方がいいと。

それでね、と少女は首を傾げながら言った。

「ここのご主人が、ちょっと来て欲しいって言ってるんだけど・・・」

「はて、何のお話か聞いているかい？もしかして早く出てゆけとか言うのかな」

「さあ・・・来てくれればわかるからって」

彼らは顔を見合わせた。色々彼に対して思う所はあるし、特にリン、リルフィの女性陣からはその暴言で敵視されている彼だが、一応彼らは彼の屋敷に滞在しているわけで。

主の意向は一応聞きましょうかと、彼らはぞろぞろとスティールの後について行った。

その部屋は、ジルファやリルフィ、スティールが初めて主と対面した部屋の・・・真向かいにあった。

スティールが扉をノックした。
「あの、皆を連れてきましたけど」
「そうか・・・入るがいい」
扉が開き、室内に主の背中が見える。室内に入り、ジルファはほう、と声を上げた。
「これは、歴代のご当主と・・・そのご家族ですか」
この部屋は肖像画の間であるらしい。四方の壁一面に、厳しい顔つきの肖像画や、微笑む婦人の肖像、または幼い子どもとその両親らしき姿を描いた肖像画など・・・誠に多くの絵がかけられていた。
主は頷いた。
「そうだ。わが一族は古くからこの土地に住み、代を重ねてきた・・・この館じたい、初めてこの地に根を下ろして以来、改築を重ねて今に至るものだ」
まあ・・・それは横に置こうと主は言った。
「私には姉がいた。年が十ほども離れていたせいか、姉というより母代わりのようであったな。私達を産んだ母は早くに亡くなっており、父には館の主の務めがあったから」
主はゆっくりとある一枚の絵の前へ歩いていく。ジルファはほうと目を細め、ええっとスティールは声をあげた。あら・・・とリルフィは呟き、レンとリンの兄妹はあの女性は・・・まさかと言った。
「姉はいずれ何処かへ嫁ぐと、わかっていた。それでも親族であり館の跡継ぎ・・・あるいは主であれば、訪ねていくことは難しくない。そう思うことで、自分を納得させてもいた。まさか、姉があの方の元へ行くことになろうとは、思いもしなかったゆえな」
主は淡々と・・・感情を交えない声で話す。
「あなたは・・・姉上を引きとめたんですか？」
ジルファの問いかけに、主は微かに笑う。
「もちろん、引き止めたさ。しかし、姉の心は揺るがなかった。姉は館を出て行き、月満ちて男の子を産んだ。幸せであったならよかった・・・しかし、姉の最後は無残なものであったと言う」

主はうら若き女性が、薄桃色の花を持って微笑む、一枚の肖像画の前で足を止めた。
「姉の名はリーディア。この肖像画は、姉が１８の頃に描かせたものだ」
やっぱり、とスティールが呟く。彼女は以前、一時この世に帰ってきたリーディアに会っている。そして何より・・・。
「今のシャールと、よく似ているわ」
リルフィがしげしげと見て言った。
「そう・・・だから私は驚いたさ。あの少年が初めて現れた時は。実のところ、君たちが来る事は知らされていた。最長老から文が来たから・・・お前さんのただ一人の血縁が来る。追い払わずとり合えず会ってくれ、とね」
そのためか、とレンは腑に落ちた。人嫌いで有名な氷の館の主が、突然の訪問者に扉を開いた理由を。
酷い言葉を投げながらも・・・何処か気遣う様子を見せたのも。
「もう姉は居ない。そして彼はただ一人の血縁だ。私としても力にならねばと思いはしたのだよ・・・だが。姉と余りに似た彼を見ていると・・・思い出してしまった。王妃の手のものによって無残な最期を遂げた父を。私の傍を去り、遠くへ行ってしまった姉を・・・姉を恋いながらも憎んだ日々を・・・ありありと思い出してしまった」
ジルファはようやく主の行動がわかった気がした。彼はあまりに深く姉を愛したがゆえに・・・遠くへ去った姉、自分の手の届かない遠くへ行った姉を、憎んでしまったのだろう。その思いを抱えたままで年月を過ごし・・・そして、若い頃の姉によく似た・・・姉の子どもが現れた。いまだ塞がらぬ傷口の痛みが、彼にあのような酷い言動を取らせたのだろうか。
ただ・・・リルフィとリンは、いまだ厳しい顔つきで主を睨んでいる。どんな理由があったにせよ、あんたの暴言を簡単に許すわけにはいかないわ。彼女らの目はそう言っていた。

項垂れる主を前に、さてどういったものかとジルファは思案した。しかし。
「もういいよ。あなたは、シャールのお母さんがとても好きだったんだよね？あなたの言葉は、確かにとても酷いものだったけど・・・でも、ちゃんと話せば、シャールはわかってくれるよ？だから、もう顔をあげて」
「あのような酷い言葉を吐いた私を、許してくれるというのか」
「うん・・・もう、いいの。ちゃんとシャールと話をしてね。それにあなたはシャールのたった一人の血縁だもの。シャールもきっと、喜ぶと思うの」
ところで、あなたの名前、なんていうの？あたし知らなくてと言うスティールに、主は名乗った。
「私の名はラシードという。スティールと言ったな。私の、そなたへ向けた無礼な発言の数々を、どうか許してくれるか」
「うん、ラシードさん。シャールにもちゃんと話したら、許してくれると思うよ」
「済まない・・・っ」
目の前で繰り広げられる光景を、どうにも直視できなくてジルファはそっと視線を逸らす。やれやれシャールに強力な後ろ盾も出来そうだし、これで一件落着かなと思っていた。ふと気付くと、レンとリンの兄妹も、どこか苦笑気味に少女と主の遣り取りを眺めていた。
レンと視線が合うと、彼はちいさく肩を竦めて見せる。
ジルファはまた少し安心した。シャールはどうも思いつめるから、傍にいる人間はあまり物事に拘らない・・・言ってみれば、いい意味の“適当さ”を持った人間が居ればいいのにと思っていたから。
リルフィは、やってらんないわとスティールの肩から飛び立ち、不本意だけどと断りを入れて、ジルファの肩に止まる。
肩にかかる重みと暖かさを嬉しく思いながら・・・ジルファはふと窓の外を見た。

青く澄んだ空が・・・どこまでも広がっていた。

「ああ、ところでスティール、君家に連絡した？」
「はっ・・・いやああ忘れてた！3日も繭の中に居たなんてっ。どうしよう～っ」
「まあどうにかなるでしょう～」
賑やかな声が、氷の館に響き渡り、それはかたく閉ざされた館の扉が開いた、合図のようだった。

眠り姫・・・僕にはもう、百年の眠りは要らないよ。
あの子に言おうとした言葉は、僕自身で抱いてゆくから。
百年間・・・夜毎の眠りの中でゆっくり結晶化して。
そうして輝く石になる。

だから・・・茨の鎧も眠りも・・・夢の中に置いてゆく。それらにこそ、告げるよ。
『さよなら』

ＥＮＤ

## ～風の知恵～

初めて会ったとき、なんて素直な目をしているんだろうって思ったわ。
野で生きる獣みたいな、嘘の無い瞳。
今も・・・その目は変わらないのね。
嘘を吐けない、吐くことを知らない目は、揺れる思い全て、映してしまうから。
嬉しさも、喜びも、落胆も、そして・・・。
渇望も。

ふう、と重いため息をついて、ユキはテーブルの上の皿を重ねてゆく。
昼もだいぶ遅くなり、最後の客が支払いを済ませ、ごちそうさま、美味しかったよとの声を残して帰って行った。
途端にさして広くない店の中には、外界と切り離されでもしたような静けさが満ちる。
空の椅子やテーブルが並ぶ光景は、淋しささえ感じられそうで。ヤツカと二人で切り盛りする小さな食堂は、幸いなことに常連客も出来、軌道に乗り始めていた。客たちは、よく食べ、よく飲み、そしてよく喋って帰ってゆく。店を出るときの腹がくちて満足そうな顔が、彼らにとっては何よりも嬉しいものだった。今日も代価以上に嬉しいものを受け取り、店を閉めた、そのはずなのに。
客を見送った時の笑顔は。けれど近い過去を思い出すとじわじわと寂しい色にとって変わられる。
あれから、ほんの少し時間が、経っただけなのにね。
こんな・・・ふとした拍子に、心に冷たい色の・・・寂しい色の思いが混じりこむ。普段は日々の忙しさに取り紛れて忘れているけど・・・時々、深い水の底から浮かび上がる泡のように、思い出す。

そして、普段は忘れていることに罪悪感を抱いてしまう。
ぱちん、ぱちん。浮かび上がった泡が弾けるたびに、胸の中に広がる苦い記憶。
「・・・・ユキ？どうかしたか？」
そうヤツカから声を掛けられるまで、ユキは皿を片付ける手を止めたまま、ぼんやりしていたらしい。
厨房に引っ込んだはずのヤツカが傍に来たのさえ、気がつかなかったなんて。止めていた手を動かし、テーブルの上を片付けてゆく。
「あ～何でもないわ。ちょっとぼうっとしてただけで」
「・・・調子でも悪いのか？気分悪いなら、休んでろよ」
途端に心配そうな顔つきで、今にも腕を伸ばし抱き上げようとするから、手をひらひら振って笑う。
「いやだ、大丈夫よ。ほんと、ぼんやりしちゃってただけ」
「そうか？なら、いいけどよ・・・」
ヤツカの視線は、まろみを帯びたユキの腹に注がれている。紺色のスカートと、生成りのシャツ、その上のクリーム色のエプロンを押し上げる・・・ユキの胎の中で丸くなる子どもに。
心配でたまらないといった様子のそれに、ユキはため息をつきたくなったが、それは堪えておく。
逆効果になりかねないからだ。
心配してくれるのは嬉しいけどねえ・・・。
ユキに子どもが出来たと知った途端、一瞬茫然とし・・・その後、大声で何度も聞き返し、その挙句子どもが生まれるまで店に出るな、安静にしとけなど、ヤツカは言い放った。
勿論そんな事、ユキが聞けるはずもなく・・・ヤツカとあわや大喧嘩になったのも、まだ記憶に新しい。
具合が悪くなったらすぐ休むし、重いものは持たないようにするし、無理なんかしないからと、何度も何度も言って、ようやくヤツカに、“必要以上に過保護にしないこと”を約束させたのだ。
それでも、時々ヤツカは約束を忘れたように手を伸ばしてくるか

ら。
「大丈夫だってば」
心配してくれるのは嬉しいけど、度が過ぎれば怒るわよ。そんな思いが伝わったのか、ヤツカはああ、と唸り、がしがしと頭をかいて、メシ、出来たぞ、食べようと言った。
「ありがと、じゃあこれ置いてくるわね・・・・あら？」
ユキは皿を重ね、流し場に運ぼうと持ち上げた時だった。店の扉が静かに開き、ひょこりと銀色の頭が覗いたのだ。ヤツカも振り返り・・・そうして笑いながら扉の傍に佇む客人に近寄る。
「よう、最近顔見せなかったから、どうしたかと思ったぜ。あれ、お嬢ちゃんはどうした？」
少年の後ろに紅茶色の髪の少女がいないのを見て、ヤツカが尋ねると。
「今日は用事あるからって。でも、ヤツカの新作お菓子楽しみにしてるからって言ってたよ」
今度は一緒に来るよ。笑顔で言う彼だけど。
ユキは気がついていた。少女の事を尋ねられたとき、彼の宝石のような瞳が悲しげに曇ったことを。

ああ、彼はとてもあの子のことが好きなのね。
少女を紹介された時、ユキはすぐに気が付いた。一緒に居られることが、とても嬉しい。そんな思いが彼からは透けて見えた。ユキから見れば、幼いと言っていいような・・・彼と少女が他愛ない事で笑いあうさまは、まるで犬の兄弟がじゃれあっているのにも似ていた。それを微笑ましく思っていたのだけど。
同じだけの思いが、相手から返る・・・それは奇跡に近いのかもね。

まだ昼食べてないんだろ、食べていけよとヤツカは彼をテーブル

の一つへ誘う。それを横目で見ながら、ユキは皿を流し場へ運び、まずヤツカと彼のための食事を運んだ。
「お待たせ。今日のお昼は鶏肉のクリームシチューとほうれん草のソテーよ。どうぞ」
彼とヤツカの前に、それぞれ皿やパンを並べる。ああ腹減ったとヤツカは帽子代わりに巻いた鮮やかな橙色の布を解き、両腕を宙に伸ばした。鍋振りっぱなしで腕が痛いとぼやいている。
「繁盛してて、結構じゃない」
「お～まあな。そうだ、人手足りなくなったら、またお前に店の手伝い頼むかな」
「う～ん、それはいいんだけど。ふざけたカッコはしないからな」
前スティールに笑われたじゃないかと、眉間に皺を寄せながら彼は答える。自分の食事を運びながら、ユキははてと考えた。あの異界の少女が笑った、彼の“ふざけた格好”？それって・・・・。
自分の分の皿をテーブルに置き、ヤツカの隣に座って、ユキはぽんと両手を打ち鳴らした。
「ああ、思い出した、白いフリルのついたエプロンしてたことよね？」
「お嬢ちゃん、目丸くしてたかと思うと、涙流して笑ってたもんなあ」
彼はますます不機嫌な顔になる。そのあと、うんでも似合うよ、可愛いと少女は言ったのだけど。
彼にとって、“可愛い”はあまり嬉しくないらしい。
「ええ～あれ、可愛かったじゃない。またやりましょうよ～」
「やだ。スティールが笑うから」
ぷいっとそっぽを向いて彼は答えた。あらら、もう“これが手伝いの正しい格好よ”なんて誤魔化されてはくれないのね、残念。
なら・・・今度は何と言って、“素敵な”格好させようかしら？物慣れない上に、些か世間知らずな所がある彼を言い包めてしまう自分の事は綺麗に棚上げしてしまう。

ユキの内心が聞こえたら、彼は顔を引きつらせていたに違いない。
「ま、とりあえずメシにしようや」
にやりと笑うヤツカの顔を見て、ユキは気付いた。あらら・・・この人も“悪ふざけ”、諦めてないみたいね。
ごめんなさいねと、シチューをすする彼に、ユキはこっそり思ったのだった。

“お店のお手伝いには、このエプロンをするのよ”フリルとレースのついた、しろいエプロンを彼に渡すと、
“そういうものなんですか？”首を傾げながらも、彼はそれをシャツとズボンの上から身につけた。
“ええと・・・何かヘンじゃないですか？”
“何でよ？”
“お客さんが、僕を見て笑っている気がするんですが・・・？”
“気のせいよ。よく働くねって、感心してくれてるのよ”
“そうですか・・・・？”
首を傾げながらも、イチオウは納得してくれた彼だけど。
彼に内緒で、この店を訪れた少女に、それは“悪ふざけ”であることを暴露されてしまったのだ。

わたしたちがやっておいて、何だけど・・・ほんと、疑うって事を知らないのね。
それとも、知らないだけかしら。
知らないから・・・そんな綺麗な目をしていられるのかしら。それなら。
色んな事を知れば知るほど、あなたの目は曇っていくの？
ごちそうさまでした、と言った彼に、お粗末さまとヤツカは返す。

空になった皿にも、その言葉にも満足げに頷いていた。
彼はどんな時も人の目を見て話すので、気持ちが言葉以上に伝わってくる。
お茶でも入れるわねと、ユキは皿を重ね流し場へ持っていく。
僕も手伝いますよと彼はユキが持てなかった分を運んでくれた。ありがとうと言うと、彼は少し首を傾げて、それから、「・・・ええと、どういたしまして？」
「なんで疑問系なのかしら？」
「これで合っているかどうか、自信がなかったんで」
うん、それで合っているわよと答えると、彼はよかったと笑う。
そういう・・・人との関わり方に戸惑っている所も、人に馴れない野生の生き物のようだ。
お茶入れるから、座ってヤツカと話でもしててねと言うと、はいと素直に頷いてテーブルへと戻った。
「いい子なのよ、ね・・・」
薬缶を火にかけ、湯が沸くまでの間をユキは椅子に腰掛けて待つ。素直で一生懸命で・・・でも、何処か所在なさげな顔をする時があって、それがとても気になってはいた。
知らない場所へ来てしまった、頼る者もいない、子どもみたいな。
あの少女と一緒の時は、そんな様子は欠片もないのだけど。
それに、ユキは安心すると同時に不安だった。
ユキはそっと自分の腹を撫でる。日に日に、丸みを帯びていく腹部。確実に育ってゆく新しい命。それが自分の中にあると言うことに・・・変化してゆく体に日々感じているけれど。
実のところ、ユキはまだ子どもを持つつもりではなかった。まだ混乱の痕はあちこちに残っていて、酷かった時期の揺り返しのように・・・目を覆うような酷い事件が起きたりもする。
もう少し周りが落ち着いて。
もう少し店が軌道に乗って。
そうしたら・・・子どもを持とう。そんな風に内心では思ってい

たのだ。ヤツカが子ども欲しがっているのを知りながら、そう思っていたのだけど。
だから、子どもが出来たと気付いた途端、まず感じたのは戸惑いと、こんなはずじゃなかったのにという思いだった。
「ごめんなさいね」
ユキは歌うように呟く。ごめんなさいね、酷いことを思って。手は丸みを帯びた腹に当て。
戸惑っていても時間とともに子どもは育つ。そしてあの・・・外見以上に幼い心の彼を見るにつけ、ユキは思ったのだった。
今は駄目。もう少し後でなら。でも・・・いつならいいの？いつまで待てばいい？そんなの誰にもわからない。
だから・・・今でなきゃ、駄目なのだ。時期を待っていても仕方ない。いつがいい時かなんて・・・後になってみないと分からない。
重ねられてゆく時間が、問題を解決してくれればいいけれど。でも、そうでなかったら？
「あなたはきっと、今生まれてきたいのね」
腹に手を当て話しかけると、そうよ、というような・・・いらえがあった気がした。

お茶を飲みながらひとしきり色んな話をした。
「もう少し店が軌道に乗ってさ、周りが落ち着いたら、夜も店開けようかと思ってるんだ」
「へえ。じゃあ夜はお酒とか出すの？」
「まあそのつもり。酒とつまみと、かな。お前は？先の予定何か考えてるのか？」
「う～ん。そんな先の事なんて考えられないよ。来週またスティールと遊んで・・・とかくらい」
「あっ、あたしね、今一つ決めた事あるよ！なんと子どもの名前！」
「へっ？」
「え？」

目を丸くする男たちに、ユキはにっこりと笑った。
「男の子でも女の子でも・・・この名前に決めたわ」
いいわよねとヤツカに問うと、彼は頭をかきながら、まあいいけどよと諦めたように呟いた。

「どんな名前にしたんですか？」
尋ねる彼に、ユキは人差し指を唇に当てた。
「・・・内緒」

あなたの望みが叶えばいい。あなた自身すら、よくわかってないかもしれない望み、それをわたしは知っているけど。
でも、もしも叶わなくても。どうかその時は思い出して。
ここに、わたしたちが居ることを。

## ～十字路で～

覚えていないはずの光景だ。記憶に残せないほど、あのとき自分は小さかった。それでも。

その光景が、確かにあったはずだと、何の疑いもなく確信できた。

彼女はいま、新しい命を、その腕に抱いている。

「もう産まれたかなあ・・・」

最近シャールは何をしていても、ふとそんな事を呟いて、街の方・・・正確に言うなら、ヤツカの店の方角・・・を眺めてしまう。あまり何度も言うものだから、シャールの傍で何くれと働いてくれる双子の兄妹からは、いささか呆れられているようだ。

今日も。彼ら・・・シャールと双子の兄妹は、湖を望む小高い丘を目指して歩いていた。その途中で街を振り返り、呟いたシャールに、妹の方が腰に手をあて笑った。

「まったく、お友達の子どもでそうなら、自分の子どもが生まれる時になれば、一体どんな様子になるんでしょうね」

さあ、とシャールはそっと彼女から視線を逸らして言葉を濁す。自分の子ども・・・に関しては、まるで想像も出来ない範疇の事だからして。まず産んでくれる“誰か”がいなければならない。そして、一度あの少女に言った事はあるけれど・・・少女自身が“産む”という選択肢は、彼女の頭に無かったようで。そのことを思うとまだ苦い味が口の中に広がる気がする。

「まだまだ先の事だし、想像も出来ないよ」

大体、相手が居ないじゃないか。

そうですねと兄の方は答えたものの、きっと、と付け加えた。

「きっと、いざお産となればうろたえて、おろおろするんですよ。手を握ってやったり腰をさすってやったりとかしてても、痛がる様

子に自分の方が青い顔するんですよ、きっと」
　絶対そうなりますよと兄の方は言う。妹は、それは兄さんの体験でしょ、義姉さん言ってたわよ～あのヒトったら、私より青い顔して、うろたえてたんですものって～あの人の方が倒れるんじゃないかって私の方が心配したくらいって。お前、何もばらさなくてもっ。双子の兄妹は、賑やかに言い合いながら、どんどん先を歩いていく。夜色の髪、夜色の瞳を持つ彼らは、男女の双子であるのだが、とてもよく似ており、ふとした表情がそっくりで、何だか面白い。
けれど・・・うろたえて青い顔かあ・・それはあまり有り難くない予想だなあとシャールは苦笑いをして、もう一度街を振り返り、彼らの後をついていった。

　小高い丘に、風が湖を越えて吹いてくる。見下ろす湖面に太陽の光が反射して、きらきらと光っている。のどかで美しい様子に見えるが、ふと視線をこらせば、湖の縁やなだらかに広がる丘に、壊れた家の残骸が散らばっていた。人影は見えず、また家畜の姿も見えない。
多くの人の手助けで、この界が崩壊へと突き進むのは止められたけれど、課題はまだ沢山残っている。荒れた土地や壊れて人の住めなくなった家があちこちに残され、・・・そして、土地や家を捨てた人々は街へと流れ込んでいる。結果、街は人が溢れて、治安が急激に悪化していた。
　毒の水に汚染された土地も、雨で次第に清められ今では住むことが出来る。湖の水も飲める。
もう元の土地に戻っても、安心であると。
そう・・・街の有力者や、実際に行政を司る人たち、街へと逃げ込んだ人々に言っても、彼らは疑いの目を向けるばかりで、なかなか信じてはくれない。
　長く続いた酷い時代が、彼らの心を頑なにしているようだった。

「まあ、気長にやるしかないだろうねえ」
いつだったか・・・あまりに変わらない状況に、思わず弱音を零したシャールに、まあちょっと座ってお茶でも飲んで、まわり見てごらんよとジルファはたまには息抜きも必要だよと、湖を望む小高い丘に彼を連れ出した。
そんな事してる間はないよと言いかけるシャールに、ジルファはばさりと羽を広げる。はい一呼吸置いてと。
「荒んだ人の心や、荒れた土地を元に戻すのは骨が折れるよ。働きかけも大事だけど、時間も要る。皆が落ち着いて周りを見回すだけの時間がね。だから、まあこれ以上酷くしないようにって気持ちで、ぼちぼちやればいいさ」
長丁場と腰を据えて、息切れしないようにやっていけばいいのさ。
「・・・それで、いいのかな」
「いいんだよ。急ぎすぎても、その反動が出るだけさ。何、もう少し落ち着いたら、街中の暮らしより元の土地での暮らしを望む人も出てくるだろうし、街中の長老たちだって、人口過密な現状を憂えていることに間違いはないのだからね」
「・・・長老たち、僕の話をとても胡散臭げに聞いてるんだけど」
「そりゃあ、ぽっと現れた子どもが、“銀の君”の血筋だと言っても簡単には信じないだろう。たとえ、君の母上の名前を出したとしてもね。疑ってその上で慎重に行動する。それはもう習い性だろうねえ。何せあんな酷い時代をそれでも強かに生き延びたんだもの。でも、彼らも君の話を全部嘘だと思ってるんじゃないんだろう。君の傍に人をつけたくらいだからね」
うん、そうだねとシャールも頷く。
何度目かに会った時・・・長老は、ほう、と空気が抜けるような笑い声をもらして、言ったのだ。

お前さんの母御の事は、わしらも知っておる。あれは酷いことじゃったな。なれど。
わしらは、お前さんの話を全て信じたわけではない。

そう・・・胸まで届く長い白い髭と、真っ白い髪の長老は言った。
長老会が開かれる・・・それは、かつて王妃がこの界を支配していた時は、そこで決定されたことの何一つとして力を持たなかったのだけど・・・公会堂の一室で。居並ぶ長老たちの内、最も高齢であろうと思われる人物は、重々しく口を開いた。
しかし、その後で。がらりと口調を変えて、こうも言ったのだ。
　わしらは、お前さんの話を、全て信じたわけではないが、まあお前さんの話がまるきりの出鱈目だと決め付けるだけの、材料も持たんな。
垂れ下がる白い眉の間から、覗くちいさな目が、きらりと光った。
髪も肌も白茶けたように色を失う中で、瞳の色だけが若々しく、とても明るかった。
何をするにしても、人手は入り用だろうて。この者らを遣わそう。
お前さんのいいように遣うがいいさ。
　枯れ木のような骨と皮ばかりの腕が示した方向に、人影が現れる。
　現れた彼らは、まるで鏡を見ているようにそっくりだった。夜空を切り取ったような黒い髪に黒い目。違いは髪の長さと、胸の膨らみと・・・朱を刷いたように赤い唇など、性別で異なる部分。よく似た形の唇が、高低が違う音を発した。

　はじめまして、よろしくお願いします、と。

　居並ぶ長老たちの、重みさえ感じられるような視線。それに怯むことなくシャールは彼らを見、そして長老たちをぐるりと見回した。
そして、静かに頭を下げる。

「ありがとうございます。彼らをお借りします」と。
長老は、ほ、と空気が抜けるような笑い声をたてた。まあお前さんの思うとおりにやってみるがいいよ。

「まあね、彼らが居てくれて、とても助かっているよ」
何せこの界で暮らしたことが殆どないシャールだ。まだこの社会の仕組みもよくわかっていない。大事な少女を危険な目に合わせないため、それだけを思って、この界へ戻ってきたから。
ひとまずこの界の危機は遠のき・・・これからこの界で生きていくんだと思ったとき、シャールは愕然とした。
自分はこの界の仕組みを何一つ知らない。
人の暮らしというものは、狭間の界の事くらいしか知らないし、ましてその間犬として過ごしている。
　この界で生きることを選び、傷ついたこの界の為に力になりたいと思っていても・・・何をどうすればいいのか、誰に働きかければいいのか、さっぱり見当もつかなかった。
今のところ、色んな相談をジルファに持ちかけてしまうのだけど、ジルファは本来金の界の者だ。その彼にずっと頼るわけにいかないし、また彼の力を借りると言うことは・・・彼を通じて金の君の力を借りることにもなり兼ねず、それは界の均衡を崩すことにもつながりかねない。
　また・・・これはスティールと離れて初めて知ったのだけど。シャールは他の人と上手く話をすることが出来ないで居た。それを彼、彼女に指摘されるまで、気付いてもいなかった。

銀の君の直接支配のみかと思われていた銀の界にも、いくつかの機構が存在した。
元は銀の君の統治を助けるためだったんだろうがな、とヤツカは少し遠い目をした。
ジルファ以外で銀の界の事をよく聞いたのは、幼い頃よくしてもら

い、またこの界へ戻ってからも、何かと気遣ってくれたヤツカだった。君一人で界の隅々まで目を行き届かせる事は難しい。住民の様々な声を聞き、取りまとめ、君へと進言する。
また、日々の暮らしの中で起きる問題を調停し、時には裁きもする・・・そういう役目を担う人々が居たと。俺の親父がそうだったように、とヤツカは淡々と言った。シャールは何と答えていいかわからず目を伏せる。お前がそんな顔するこたないんだとヤツカはシャールの頭を乱暴にかき回す。何、親父は自分の仕事をしただけなんだ、それだけだったんだと。

王妃の支配の下では有名無実化していた長老会。長老から彼ら（彼らはやはり、双子の兄妹であるらしい）を借り受けた後、街の有力者に会いに行った時だった。土地も水も元通りだと何度言っても、またも信用されずけんもほろろに追い返された。邪険に追い払われ、閉じられた扉の前で立ち尽くすシャールに、双子の兄妹は呆れたように言ったものだ。
「あなた、今までずっと、こんな風にしてたんですか？」
「・・・こんな風って？」
「直球に莫迦正直に、もう安全ですよ信じて下さい、そればっかり言ってきたんですか？」
「・・・そうだけど、それが・・・？」
途端に彼ら兄妹は顔を見合わせて、信じられないと大きくため息をついた。そして、きょとんと首を傾げていたシャールが驚く勢いでまくしたてたのだ。まず一つ。奇妙に据わった目で彼は人差し指を立てた。
「あなたは交渉の基本がなってない。大丈夫です信じてください、そんな言葉だけで人が動くと思いますか？人を動かすには確かな証拠と、情報と、それ以上にその人が何を欲しがっているかを知ることが大事なんですよ」
あなた、そんなことも知らずにいたでしょうと詰め寄られ、シャ

ールはこくこくと頷いた。背後に扉があったため、それ以上下がれず扉に張り付いてしまう。
　考えた事もなかった。心をこめて本当の事を話せば、いつかわかってくれるとだけ思っていたから。
「たとえわかってくれたとしても～あなたの言葉を聞いてくれた人が居たとしても～その彼らが、あなたの望むように動くとは限らないでしょ～？」
　その二。指を二本立てて、彼女はシャールの顔を覗き込んだ。シャールは彼らが何を言っているのかわからなかった。すると彼女は、たとえばね、と助け舟を出してくれた。
「例えば、もう土地は安全で、そこで暮らしていけるとわかっていても。街の暮らしに慣れた人は、もとの土地に帰らないかもしれない。そうすれば街は人で溢れたままで、治安も良くならないかもしれないわね～」
「だから。彼らが進んで帰りたくなるような話をするんです。例えば、街で暮らすよりも広い家に住めるとか、治安がいいとか。壊れた家を直すための補助を出すとか。暮らしが立ち行くまで税金を免除するとか。何か条件や確たる証拠、もしくは情報を出さなきゃ、人は動かないでしょうよ」
これが三つ目。三本の指を立て、彼は言う。嘘や、誇張をしてはならないけど、何故いかにしてそうするのか、またそうすることによって何を得られるのか。先の見通しがないままでは、人は動きませんよと彼は言った。
「・・・そんなこと、考えた事もなかったよ・・・」
　半ば茫然と呟くシャールに、彼らはまたも大きくため息をつく。言葉が頭の中に染みとおるとと共に、シャールは頭を抱えてしゃがみこんだ。一つ一つ言われると、いかに自分の行動が考えなしで子どもっぽいものであったか思い至り、とても恥ずかしくなった。だから皆、呆れた顔をして笑っていたのかな。だから最後にはもういい加減帰れと怒って追い返したのかな。でも白い髭の長老は・・・

笑っていたけど、とても優しい顔で笑ってくれたんだけど。
頭の中で色んな情景、色んな顔がぐるぐると巡り、ううと唸りながら頭を抱えこみ・・・次第に胸の奥に、重いものが溜まっていく気分になる。
僕は何をしていたんだろう。何一つ出来ないまま、時間だけが無駄に過ぎていたんじゃないだろうか。

双子の兄妹はよく似た顔を見合わせる。よくそんな調子で、今まで無事に過ごせていたものだと半ば呆れ半ば感心した。何しろこの少年、見目は大変よろしいので、悪心あるものに引っかかりでもしたら何処かへ売り飛ばされていたかもしれない。
また、よくそんな調子で、彼らの長老が話を聞く気になったものだとも思った。
彼らの長老は、言葉だけで動かされるような、甘い人じゃないはずだけど。
彼らの前で、銀の髪の少年は力なく項垂れている。さながら雨に打たれて途方にくれる犬のようだ。
仕方ないな、仕方ないよねと彼らは目で会話して。

「まあ、あなたがどんな条件を出した所で、今のあなたでは空手形にしかならなかったでしょうけど」
「でも、長老たちも、今の人口過密状態と治安を何とかしたいとは思ってるんでしょう。だからあたしたちを遣いに出したのよ。猫の手よりはマシとか思ったんじゃない？もしくは、あまりに莫迦正直だから呆れて心を動かしたのかも」
「猫の手ねえ・・・でも、猫って言うより」
彼らはマジマジとシャールの顔を見て、それから言った。
「犬ね」
「犬だな」
納得して頷く仕草が、それこそ犬か猫の兄弟みたいにそっくりで、

シャールは何だか笑えてしまった。怒りもせず、ただ笑うシャールを不思議なものでも見るような目で彼らは見、それから彼は言った。
「言いたい放題言いましたが。まだ私たちの手が要りますか？」
「もちろん。手を貸してくれる気があるなら」
「わかりました。あなたが望むなら、私たちは力を貸しましょう。交渉でも調査でも、何でもこなしますよ」
あらためて、初めまして。そう彼らは、各々の手を胸の辺りに添え、優雅に礼をする。
「私の名はレンブラント。どうぞレンと呼んでください」
「あたしの名前はリンドグレーン。リン、って呼んでね」
ありがとう、頭を下げたシャールに、彼らは笑って答えた。
「何、あなたの傍にいると、面白いものが見られそうですしね」

リンとレンの兄妹と初めて会った頃のことを思い出しながら・・・シャールは内緒だけどねとジルファに言った。
「なんだかね・・・年の近い友達ってこんな感じかなあって思ったりするんだ。ふざけた事言ったり、仕様も無い事したり。楽しいって思ってて、いいのかな？」
「もちろん、それでいいんだよ」
いつになく優しい声に、シャールはとても安心したのだった。

風が吹いている。湖面を渡る風はひんやりと冷たい。双子の兄弟の力を借りて、少しずつであるが街の有力者たちのとの交渉も進んでいる。焦らず気長に行きましょう。そして機会を捉えたらそれを逃さず一気に畳み込む。
彼らから色んな事を教わるのは、ジルファから教えてもらうのとは違った意味で楽しかった。
「さ、そろそろ戻りましょうか・・・おや？」
彼は額に手を翳し、空を見上げる。シャールもつられて同じ方向

を見上げた。空は何処までも青く高く・・・雲ひとつ浮いていない。そこへぽつんと点が浮かんだかと思うと・・・見る間に近づいてきた。
空の青より青い羽持つ鳥・・・ジルファだった。
ジルファはシャールの頭上で優雅に旋回した後、ふわりと肩に舞い降りた。
「ジルファさん、何かあった？」
彼も彼女も、ジルファの事をシャールの使い鳥と思っているようで、シャールが話しかけていても気にはしないようだった。それでもジルファは用心のため、と言って、他の人の前では喋らない。シャールにのみ聞こえる声で会話していた。
『君が今一番気にしている知らせを持ってきたよ』
笑いを含んだ声に、シャールの顔がぱっと輝く。
「産まれたの？」
『ああ、ついさっきね。元気な女の子だったよ』
ユキさんも勿論元気さ。
「そうか・・・よかった。ねえ、お祝い何がいいかな？いつ顔見に行こうかな」
うきうきと矢継ぎ早に話すシャールに、青い鳥と彼は、苦笑気味に視線を交わしたのだった。

「おう、よく来たな。ま、上がれや」
いつも入る店側とは反対側。通りの奥、住居側からシャールは扉を叩いた。しばらくしてヤツカが顔を覗かせ、にやりと笑う。扉をくぐり、ヤツカの後について歩きながら、シャールは祝いの言葉を口にした。
「おめでとう、女の子だってね」
「おうよ。ユキに似て、将来美人になるぜ」
ヤツカの足取りも声も、羽が生えたように軽くて、嬉しそうだ。

新しく生まれた命を・・・家族を、心から歓迎している様子に微笑ましくなり、シャールはこっそりと笑う。
そして、奥まった静かな部屋の前で立ち止まると、ヤツカはドアをそっと叩いた。
「シャールが来たぜ。今いいか？」
どうぞ、とユキの声が聞こえて・・・シャールはヤツカに促され、扉をくぐった。

柔らかそうな白い布を抱えたユキが居る。シャールがまず見たのはそれだった。

「いらっしゃい、よく来てくれたわね、ありがとう」
「ううん・・・おめでとう。女の子だってね」
「そうよ～。この人ったら、今から“何処にも嫁にやらん”なんて言っちゃって」
「娘はやらんぞ」
「これだもの～年頃になったら嫌われるわよ」
くすくすと笑いながら、ユキは腕の中の小さな赤ん坊を抱いている。赤い顔をして、目を閉じている赤ん坊。
顔を見ても、ユキとヤツカ、どちらに似ているかは、シャールにはわからない。
「ユキに似て美人だろう？」
シャールは曖昧に、可愛いねと答えるよりなかった。シャールの困惑を知ってか、ユキは笑っている。
「ああそうだ、コレお祝い。よかったら使って」
「あら、ありがとう。子どものおもちゃね？」
握ると音が鳴る、布製のおもちゃ。祝いに何がいいか双子の兄弟に相談したところ、そういう物がいいんじゃないかと言われたのだ。
優しい桃色のそれは、大人の手のひら大の大きさで、生まれたての赤ん坊の手には余りあるようだった。

「・・・赤ん坊って、こんなに小さいんだなあ・・・」
目を閉じた赤ん坊をまじまじと覗き込むシャールに、ユキは笑う。
「そうよ。でもこんなに小さいのに、泣くときは何処からこんな力が出るのかと思うくらい、びっくりするくらい大きな声で泣くのよ」
「そうなんだ・・・」
ユキは優しい顔で赤ん坊を抱いている。いつまで見ていても飽きないというように、顔を覗き込んで。
母さん。シャールはふと思った。母さんも・・・あんな風に僕を抱いていたのだろう。柔らかな眼差しと声を、僕にくれたのだろう。あなたが此処に居てくれて嬉しいわ。そんな思いが目に見えるような・・・顔で。
記憶の中に残っていなくても・・・それがあったはずだと、シャールは疑いなく思う。
「それで、この子の名前はなんていうの？」
生まれる前に、男の子でも女の子でも、名前は決めているとユキは言った。内緒だからと、いくら聞いても教えてもらえなかったのだけど。ユキさんはふふと笑って、答えた。
「スズ、よ。・・・悪いものを祓う金属の名前。そして綺麗な鈴の音の名前。この音も可愛いわね」
ユキさんは僕が持ってきたおもちゃを振る。からんころんと中に入った鈴が、音をたてる。
意味の込められた名前。どうか幸せになりますように、無事に育ちますように。
思いをこめて、付けられた名前。
名前など・・・いつか自分で選び付けるのでなければ、誰かから与えられるものの一つだ。初めから自分では選べないものだ。惜しげもなく思いをかけて・・・こめて、与える。
母さんも、僕に名前を付けるとき・・・色んな事を考えてくれたんだろう。
「抱いてみる？」

ユキさんは赤ん坊を僕に差し出す。どうしようこんな小さいの落としてもしたら大変だしと慌ててヤツカを振り返っても、面白そうに笑うだけで助けてはくれない。覚悟を決めてそっと抱いた。
「そうそう、首の後ろを支えてね・・・そう、上手ね」
ユキさんはそう褒めてくれるけど、僕は生きた心地がしない。こわごわ抱いているせいで居心地が悪いのか、赤ん坊が身じろぎした。
「名前を呼んであげて」
「・・・スズ？」
初めて口にした名前は可愛らしい女の子の名前だ。ユキさんは“男の子でも”と言っていたけれど・・・もしかしたら初めから気が付いていたんじゃないだろうか。生まれるのは女の子だって。
聞いても答えてくれなさそうだけど。
「スズ」
名前を呼ぶたび、腕の中の子どもの輪郭がはっきりしてくる気がする。
赤ん坊から・・・ユキさんとヤツカの子どもって事から・・・スズって名前の女の子へ。
「スズ」
眠る赤ん坊の名前を何度も呼んだ。その目がこちらを見なくても関係なかった。ユキさんもただ・・・柔らかな笑顔を浮かべて僕たちを見ている。とても幸せそうに。
与えるばかりで、何も返らなくても・・・とても幸せそうに。

『シャール』
『ねえ、シャール、今日ね・・・』

耳の奥で、少女の声がふいに蘇った。犬だった時の僕に、彼女は何度も僕の名前を呼んで、色んな話を聞かせてくれた。歌うように話すそれに、僕はとても楽しくなったものだった。
『大好きだよ』

その好きの意味が、たとえ僕が思うものと違っていても。彼女が僕を大事にしてくれてるのは・・・疑いもない真実だ。
そう・・・ユキさんがスズをとても大切に思っているのにも、似て。

「・・・あれ・・・？」
ユキさんがふと指を伸ばして僕の頬に触れた。なんだろうと首をかしげていると、ユキさんの白い指についた透明な液体と・・・溢れて頬を伝う、もの。
「あれ？」
ユキさんは笑っている。ヤツカも、仕方ないなあと僕の頭を鳥の巣のように掻き回して・・・でも何も言わなかった。
腕の中のスズは眠ったままで・・・とても温かくて。僕は溢れてくる涙を止めることが出来なかった。

胸の中でどろどろに溶けて・・・冷えて凝り固まったモノが、すこし溶けた気がした。

## ～おくりもの～

「わ～ユキさんの子産まれたんだ～」
「うん、女の子だよ。今日顔見てきたよ」
「可愛かった？ユキさんに似てたら美人さんだねっ。ヤツカさんに似てたら、かっこいい系になりそう」
「・・・・小さくて可愛いとは思うけど、まだどっちに似てるかなんて僕にはわからないよ・・・」
「そうなの？う～んと、名前はなんていうの？」
「スズ、だって。可愛い名前だよね。ユキさんがつけたんだよ」
「そうなんだ～。あたしも早く会いに行きたいな～。スズ、かあ～・・・あ」
「なに？」
「へへ、ちょっとね。いいアイディア浮かんだのっ」
「何のアイディア？教えてよ」
「ないしょ～。今度会うときまでのお楽しみっ」

通信球ごしにも、とてもうきうきと楽しそうな少女。
彼女の“内緒”が何か・・・今度会うときが楽しみだと、僕は思った。

「じゃあ、またね」
パソコンのモニターごしに手を振れば、画面に映るシャールも、またねと手を振りかえしてきた。銀の界に居るシャールとは、スティールには簡単に連絡出来ない。急ぎの用でなければ、時々銀の界に行くジルファに伝言を頼むこともある。そして急ぎの用事の時は、リルフィかジルファに頼んで、銀の界へと自分の声と姿を届けてもらっていた。
何、こちらの通信と似たようなものだよ。ジルファは器用にウインクして、どういう仕組みなのと尋ねたスティールに、そう答えた。
そうね、同じようなものかしらね・・・現象においては。リルフィはそっけなく、言葉を付け足した。
起動させて繋げば・・・相手の姿を見ながら会話が出来る。それが“同じこと”。介在するものが、こちらの界であれば機械と電波なのに対し、あちらの界であれば通信球と呼ばれる“魔法”が作ったモノと“君の力”であるというのが・・・“違うこと”ね。
ふうんとスティールはことりと首を傾げる。結果出来る事が似ていても、成り立ちや経過がえらく異なるモノなんだなあと思った。それでも、結果が似るという事は・・・“そういうモノがあったらいいな”と思う事自体は、どの界においてもあまり変わらないのかもしれない。
この界には通信球がないから、この機械から銀の界へ通信できるようにしておくね。ただし、いつもは使えないよ、私かリルフィに頼んで、あちらと繋いでからでないとね。
ジルファがのんびりと言ったとき、リルフィは目を剥いて驚いていた。
え、そんな事出来るの？というか、こちらの機械とあちらの力って・

・・馴染むのかしら？反発がありそうだけどと首を捻るリルフィに、あはは、それが出来るんだよとジルファは羽を振った。
ちょっと小さな部品を付け加えるだけで、オッケーなのさ。何、疑ってる？
いいえ～？疑うってより、胡散臭いだけ。まあいいわ、それ安全なんでしょうね？トラブってスティールが怪我でもしてみなさい？その顔抉るわよ。
ひどっ、私ってそんなに信用無いかい？安全なのにねえ・・・。
何故だか・・・その時ジルファは視線を上のほうに向けた。

仕組みはスティールにはさっぱり分からない。リルフィも、「・・・多分、こちらの機械とあちらのモノを馴染ませるための・・・媒介があるんでしょうよ」と唸っていた。あの男、やっぱり胡散臭いわと低く呟いた声は、ちょっと物騒で、聞こえなかった振りをしたスティールである。
シャールと話ができるんだと、嬉しく思ったスティールだったけど、こちらの界での長電話のようにはいかない。何しろ話している間中、リルフィかジルファに繋いでいて貰わないと駄目であるから・・・滅多な用事では使うのも気が引けるのだ。
まして通信を使わなくても、週末ごとに会っていたから・・・いつも傍にいた温もりがない寂しさはあったものの・・・それで十分と思っていた。
　今回リルフィに繋いで貰ったのは・・・ユキさんの子どもが産まれたかどうか、気になっていたからだ。

通信を切り、クローゼットを開けて服を引っ張り出していると、怪訝そうな声でリルフィが尋ねた。
『これから出かける気なの？』
　日はまだ高いが・・・何処かへ出かけるには些か時間が足りないのではと思う。

「うん、ちょっと買い物。リル、繋いでくれてありがとうね」
『どういたしまして、お安い御用だわ。でも買い物ってなに？』
「へへ、ユキさんの赤ちゃんのお祝い、買いに行くの」
探しに行くの、ではなく、買いに行くのと言う少女に、リルフィはおやと思った。
『あら、もう目当てはあるのね？なあに』
「あのね、赤ちゃんの名前が、スズなのね。だから、綺麗な音の鈴、あげようと思って」
お家の窓辺につるしてもらってもいいし、お店のドアにつるしてもらってもいいかなあって思うんだけど。
お店だと、お客さんが来る合図にもなるしねっ。
嬉しそうに話す少女を見ていると、自分まで心が和む。リルフィはいいんじゃないと同意した。
『いいんじゃない？それに、知ってるかしら？鈴の音は魔除けにもなるのよ』
「ほえ？そうなの？じゃあ丁度いいねっ」
適当に選んだカットソーの上に丈の短い上着を羽織り、ジーンズを穿いて、財布の入ったポシェットを肩から掛ける。部屋を出る前に大きな姿見の前でくるりと一回転して、自分の姿をチェックする様は・・・少し前までは少女になかった行動の一つだ。
すっかり年頃の娘らしくなっちゃってと、内心リルフィが思っていることなど、勿論スティールに分かるわけもなく。
「じゃあ行ってくるね」と元気な声を残し、少女は出かけていった。

『スズ・・・ねえ・・・』
止まり木に止まり、ひとりリルフィは聞かされた名を呟く。魔除けの力があると言うモノの名。そして魔除けの力があるという・・・金属自体の名。
『何を思って・・・そんな魔除けの力を込めた名を贈ったのかしら、ね？』

その子自身に、どんな災厄も降りかからぬようにと祈って？
それとも・・・その子自身が、降りかかる災厄を祓うものになればいいと望んでか？
まあ・・・どちらを思って名づけたにせよとリルフィは窓越しの空を見上げて呟いた。

『いい名前ね』

## ～かがり火～

「・・・ところでお前さん、身を固める気はないのかい」
全く・・・本当に欠片も今までの話題と関連しない話題が飛び出したので、返事も忘れて僕は皺深い顔に笑みを浮かべた、まるで好々爺といった人物を見つめてしまった。
胸の辺りまで伸びた白い髭を指先にくるくると巻きつけながら、どうなんだねと明るい色の瞳は問いかける。
あまりに意外で・・・あまりに予想外の事を聞かれたために、僕はしばらく茫然としていたらしい。
「何言うんですか。そんなこと、考えてもいませんよ。何故急に、そんな事言われるんですか？」
「いや、なに・・・」
老いて肉の落ちた腕が、テーブルの上に置かれた薄い冊子を取り上げ、まあ中を見ろと僕に差し出してくる。
同じような冊子が、何冊も積み重ねられていた。
「一体何ですか・・・これ、って・・・」
薄い割にはきちんと表装された冊子だなあ。そう思いながら開いた冊子にあったもの。それはこちらを向いて微笑んでいる、若い女性の肖像画と、氏素性や趣味などが書かれた紙だった。
目の前の好々爺は、ますます笑い皺を深くして、僕を見ている。まさかと思って、残りの冊子を開いてみると・・・やはり、というか。
開いても開いても、出てくるのは若い女性の肖像画と氏素性などばかり。最後の一冊を閉じて、僕は尋ねた。
「これを見て、僕にどうしろとおっしゃるんです？」
「おや、お気に召した子はいなかったかね。それじゃあ・・・」
何やら僕にとっては困る展開になりそうだったから、慌てて失礼

かとは思いながら言葉を遮った。
「いえ、もう結構です！本当に、これは何のおつもりですか」
思わず語気を強めて言うと、おや、わからんのかねと惚けた顔で笑われた。
「もちろん、見合いのための釣書じゃよ」と。

「見合い・・・です、か？」
ああ、これが釣書と言う奴かと、他人事のように感想を言うと、ふううと心底呆れたため息が返ってきた。
「まったく、お前さんがそんなだから、周りが気を回すんじゃ」
もしくは、自ら売り込んでくるんじゃよと。
全く話が見えない。首を傾げていると、冊子を広げ、指差してきた。
「これは西の街の商人の娘、これは東の街の長老の孫、これは・・・」
「だから、何で僕が見合いの話が来るんですかっ」
悲鳴のような声を上げると、本当にわからんのかいと言われて・・・大きく首を縦に振る。
そうしたら・・・何故だか、またため息をつかれたけれど、それはさっきのものとは違うみたいだった。
「わからんのかい・・・？それは勿論、お前さんの血筋を残すためじゃよ」
「血、すじ・・・」
「界の安定の為と言う名分でな・・・煩く言い立てる者もおってな。他の者からじゃあお前さんが見もしないだろうと思ってか、皆この老いぼれに押し付けおったわ。まあ・・・よく翻る手のひらかと思わぬでもないが」
その釣書を持ってきた中には、ほんの数年前までお前さんをよく思ってなかった者もおるゆえな。
「別に・・・前どう思われていても、今ちゃんと僕を見てくれるな

ら、それはいいんですけど、でも」
　僕は広げられた冊子を全て閉じて、もとのように積み重ねる。それを押しやって、言った。
「このお話は受けません。そう、皆様にはお伝え願えませんか」
　お手数ですがというと、ほっほっほっと笑い声が返ってくる。
「そう面倒でもないさ。まあお前さんが断るじゃろうと思っとったからな、いい返事は期待せぬようにとは言っておった。まあこれに懲りず、話は次々持ち込まれるじゃろうがな」
　それは覚悟しておけよと言われて、困惑する。何故今になって。その思いが表れていたのだろう、笑い声から一転、静かな声が、それはなと言った。
「それはな・・・この界もだいぶ落ち着いてきて、豊かになってきた。以前は君が直接支配していたが、それも長老会を中心とした制度に変わりつつある。そこで問題に・・・あるいは、注目されたのが、お前さんの立場じゃ」
　わかるか？目で問われる。
　僕が？目をみはり首を傾げて・・・腕を組んで考えても、さっぱりわからない。あっさり白旗をあげると、今回はもう少し考えてみなされや、頭は何のためのものなんじゃいと意地悪は言われなかった。
「それはな。銀の君の血筋に、己の血筋を混ぜること、或いは、己の血筋に、銀の君の血筋を取り込む事じゃよ」
　僕は混乱した。銀の君の血筋はいまや僕一人。界を安定させる役目を司るのも僕一人だ。たとえば・・・金の界では界の初めからただ一人の金の君がその役目を担っている。ここ銀の界では、“君”の力は“血筋”によって伝えられるものとなり、歴代の“王”がその役目を担っていた。そして“王”は婚姻や血の珠などによって、“君”の力を他者に分ける事も出来る。
　もしも僕が誰かと結婚すれば・・・その相手には“力”を分ける事が可能だし、また生まれてくる子どもには“君”の“力”が伝わ

るだろう。もしも・・・今僕に何かあれば、“君”の力が行き場を失い、界の安定が危うくなるかもしれない。
「それはもしかして・・・僕に何かあったとき、界が不安定になるかもしれないから、血筋を残せという事なんですか？」
その方がいくらかでもマシじゃと明るい色の瞳を細め、ふうと細い息をつく。
「全くお前さんはこちらの方面に本当に鈍いのじゃな。それがいい所であるんじゃが・・・こやつらはな。界の存在そのものを己が手に取り込みたいんじゃろう」
“君”の力を分け与えられ、或いは己の血筋に取り込みさえすれば、それが出来ると、本気で思うのが愚かしいがなと続けられた。
「お前さんは先の王や王妃と違って、権力には興味を示さんし、見た目が大人しくあるしな。御しやすいと思われたんじゃろうて。思い違いも甚だしいがな。覚えておるぞ、とんでもない嵐を何度起こしてくれた事か」
「何度って・・・精精二回か三回ですよ。その時はご迷惑おかけしました」
「おうそうじゃったかな・・・春を遅らせてくれた時には、私は長老会で吊るし上げを食ろうたんじゃわ。今思い出しても冷や汗がでそうなほどじゃ」
春を遅らせた・・・その件を言われると僕は謝るしかないのだけど、それだって一因はこの人にもあるんじゃないかと思う。この人の言葉で、僕はあの場に行ったのだし。ただ、いずれは会わねばならない人と会えたし、結果色々なことの・・・自分の、そしてあの場に居た他の人たちの転換点にはなったのだと思うから・・・その意味では感謝もしていた。
けれど。
僕は思わず笑った。だって。
「この血を己の血筋に取り込んでも・・・いい事はありませんよ。それどころか厄介ですよ。“君”の役目を担わされる・・・望むと

望まざるとに係わらずね。己の娘や孫が可愛いなら、僕と結婚させようなんて思わない方がいい」
「お前さんは、ずっと一人身のまま過ごすつもりなのかね？」
さあと僕は答える。けれど・・・誰にも言った事はないけど、半ば心に決めていることがある。
それを見抜いてか、まるで孫でも見るような・・・優しい目をして、言われた言葉。

「お前さんに、あれこれ煩く言うつもりはないがの。ただの。諦めることだけは、してくれるなよ」
色々な事をな。

その言葉と、皺だらけの指先で頭を撫でられた事。
それを僕は、忘れられなかった。

## ～空を指す～

ぽかんと目をまん丸にして、あたしを見上げるひと。
とてもじゃないけど、年だけでいうなら、あたしの父親でもおかしくない人っていうのが、信じられないくらいの、幼いと言ってもいいような表情を浮かべている。
予想外の言葉を聞かされて、言葉の意味をもう一度確かめるみたいな。
言葉の意味を何度も確かめる、子供みたいな。
あたしは笑い出しそうになるのを堪えた。だって、ここで笑ったら、全部おしまい。今までの関係を崩すかもしれない、そんな危険を承知の上で、言ったことが無駄になってしまう。
宝珠みたいに綺麗な目も、眩い銀の髪も、あたしが小さかった頃から全然変わらない。違うとすれば、髪の毛が、今は背中の真ん中辺りまで長く伸びていることくらいしか。
お前はちっとも変わらないなあ、俺は見ろ、こんなに白髪が増えてさあと、以前は黒々としていた髪に、だいぶ白いものが混じり始めた父さんに、この人はなんと言っていたっけ。
どうやら僕はそういう質みたいだね。仕方ないんだよと。
そう言って笑った・・・言葉の意味と、表情の意味。あのときわからなかった事が、今ならわかるわ。

そのうえで、あたしは言っているのに。

この人は・・・困惑した視線を上下左右に泳がせて、仕舞いにはあたしから視線を外してしまった。あたしが真っ直ぐに見つめているのに。俯く様子は、まるで物慣れない、途方にくれた子供のようですらあって、あたしは罪悪感なんて覚えてしまうけど。困らせるつもりじゃないけど・・・ねえ。

それでも。
「ねえ、あたし、まだ返事を聞いてないんだけど」
イエスかノーか、その二つしかないでしょ、答えてくれないの？
返答をねだるあたしの言葉に、顔をあげて力なく微笑む。
「・・・僕は駄目だよ・・・」
「駄目ってなにが」
「君よりもだいぶ年上だし、君を生まれる前から知っているし、お父さんお母さんだって承知しないだろうし・・・」
並べ立てられる“理由”に、あたしは鼻で笑った。そんなの、は。
「理由になんないわ。ねえ、二つしかないでしょ？あたしが好きなら受け入れて。で、あたしが嫌いなら、どうぞ断ってくれていいわ。ね、至極簡単。何も難しいことなんてない」
難しく考える必要なんて無い。違うの？
追い詰められたような白い顔で立ち尽くす人の手を、あたしは取り上げる。細い白い指先を、体温を分けるように握りしめる。逃げ場なんか、作ってあげない。何か言いかけて、でも唇を噛み締める人は・・・それでもあたしの手を振り解きはしない。
ねえ・・・あたしを諦めさせる為の嘘も吐けないなんて。
それを知っていて、答えをねだるあたしが、きっと一番酷いのかもしれないけど。
「ねえ、もう一度言うわ。あたしはあなたが好きなの。あたしと一緒になって下さい」
返事はない。冷たくなった指先が震えていて、動揺を知らせる。あたしが握る程度の力なんて、あなたなら簡単に振り払えるはずでしょうに。しばらくして、掠れた声が呟く。
「・・・駄目だよ」
「それじゃ答えにならないわ。あたしが嫌い？」
「嫌いなはず、ないじゃないか」
「なら、あたしが好き？」
綺麗な目に、揺れる感情すべてを映して、あたしを見下ろす人。

生まれたときからあたしを知っている、生まれたときから、あたしが知っている人。
返ってきた言葉は、なかば予想していたものだった。
「・・・生まれた時から知っていて、家族みたいにつきあってきたんだよ・・・嫌いなはず、ないじゃないか」
家族。その言葉で、あたしは気持ちを拒絶すらしてもらえないの。
それって、とても酷いわ。この人は酷い事を言っているって・・・気付いているのかしら。
あたしの気持ちは駄目だと言う。そして嫌いではないとも言う。
かといって、好きだとは言ってくれない。
酷いけど。・・・そうね、半分は予想していた答えだけど。なら、いいわ。
あたしは握った指先を持ち上げ・・・唇を落とす。途端に、慌てたようにあたしの名を呼んで、それでも指先を振り解こうとしない人は・・・顔を赤くしていた。
「あなたはあたしを、あくまで家族みたいにしか見られないっていうなら。あたしは、あなたがあたしをちゃんと好きになってもらうように行動するわ。家族じゃなくて、って意味でね」
これは、そのための宣言よと、にこりと笑ってみせる。好きになった人が、どんな人か・・・物心つく前から傍に居たあたしは知っている。あたしに隠した本心も多分。
でも、あたしが知っているってこと、まだこの人には言わない。言わない方が、きっと、いいのよ。
お願いだから・・・色んな事を諦めてしまわないで。
もっともっと、我侭に望んでくれていいのに。
そんな願いは綺麗に胸の奥に仕舞い込んで、あたしは勝気に笑ってみせるわ。
「スズ・・・きみ、何処でこんな口説き文句、覚えてきたの・・・

？」

落ち着かなさげに・・・空いた手で、銀の髪をしきりにかきあげた後・・・諦めたようなため息とともに、ようやく笑ったひとに。

あたしは、何処でもないわよと、澄まして答えたのだった。

## ～星の群れ～

「とうに知っていたさ」
俺がそう言った時の、奴の顔は見ものだった。

王城のある街の一角の、通りから一本中に入った場所に、その食堂はあった。店はこぢんまりとしていて、切り盛りするのは料理を作る主人と、料理を運び、接客する妻、そして時折可愛らしい娘も手伝いに加わっている。
良心的な値段ながら、美味しくてそして、時折変わった料理が出てくると評判の店である。

昼飯時の忙しさが一段落した頃。食事をしている客は数人居るが、追加で注文は入ることはなかろうと、食堂の主、ヤツカは頭に巻いた色鮮やかな布を解いた。最近は治安もよくなったため、昼だけでなく夜も食堂を開ける。夜に備えて、遅い昼食を摂り、少し休もうかと、鍋を振りっぱなしで強張る腕を揉んだ。
厨房の奥、店にいる客の様子が見える位置に椅子を持っていき、腰を下ろす。妻のユキは一足先に昼食を済ませ、夜に使う食材の買出しに行っていた。さあ食べようかと肉団子と白菜のスープが入った皿を持ち上げたとき・・・涼やかな鈴の音が聞こえた。
店先に吊るした鈴が、来客を知らせる。ちりん、ちりんと鳴る鈴の音は、どんな喧騒もやすやすと突き抜けて耳に届く。けして大きくはない音であるが、清涼で凛としたその音を、ずっとヤツカは気に入っていた。
休憩はもう少し後か、仕方ないとヤツカはため息を殺し、再び布を頭に巻いて店に出る。
「へい、らっしゃい。何にしましょうか・・・と、おまえか」
やって来たのは、ヤツカのよく知る人物で。ここ十数年、家族ぐ

るみでつきあいのある人間だったから。
そんな気安い言葉が口をついて出た。
奴は口の端だけで笑って、ユキさんとスズはと尋ねてきた。
「ユキは買出し。スズは、友達の所だが」
何か用でもあるのかと尋ねようとして、途中止めになる。食事を終えた客が、立ち上がったからだ。
ちょっとそこらへ座っとけと身振りで示し、ヤツカは代金を受け取って、ありがとうございましたと客を送り出す。つられるように、残っていた他の客も席を立ち始めた。
美人の奥さんに見送られないのが残念だけどと言う常連客に、俺の見送りじゃ不満ですかいと軽口で返し、そうして最後の客を送り出した。クローズの札を表のドアノブにひっかけ、扉を閉める。・・・ちりん、と鈴が鳴った。
空のテーブル、空の椅子が並んだ店内は、さして広くないが、途端にがらんとした印象に変わる。
客で埋まっている時には、狭いとすら感じるのに。人と、話し声と、食器が触れ合う音。それらが無いこの場所は、空の箱のようにも見える。
外と店内を隔てるのは、一枚の扉。けれどその一枚で外のざわめきも人通りも、たちまち遠いものになる。
さて、とヤツカは頭の布をとき、油やソースが飛んで汚れた、前掛けのポケットにねじ込んだ。そして隅の席に腰掛けた来客に向き直る。頬杖をついて、ぼんやりと窓の外を眺めている様子の・・・白い、血の気の薄い顔を上から眺めおろして、眉をひそめた。丁度そのとき、視線に気付いてか顔を上げた奴と目が合う。
それをどう捉えたのか・・・花が萎れるように、表情が曇る。
「遅い時間にごめん・・・夜の仕込みがあるんだっけ。忙しいよね」
邪魔してごめん。早口に言って、腰を浮かせかけるから。細い肩を両手で掴んで、椅子に座らせた。
「そうじゃねえよ。仕込みくらいお前と話しながらでも出来る。そ

れに今から昼飯兼休憩だ。つまり全然、忙しくない。だから、おまえもつきあえ」
「え・・・でも」
「昼、まだなんだろ？今更何遠慮してんだ」
ちょっと待ってなと言い置いて、返事も聞かずに厨房に戻る。鍋に残っていた鳥肉とブロッコリーのシチューと、パン。サラダに果物。それらをテーブルに並べてやれば、俯いていた顔が綻んだ。食べ物を見て、嬉しそうに出来るなら、まだマシだなと思う。
自分も厨房に置いた皿を持って来る。
「食べようぜ。俺もいい加減腹減った」
「・・・いただきます」
匙を手にした奴を見て、ヤツカはこっそりため息をついた。何だか手のかかる子供が、もう一人増えたみたいだなと。

他愛ない近況を話しながら、食事は済んだ。ヤツカは最近の新作料理の事や、店内を少し改装しようかと考えていることなどを。客は最近の界の様子や、これからもっと勉強できる場所を増やそうと考えているんだなどということを。
いつでも話せるような、話した傍から忘れてしまっても構わないような・・・優しい柔らかな話題ばかりを。
「ごちそうさま、おいしかった」
綺麗に空になった皿。結構な量があった料理はすべてなくなっていた。食べられるようなら少しは安心かとヤツカは思った。
「お粗末さまで。なんか飲むか」
「うん、ありがと、もらう」
皿を下げ流しに置いて、ヤツカは茶ではなくワインの瓶を手に取った。
まあ素面で言うのも聞くのも、ちょっとなあ。つきあいが長いとはいえ、言うのに何とも照れくさいと言うか・・・勢いがないと言

えない言葉はあるし。
店内を覗けば、客はまたテーブルに頬杖をついて、ぼんやりとしていた。まったく、おせっかいだと思うが、性分なのは仕方ない。それに。ヤツカはまだ、苦い思いを抱いているから。
「ほら」
目の前に置かれたグラスに、きょとんと目が丸くなる。半分ほども注がれた、紅いそれは・・・。
「え、お酒？」
「たまにはいいだろ。見た目お前そんなだけど、年齢だけで言えば、いい年なのにな」
「いい年ってね」
苦笑しながらグラスを揺らす奴は、見た目年齢だけでいうなら娘のスズと変わりないくらいだ。けれど、中身が見た目に引きずられるのか・・・特にある事に関しちゃちっとも成長してないように思うのだ。
「そう言われたくなきゃ、ちゃんと飯くらい食え。最近マトモに喰ってないだろ」
「あ～・・・わかっちゃったんだ」
「分からない方がどうかしてる。あんな酷い顔色してて」
「他の人には何にも言われなかったのになあ・・・」
呟く奴の頭を、ぴんと指ではじいた。他人を見くびるなと。
「他の奴だって、気付かないわけあるか。でもお前はいい年したオトナだろ？自分で何とかするだろうし、しなけりゃ問答無用で食わせてやるくらい思ってて、様子見でもしてたんじゃないか？」
ああ多分そうかも、と力なく笑いながら答えた奴の頭には、思い当たる誰かが居ることを窺わせ、それにまた、安心する。
そう、あれから何年だ・・・十年以上が過ぎて、この界もだいぶ落ち着いている。
いつ自分の命が無くなるか、自分の大切な人が失われるか・・・常に脅え、“厄災”がわが身に降りかからないようにと息を潜める

ようにして暮らしていた、あんな酷い時代を知らない子供たちが増えていて・・・それはとても幸せな事だとヤツカは思っている。
あんな、心をヤスリで削るような思いは二度としたくない。
同じ過ちを繰り返させないために、抑止力となるように、起こった出来事は伝えなければならないけれど・・・。
奴の近くにも、ちゃんと信頼できる誰かが居るって事は、とてもよい事だ。
もし・・・もしも何処かで奴が間違っても、それを諌めてくれる人が居ることは。
「オトナねえ・・・まあね、それだけ年、離れているのにねえ・・・」
困ったように呟き、ちらと目を上げてこちらの顔を窺ってくるから、なんだと眉をあげた。手の中のグラスを揺らし・・・一口ワインを飲んだ後、あのね、と漸く話し出す。
「あのね、ヤツカ・・・僕、スズにね・・・・」
言葉はそこで途切れ、待てど暮らせど続かない。唸りながら顔を赤くして、結局俯くから、やれやれとヤツカはからかうような口調で言ってやった。
「何だ、スズに押し倒されでもしたか」
「っ、なんてこと言うんだよっ。そうじゃなくて・・・結婚してって言われた」
「ほ～そうか」
「・・・驚かないの？」
赤い顔を片手で隠し、上目遣いに睨む奴は・・・全くどう見てもヤツカと同年代には見えない。どうかすると娘のスズよりも幼い部分が目に付いてしまうのだけど。
「とうに知っていたさ。スズが、お前を好きだってことくらい」
見てりゃわかる。気付かなかったのはお前くらいだと言ってやると、いっそ気の毒なくらい肩を落とす。
「野暮を承知でついでに聞くが、お前はなんて答えたんだ？」

答えを聞く前から予想はついていたが、尋ねてみると案の定首を横に振って答えた。
「僕は・・・駄目って言ったよ。嫌いじゃないけど、それは家族みたいに思ってるからって」
「で、あいつはそれで諦めるってか？」
「ううん・・・そんな言葉じゃ納得できないって。家族じゃない意味で好きになってもらうって言われたよ」
流石俺の娘と、ヤツカは内心喝采を送る。ヤツカにしてもユキを口説いて結婚するまで、色々紆余曲折があったのだ。一度断られたくらいで、引き下がったりはしなかった。
「いいんじゃないか。お前がスズの気持ちを受け入れられないってのは、お前の勝手だが、お前を振り向かせようとするのはスズの勝手だ。まあお前が迷惑で仕方ないって言うなら、それこそ仕方ないけどな」
そうなら、きっぱり断ってやれ、下手に期待は持たせるなよと言うと、迷惑とかじゃなくてさ、とグラスを手の中で揺らして、奴は遠い目をした。
「ちょっと思い出したんだ。僕があの子に好きだって言って・・・家族みたいに好きだって答えられた時のこと。それと同じ答えを、僕はスズにしたんだなあって。そしたら何だか自分が嫌になった」
家族だから・・・だから、特別な意味で好きになってもらえないの？ずっと傍に居たいのに。
そう泣きそうな目で、肩を震わせて痛々しい言葉を吐いた日は・・・幸いにもう遠い。
危なっかしい足取りに気をもみながらも、ちゃんと歩いて・・・こいつは今の場所に居るから。
「ふうん。それ、お嬢ちゃんに言われて、お前お嬢ちゃん嫌いにな

ったか？」
「そんなわけ無いよ。嫌いになんてならない。ただ、悲しかったのを覚えているから」
スズには、そんな思いさせたくないのにと言う奴には悪いが、ヤツカは自分の娘を可愛がっているが、親莫迦ゆえの盲目にはならなかった。
アレは結構計算高いぞ？お前の答えも半ば予想済みだと見たぞ？
その上で告白したとなれば・・・あの娘なりに勝算ありと見てるんじゃないか？
けれど娘可愛さに、告げることはしない。代わりに言ったのは別のこと。
「聞くけどよ。お前が駄目って言うのは・・・“家族”って理由だけか？他にも何かあるのか？」
「・・・僕は、この厄介な血に、他の誰かを巻き込みたくないんだよ。母さんのように」
「そのために、降るような縁談も断り続けてるってわけか」
「好き好んで、僕みたいなのと結婚しようって人の気が知れないけどね」
「おい、俺の娘は好き好んでお前と結婚したいって言ったはずだがな」
「ごめん、言葉の綾だよ・・・でもね、僕は僕一人で終わらせた方がいいんだよ。後に続く何かを残したくない・・・それが不幸なら尚更」
あれから年月は過ぎ。生まれた赤ん坊が大きくなるほどの時間が過ぎたのに、こいつに付いた傷はまだ癒えてない。それを思い知らされる言葉に、出てくるのはため息しかない。
それは、自分も含めた・・・回りの不甲斐なさに対してだった。
「スズに、幸せになって欲しいんだ」
生まれたときから知っている、ヤツカの娘のことを・・・きっと年若い叔父か、兄のような気持ちで見守っていたのだろう。心から

願う言葉に、親として嬉しいとは思うけれど。
「俺も勿論そう思うぜ。だがな、幸か不幸かなんざ、自分が決める事だ。回りから見たら不幸な事でも、本人にしたら幸福なことだってある。そりゃ親としちゃこんなふうに幸せになって欲しいって思い描く事はあるさ。だけどな・・・それは、言ってみれば親の勝手な願いなんだよな」
「・・・勝手な願い、なのかな・・・」
「そうだろうよ。だってスズの思う“幸せ”は、お前抜きにはないんだろうが、お前が描くスズの“幸せ”には、お前は居ない方がいいと思ってる。まあ・・・俺が言うのは何だがな、“家族”って理由だけで、あいつの気持ちをなかったものにするのは、止めといてやってくれや」
　それだけは、俺からも頼むわと言った。
しばらくして、うん、と頷いた銀の頭を、力一杯くしゃくしゃにすると、途端に盛大な抗議の声が上がる。
「何するんだよっ」
「いや、丁度いい所に頭があったからな。ま、しばらく悩め青少年。今から枯れるには早いぞ」
なあ、俺は未だに後悔しているんだ。あの時、お前の手助けとなれなかった事を。だからどうか。
　おまえこそ、幸せになってくれ。そうしたら、俺もやっと安心できる気がするから。
　これも、俺の勝手な願いって奴なのかもしれないが。
冗談めかしたヤツカの物言いに呆れた顔をして、それでも反論は返って来なかった。
「じゃあ、ほんとご馳走さま。ユキさんにもよろしく」

「ユキだけにか？」
「〜〜〜っ、スズにも、よろしくっ」
またねと扉を開けかけて・・・ああ、言い忘れてたと奴は振り返る。
「スティールが、今度子供連れて来るからって。新作お菓子楽しみにしてるって言ってたよ」
「わかった。腕振るうから楽しみにしといてくれって伝えてくれや」
「わかった・・・それじゃ」
ちりん・・・ちりん。澄んだ音色を響かせ、扉は閉まる。
外界から遮断されたように、店の中に静けさが満ちる。格子模様の布がかかったテーブルの上にも、厨房にも、午後の眠そうな光が落ち・・・水底へ沈められたように。
しかしそれは、束の間のこと。再び鈴の音が響いたかと思うと、大きな紙袋を抱えた娘が入ってきた。
いかにも重そうなそれを、テーブルの上に下ろす。
「ただいま〜ああ重かった」
「どうしたんだソレ」
「そこで母さんと会ってね、持って帰って頂戴って頼まれたのよ。母さんもすぐ帰ってくると思うわ」
袋から覗く食材は、自分が頼んだ以上の量だが・・・まあいいだろう。ヤツカは頭に布を巻きつけると、腕を回しながらさて、と厨房に立った。
「仕込み始めるから、手伝ってくれるか」
「了解。あ、そうだ父さん、今度あたしにお菓子とか料理作るの教えてね」
「へ・・・お前作れるだろ？てか、作ってるだろ？」
「もう一度基本から叩き込むのよ。いいでしょ？」
「まあいいけどよ・・・」
呟きながら、ヤツカは大声で笑い出しそうになるのを堪えていた。

なあ・・・いつか笑い話にできるだろうか。こんな時もあったって。

波が立たないように、揺れないように・・・心を凍らせて深い場所に沈めたお前。

その氷を溶かし、目覚めさせる嵐が起こればいいと思っていたけど。

嵐は自分のすぐ傍に潜んでいたか。

「もし、スズの願いどおりになれば、俺はあいつから“お父さん”なんて呼ばれるようになるのか・・・？」

まあそれも面白そうだと、ヤツカは思ったのだった。

ＥＮＤ

## ～星の群れ～（後書き）

ご愛読ありがとうございましたー！！

次はようやく改稿の済んだ「きみのためにできること」を連載します。Ｒ１５ですが、宜しかったら引き続き目を通していただけると嬉しいです。スティールとディーンが出会うことになった元の話になります。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6073t/

百年の眠り

2011年6月23日10時10分発行